
風の終わり

竹内すくね

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風の終わり

【Nコード】

N9258L

【作者名】

竹内すくね

【あらすじ】

小さな村からその身一つで街に向かう少年、トーマ。彼はわがままな少年レオと出会い、ギルドに入る。トーマは多くの人と出会い、別れ、成長していくのだが……。異世界ファンタジーっぽい雰囲気のお話。

新しい風

馬車と言うものは、少年が思っていたよりも快適ではなく、むしろ不愉快極まりない代物でしかなかった。初めて目にした時こそ心は躍ったが、今ではそんな自分を詰り付けてやりたいと思える。何しろ、揺れるのだ。これでもかと言わんばかりに遠慮なく、情け容赦なく三半規管を揺さぶってくるのだ。そも、舗装されていない悪路を走れているだけ奇跡なのである。村に到着した幌馬車の荷台に乗り込んでから一時間。少年の体調は時間の経過と共に悪化の一途を辿っていた。

「う、うう……」

「おい、吐くなら外に吐けよな。ここで吐いてみる、その時はお前叩き落すぞ」

同乗者である青年が心底煩わしそうに言い放つ。

「す、すみ——うつつ……」

少年は風通しの良い場所で蹲り、拷問のような時間が過ぎ去るのを待った。

どうして、こんな目に遭っているのだろと、ぼんやりと考える否、考えるまでもなかった。何故ならば、自分で望み、選んだ道なのだから。

『しっかりやってきなさい。……駄目だと思ったら、いつだって帰ってきて良いんだからね』

母親の言葉が脳裏に浮かぶ。優しい声音はありありと思い出せた。今となっては全てが懐かしい事にさえ思える。住み慣れた村からはまだ、一時間しか経っていないのだが。

乗り物酔いに苦しんでいる少年、名をトーマと言った。彼はこの大陸の北部に位置する村の出身で、こうして馬車に乗っているのは中央の街まで仕事を探しに行く為なのである。一旗揚げて、故郷に

錦を飾ろうなどと大それた事は考えていない。ただ、貧しい村で暮らす皆の生活が少しでも潤えば、そう思っていた。もともと、今はひたすらに、一心になって祈るのみである。早く、この悪夢が終わる事を。

きつく目を閉じ、外界からの情報を遮断してからどれくらい経っただろうか。振動が収まっているのに気付き、トーマは顔を上げる。「お目覚めかい。いや、若いつてのは素晴らしいわな」

御者を除いた唯一の同乗者である青年がからからと笑った。

「……あの、どうして止まっているんですか？」

「外を見てみな」

トーマが恐る恐る尋ねると、青年は先の態度と比べれば驚くほど親しみやすい表情を浮かべる。

「あ、真っ暗だ」

ここがどこなのかは分からないが、今がいつなのかは分かった。

「ジッポウさんが火を起こしてくれてる。若いんだ、手伝ってくればどうだ？」

「ジッポウ、さん？」

「……御者だよ、御者。乗り込む時に挨拶してなかったのか？」

トーマは恥ずかしそうにうつむく。しまった。やってしまった。

これではまるで——実際そうなのだが——礼儀を知らない田舎者である。

「じゃあ尚更行った方が良いな。『ここまで運んでくれてありがとうごさいます』って言うんだぞ」

「い、言えますよそれくらい」

青年は楽しそうに笑っていた。旅が一段落つき、張り詰めていたものも弛緩したのだろう。さっきまで感じていた居心地の悪さもなくなり、トーマの乗り物酔いはすっかり消えてなくなっていた。

馬車の荷台から降り、地面に足を着ける。生き返った気がして、

トーマの類は自然と緩んでいた。

「んん……」

十六年の間、トーマは村を出た事がなかった。大人に混じって近隣の森へ狩りに行った経験はある。だが、ここは全く知らない土地だ。風の音。草木の匂い。土の感触。見上げた夜空。その全てが彼の心を震わせていた。勿論、心細さはある。しかしそれ以上に期待感、高揚感が勝っていた。新しい生活が始まるのだと、トーマははつきりと自覚する。

「やあ、体調は良くなっただみたいだね」

人の良さそうな中年の男がトーマに近付いてきた。彼が青年の言っていた、御者のジッポウだと気付いてトーマは頭を下げる。

「は、はい。お、お陰様で……？」

「はっはっは、済まないね。この辺りの道は少ばかり難しい。揺れてしまうのは、まあ諦めて欲しい。サリーとドライもこんな道が続いて機嫌が悪いみたいだしね」

サリー。ドライ。聞き慣れない名前にトーマは首を傾げた。もしかして、気付かない内に誰かが馬車へ乗り込んできていたのだろうか。

「ああ、いやいや、馬の名前さ」

トーマはこの幌馬車が二頭立ての四輪だったのを思い出す。馬とは言え、彼らもまたこの旅路を共にする仲間なのだ。

「それよりこっちに來たらどうだい？ 温かいスープとパンを用意してあるんだ」

「え、良いんですか？」

「勿論さ。短い間とは言え、私たちはパーティなのだから」

ジッポウは微笑み、トーマを焚き火まで案内する。そこには簡易に組み立てる事が可能な、木製の椅子が二つ用意されていた。それから、火にかけている鍋。僅かに漏れる香りがトーマの食欲を刺激する。

「冬本番ではないが、ここらはまだ肌寒い感じがするね」

「はい、何しろ北部ですから。あ、もう少しすれば雪が見られるかもしれませんよ」

「興味はあるが、その時に何をしているかまだ分からないな。また、別の人を運んでいるかもしれない」

スープを取り分けてやると、ジッポウはトーマにカップを差し出した。

「ありがとうございます。……あの、ジッポウさんはずっとこのお仕事をする？」

「ああ、そうだよ。そうだね、かれこれ、もう三十年ぐらいかな。仕事するのは何だつてそうだとは思っけど、この仕事も最初の頃は辛くてね。それでも、君のように若く、夢を見る子の最初の手助け、街までの案内をしてあげられる」

「そう思えばなんて事はないよ」と付け足し、ジッポウはスープに口を付ける。

「そう言えば、君——ええと……」

ハッと、トーマは顔を上げた。自分の名前を伝えるのを失念していたのである。

「あ、ごつ、ごめんなさい。僕はトーマと言います。そのう、今まで名乗らなくて、ごめんなさい」

「はっはっは、いやいや、気にする事はないよ。そうか、トーマ君と言うのか。うん、トーマ君は旅するのは初めてなのかい？」

からくり人形のように何度も頭を下げるトーマを見て、ジッポウは思わず嘖き出してしまった。

「はい。旅、と言うより村を出たのも初めてなんです」

「そうだったか。旅はまだ始まったばかりだ。荷台で揺られているだけとは言っても体力を使う。休める内に休んでおいた方が賢いね」
今日の醜態を嫌でも思い出していまい、トーマは俯く。

「えーと、はい。そうさせてもらいます。……あの、ジッポウさんは？」

「私はここで火の番だ。ガラン君と交代だね」

「ガラン……？ えっと、あのお兄さんの事ですか？」

「なんだ、自己紹介をしていなかったのか。うん、そうだよ。彼も君と同じで街まで行くらしい」

しまった。またもややってしまった。トーマは深く恥じ入り、自らの頭を小突く。

「何、さっきも言ったが旅は始まったばかりだ。うん、このスープをガラン君にも届けてくれたまえ。そこで改めて自己紹介すれば良いだろう」

「あの、何から何まで。本当にありがとうございます」

トーマがそう言つと、ジッポウはやはり気にする事はないと笑みを浮かべるのだった。

「やーっと名乗りやがったか」

「えっと、ごめんなさい」

ガランと名乗った金髪で長身の青年は皮肉っぽい笑みを浮かべた。

「ま、さっきまでゲロゲロだったからな」

「吐いてないです」

「似たようなもんだろ。それより、このスープは美味しいな」

腹が減っていたのか、カップになみなみと注がれていたスープとパン二つを瞬く間に平らげると、ガランは満足そうに腹を摩った。

「あの、ガランさんも街に行くんですよね？」

「そりゃそうだろ。その為にこの馬車乗ってんだからよ」

「ごろりと横になるガラン。」

「あー、そ、そうですね」

「用がないなら俺は寝るぞ。番が来るまでまだ時間はあるしな」

「あつ、あのつ、僕も番を……」

「お前、いくつだ？」

突き放されるような口調に躊躇したが、トーマは十六と正直に答える。

「は、まだまだガキじゃねえか。ガキは大人しく寝てろ。それとも、また今日みたいにゲロ吐きたいのか？」

断じて吐いていない。が、明日はどうなるか分からないのだ。まだ眠気は訪れない。それでもトーマは頭から毛布を被り、やがて訪れるであろう睡魔を待った。

目が覚めると、荷台には自分しかいなかった。耳を澄ませば、外から声が聞こえる。ガランとジツポウが何か話し合っているらしかった。自分も混ざろうかと考えたが、同時に、自分のような『ガキ』が混ざっても仕方がないのではと思った。

それでも、荷台の出入り口に差し込む陽光にふらふらと誘われ、トーマは荷台を降りていく。

「やあ、おはようトーマ君。どうだい、良く眠れたかい？」

パンを片手に微笑むジツポウ。トーマの目からは、彼に疲労の色は見えない。流石ベテランの運び屋と言ったところだろうか。

「はい。その、僕だけ寝てて申し訳ないくらいです」

「いやいや、気にしないで。ああ、そうだ。あちらに小川が流れている。水は少し冷たいが顔を洗つてくると良い。その間にスूपを温め直しておくから」

「おう、一人でも大丈夫か？」

「おはようございます。大丈夫です」

からかう様なガランの口振りにムツとしながらも、彼らと比べればまだまだ自分は子供なのである。大した反論も出来ないまま、トーマは小川へと向かう。

昨夜は気付かなかったが、どうやら自分たちは森の中でも少し開けたところで野営していたらしかった。周囲の木々が伐採されているのを見ると、ここは昔からこういう場所として使用されてきたのだろうと推測出来る。

そんな事をぼんやりと考えていると、さらさらと水の流れる音が

聞こえてきた。歩調を速めると、温かだった空気が、ぴんと張り詰めたようなものに変わっていく。

「気持ち良さそうだな」

ぼつりと呟き、小川に指を入れてみる。ジッポウは冷たいと言っていたが、これくらいの水温は北部に住む者にとっては当たり前だった。

この川も、村に繋がっているのだろうか。そんな事を考えてしまい、トーマの鼻がすんと鳴った。その事実気付いた彼は慌てて頭を振り、故郷への恋しさを断ち切ろうと試みる。

「僕は、これから街に行くんだ」

自分に言い聞かせる為に、一言一句、はっきりと口に出す。頬を叩き、小川に顔を浸した。

「遅かったじゃねえか。スープ、少し冷えちまつてるぞ」

差し出されたタオルで顔を拭くと、次にカップが目の前に突き出された。

「ありがとうございます」

「おう。ああ、ジッポウさんは少し先を見てくるってよ。この先、ちつと道が荒れてるらしいんだ」

朝からげんなりとしてしまう。ガランの言い方だと、昨日よりも馬車は揺れるのだと、そう聞こえてしまうのだ。

「ま、揺れるのは午前中だけらしいけどな。午後からはもつと道らしい道に出るさ」

「あの、どれくらいで街に着くんですか？」

「この調子なら七日掛かるか、掛からないかってところらしいな。ま、短い間だが、改めてよろしく頼むわ」

そう言っただけでガランは立ち上がる。

「ああ、バスケットの中にパン入ってるだろ？ それ、無理しない程度に片付けといてくれや。もう持たないらしいんだわ」

「はい、分かりました。いただきます」

頷くが、あまり腹に詰めすぎては今日こそ本当に戻しかねない。出来れば、揺れませんように。酔いませんように。祈りながら、トーマはパンを一口齧った。

乗り物酔いとは、乗り物が発する振動が原因で内耳にある三半規管が体のバランスを失って起こる諸症状の事だ。また、乗り物の振動、加速、減速、カーブを曲がる際に掛かる加速度が加わり、三半規管が刺激された結果引き起こされる自律神経の失調状態である。その為、医学的には動揺病または加速度病と呼ばれる。

そんな事知るものかとも言わんばかりに、トーマは必死になって毛布に包まり、目を瞑っていた。ジッポウが危惧していた通り、道は荒れていて、昨日よりも強く、激しい振動が体を揺さぶっている。

「……なあ、こういうのって話したりして気を紛らわせるのが良いって聞けぞ？」

情けないトーマの様子を見かねたのか、頭を掻きながらでガラんが声を掛けた。

「そ、そうなんですか……？」

「今にも死にそうな声じゃねえか。……お前から話せるような状態じゃねえよな」

ガラんは腕を組み、しばらくの間何かを考えている素振りを見せる。

「お前、街についてどれくらい知ってる？」

「……あ、あんまり」

「んじゃ、ま、暇だし適当に話してやるよ。そうだな、んじゃ、まずは……」

果たして、その話の何割がトーマの耳に入り、抜けていったのか。

七日間。

長いのか、短いのか。その期間をどう捉えるかはその時の雰囲気や気分によって変動するものだろう。楽しければ時間はすぐに過ぎていくものであるし、そうでなければ時間の進みを遅いと感じる事もあるだろう。

「見えるか？」

「はいっ」

トーマたち一行は、なだらかな丘の上で最後の休憩を取っているところだった。

目的地を眼下にしてトーマの胸は期待に高鳴る。同時に、寂しいとも感じていた。街に着けば、ジッポウともガランとも別れる事になる。もう二度と、とは限らないがこんなご時世だ。次にいつ会えるか、生きている間に巡り会えるかどうかは分からない。

「あれが、街なんですね」

「ああ、あそこに着けば旅は終わりだ」

ガランは目を細めて、街を見遣った。

「懐かしいな」

「ガランさん、昔は街にいたって言うてましたもんね」

「おお、そうなんだよ」

街にはよほど良い思い出があるらしく、昔話をするガランは子供のように目を輝かせている。

「こう見えても、俺は結構すげえギルドにいたんだ。そこからさ、人手が足りなくなってきたから戻ってくれて手紙が来たのよ」

「え？ 手紙って、それだけで街まで戻るんですか？」

「ま、ダチもいるし、世話になった人もいるしな。良いぜ、ギルドはよ。組織の後ろ盾があるってのも色々と便利だけどよ、仲間が出来るってのには比べられねえな」

「仲間、ですか」

羨ましいのか、妬ましいのか分からない。トーマはガランの視線

の先を追い掛け、街を睨んだ。自分にも仲間はあるだろうか。十年、二十年経つても、子供のような、そんな輝きが残っているだろうか。

「おお、良いもんだぜ。まあ、何だ。お前にも出来れば良いな、そういう奴がさ」

村にはトーマと同年代の子供がいなかった。仲間、友人はいなかった。彼は、数年前に村から出て行ってしまった年上の女性を思い出すが、彼女は友人、仲間と呼べるような存在ではなかったのだと思ひ直す。

出来たら良いなと、素直に思った。

「……そろそろ行こうか？」

離れたところに座っていたジッポウが立ち上がり、トーマたちに声を掛ける。

「そつすね。昼までには街着いて、宿とか決めときたいし」

「うん、そうだね。……いや、長いようで短かった旅だった。そんな気がするよ」

「やだなあ、まだ終わっちゃないんですよ？」

それもそうだとジッポウは笑い、年を取ったかなと独りごちた。

御者台に戻るジッポウと、荷台に乗り込もうとするガランを眺めていると、

「あの」

トーマの口は勝手に開いていた。

二人は立ち止まり、不思議そうにトーマを見つめる。

「僕、ガランさんとジッポウさんに会えて、本当に良かったと思っています」

まだ街には着いていない。まだ旅は終わっていない。それでも、溢れ出る言葉を止めようとはしなかった。

「二人にとって、僕は初めての仲間じゃないですけど。けど、僕にとって二人は初めて組んだパーティで、初めて出来た、その、仲間だと、勝手に思ってます」

——だから。

「だからっ、その……」

「あー、いらねえよ、そういうの」

「……あ」

ガランは髪の毛を掻きながら荷台に戻っていく。

「あのな、一々口に出して言うもんじゃねえよ。すげえ恥ずかしいだろうが。なあ、ジッポウさん」

「いやいや、私は嬉しいよ。ありがとう、トーマ君」

ジッポウはトーマの頭を撫で、本当に嬉しそうに目を細めた。

「君のような若い人にそのような言葉を掛けてもらえるとは、本当に光栄だ。願わくは、忘れないでいて欲しい。トーマ、君が最初に得た仲間が私たちだと言う事を」

父とは違う掌。その感触に涙ぐみながら、トーマは頷く。

「はっ、泣いてんじゃねえよ。本当にガキだな、お前はよ。……まあ、街で会ったら挨拶ぐらいはしてやる。だから、お前も俺を見つけたら声ぐらい掛けに来い。良いな？」

街まではもう少し。旅が終わるまでもう少し。

忘れるものかと、トーマは何度も頷いた。

「さあ、出発しよう。名残惜しいが、出会いあれば別れもまた然り。なあに、きつとまた会えるさ。そうだろう？」

太陽は空の真上に陣取り、暖かな光を下界に送る。

御者が息を吐き、馬が嘶いた。幌馬車は緩やかな丘を下っていき、街を目指す。

辛い事はあるだろう。

苦しい事も起こるだろう。

それでも、きっとそれすらを忘れられるような楽しい事も経験するだろう。

若い旅人は夢想し、暫しの間目を瞑る。馬車の揺れは、もう氣に

ならなかった。

街

それは小さな大陸だった。

版図を広げ、富を築き、国を守るので手一杯の者には見えなかった。知ってはいたが、それ以上は必要としなかった。

最初に気付いたのは、動いたのは、今となっては何者なのか分からない。だが、誰かは気付いた。何者かは動いた。大陸に向けて馬車を揺らし、舟で水面を切り裂いた。大地を踏み均し、森を切り開いて進んだ。

そして、見つけたのである。

ルートナイン。

大陸の中央に位置する街の名である。が、ルートナインと、この街を正式な名称で呼ぶ者は少ない。ただ単純に街、タウンだとか、ホームだと言う者が専らである。それもその筈だ、この大陸には街が一つしかないのだから。

街には常に喧騒が渦巻き、雑踏には活気が溢れている。

「うわ……」

北部出身であるトーマは生まれて初めて村を出た。生まれて初めて街を見た。街までの道中でガランから話は聞いていたのだが、やはり実際に目にするのと話を聞くだけではあまりにも違い過ぎた。

煉瓦で舗装されたまっすぐな一本道。その左右には様々な建物が軒を連ねている。看板らしきものには酒樽や刀剣類が描かれており、その建物が何を商いとしているのかが分かるようになっていた。

トーマは街の入り口に立ち尽くし、流れていく人並みを眺めている。今から自分もここの住人になるのだとは理解していたのだが、

どうにも実感出来なかった。すぐ近くにある現実が、遠い世界の、御伽噺のように思えてしまう。

鎧を着込んだ屈強な男。

ローブを羽織った怪しげな老人。

談笑する獣人たち。

翼を持つ者は屋根の上を駆けていく。

軽装の女が踊るように酒場へと入っていく。

人。人。人。

今までに見た事のない数の人間がトーマの視界でうごうごと蠢いている。この世界の人間が全てここにいるような気さえた。もっと良く目を凝らして探せば、村の皆もいるのではないかと思い、嫌悪する。

「……僕の馬鹿」

今は前を見て、先を考えると自分に言い聞かせ、トーマは再び人波に視線を向けた。

歩く。走る。止まる。話す。笑う。怒る。泣く。叫ぶ。飛ぶ。

様々な人の様々な動作を見て、トーマは、

「うつ……」

酔った。

トーマは街の入り口から引き返して、喧騒からは少し離れた場所にいた。手近な石に座り込んで顔を上げると、『ようこそ』と、文字の潰れかかった看板が見える。馬鹿にされているような気がして彼の気持ちは沈んだ。これからどうしようか、どうすれば良いんだろうと、今更ながらに考えてしまう。

「ルートナインとはここか？」

そんな折、トーマの傍に男が立った。

「え、え？」

トーマは声の主を確かめる。

「ここかと聞いている」

居丈高な声の主は、トーマよりも背の高い金色の髪の少年であった。深い蒼を湛えた瞳に見据えられ、トーマは戸惑ってしまう。何より、少年の出で立ちに恐縮したのだ。ヘルメットこそ被ってはいないが、喉を守るゴルゲツト、肩当て、肘を守るコーター、二の腕を守るヴァンブレイス、手首を守るガントレット、脇を守るペサギユ、胸部と背部を守るキュイラス、腰部を守るフォールド、タセツト、キュレット、チェインメイルスカート、大腿部を守るキュイツス、膝を守るポレイン、脛を守るグリーブ、足を守るソールレット、と。並大抵の者では揃えられない装備を身に纏っていたのである。王様みたいだと、トーマはぼんやりと思った。そして、金髪の少年に反して、自分は何とみすばらしい服装なのかとトーマは俯く。

「貴様、口が利けないのか？」

「う、あ、きつ、利けます利けます」

顔を近付けられて、トーマは石から飛び退いた。

「ならば答えよ。ここはルートナインなのか？」

「そ、そうです」

少年から滲み出る気位の高さに押され、トーマは敬語で返事をす。自分と年齢は変わらないだろうと、そう思っではいても、である。

「やはりそうであったか。うむ、流石は俺だ」

少年は腕を組み、満足そうに頷いた。彼は街の様子を一頻り眺めた後、トーマに向き直る。

「おい、そのの」

「僕、ですか？」

「貴様以外に誰がいるか。俺を案内しろ」

「あ、案内つて、あの街を？」

「そうに決まっているだろう」

断言された。トーマは困ってしまう。案内しろと言われても、自分だってここには着いたばかりで、おまけに街に入らず人に酔って

しまう有様なのだ。

「えっと、僕、急いでいるから」

「急いでいる人間が道端で座り込んでいたと？ 貴様、俺に嘘を吐くつもりなのか？」

少年が腰に手を当てた。トーマがそう認識した瞬間、目の前に剣の切っ先を突きつけられる。

「う、わああああっ!？」

後退りし、近くにあった木の幹を背にしてトーマはしゃがみ込んだ。

「む？ 貴様、剣を向けられるのは初めてか？」

初めてどころか、もう二度と見たくもなかった。トーマは何度も頷き、目の端に涙を浮かべる。

「……案内したいのは山々なんだけど、僕も今日、と言うか今、初めてここに来たんだ」

「なるほど」と呟き、少年は剣を鞘に収めた。

「俺と同じレベルの者であったか。ふ、貴様運が良かったな」
全くだ。トーマは内心で頷き、ゆっくりと立ち上がる。

少年は何も言わず、トーマに背を向けて歩き始めた。

「ちょ、ちよっと待ってよ」

「貴様初心者なのだろう？ ならば用はない。さっさと消えろ」

「君の勘違いで物騒なもの向けておいて、謝りもせずにその言い草。それはないんじゃないのかな」

少年は端正な顔を歪ませて笑う。がしやりと、鎧が無骨な音を立てた。しまったと、トーマは今更になって手で口を塞ぐ。

「ほう、よもやこの俺に道徳を説こうとはな」

「えっと、ちよっと待って。僕は別に道徳とか、そういうんじゃないくって」

「俺の名はレオ・バーンハイト。この大陸で未踏の地を切り開いて財を成し、名立たるプレイヤーの頂点に立って名声を得た誇り高きバーンハイト家の長子だ」

レオ。そう名乗った少年はトーマを見据えてにやりと笑った。
彼は突然どうしたのだろと、トーマは小首を傾げる。

「……貴様、バーンハイトを知らんのか。そうか、我が威光も島の端にまでは届いていなかったと言う事か」

「えーと、それってすごいのか？」

「当然だ。プレイヤーならば一度は耳にする。そう決まっているのだ」

「ご、ごめん。……あ、僕の名前はトーマって言うんだ」

態度こそ大きいけど、先に名乗ったのはレオだ。自分も名乗らなければ礼を失する。そう思ったトーマなのだが、

「ああ、そうか」

レオの興味を引く事は出来なかったらしい。

「貴様、出身はどこになる？」

「シアンの村だよ。この大陸の北部にあるんだ」

レオは眉根を寄せる。

「聞いた事がないな。ふん、何かおかしいと思ったが、貴様農民だったのか」

農民。

果たしてその通りなのだが、明らかに下に見られていると感じた。トーマはぶっきら棒にそうだと告げる。

「ふん、匹夫の勇結構。気に入ったぞ農民、俺に仕えるのを許してやる」

「仕える……？ 嫌だ。僕には君に頭を下げる理由はないと思う」

「なっ、俺はバーンハイトの長子だぞ！？」

何度も言われたとしても、声を荒げられても知らないものは知らない。仮に知っていたとして、名前だけにひれ伏すような真似をするつもりもトーマにはなかった。

「くっ、だが面白い。ますます気に入ったぞ農民」

「僕はトーマだ。農民ってのに間違いはないけど、そんな呼び方ってないだろ」

「よし、農民、俺をここで一番大きなギルドに案内せよ」

何が良しなのかトーマには分からなかった。しかし、一番大きなギルドなら知っている。街に着くまでの間、ガランから色々話を聞いていた為だ。

「それなら知ってる。けど、君には教えたくない」

「ほう。貴様、農民の分際で俺に楯突こうと言うのか？」

剣を抜きたければ抜いてみる。トーマはそう言わんばかりにレオを強く見据え付ける。

レオは柄に手を伸ばし掛けたが、その手をゆっくりと元の位置に戻した。

「君の下につくような事はしたくない。だけど、隣に立って案内する事ぐらいは出来る」

「……なるほど、身分を弁えず自らの道理を通そうとするか。よりにもよって、このレオ・バーンハイトに対して」

レオはこみ上げてくる笑みを喉の奥で噛み殺し、トーマの傍にまで近付いた。

「良かろう農民、道案内を許すぞ」

相変わらず偉そうな態度ではあるが、屈託のないレオの笑顔からは親しみを感じる。が、案内してやるなどと息巻いていたトーマはギルドの場所を知らなかった。今来たばかりなのだから当然である。この街で一番大きな、となれば名前は聞いているのだが、しかしそれだけだ。

「よし、僕に付いて来なよ」

何が良しなのか、トーマにはまるで分からなかった。

街に入り、ふらふらと歩き始めてから一時間。トーマはすっかり道に迷っていた。一本道の大通りと曲がりくねった裏路地を行ったり来たりして、それでも目的地は見つからない。そも、道に迷ったと言っるのは間違いかもしれない。何せトーマは最初から道を知

らないのである。

そうして、疲れたと訴えるレオの意を汲み、彼らは街の中央に位置する噴水広場で体を休めていた。

広場の隅、日陰になっている場所に座り込んだトーマたちは周囲の様子を興味深げに見回した。ここではダンジョンと呼ばれる危険な場所へ向かう為の同行者を募る演説をする者や、その話を熱心に聞いたり、あるいは聞き流して笑い飛ばす者もいた。人が集まったのを見計らい、露天商が慌ただしく開店の準備を始めるのも見える。

「……貴様、俺を引きずり回して何が楽しいのだ」

「そんなものを着てるから疲れるんだよ」

「馬鹿め、だから貴様は農民なのだ。これはバーンハイトを示す鎧であって即ち俺の威光を示す……」

トーマはレオの話を聞き流して喧騒に耳を澄ませる。自分が幾ら黙っていても、ここでは誰かが口を開く。自分が座っていても誰かが歩く。時間の流れに逆らうように、あるいは時間の流れがそうあれと言っているように、街は常に動き、街には常に変化がもたらされていた。

「農民、そのギルドとやらはどんなものなのだ」

「えっと、突風同盟ガストアライアンスについていうところなんだけど」

「センスの欠片すら感じられない名前だな。まあ良い、問題は中身だ。ギルドの規模を答えよ」

「……規模？」

レオはトーマをじつと見つめ、つまらなさそうに視線を逸らした。「人に決まっているだろう。そこには何人のプレイヤーが在籍しているのだ？」

「えーと、確か三千人、くらいだったかな」

「……三千？　ほう、それは中々。俺の知る限り街の人口が二万二千弱。そこからプレイヤー以外の者を除けば、なるほど、半分とはいかずとも、三、四割のプレイヤーがそこに固まっている訳か」
「多いね」

レオはトーマの発した短い感想に何か言いたげだったが、結局何も言わなかった。

「他にどのようなギルドがあるのだ。ああ、有象無象は要らぬ。俺に相応しいものだけを教えろ」

自分だつてまだ街にある全てのギルドを把握している訳でもない会ったばかりの人間に相応しいものなんか思い付く筈がないのである。トーマは仕方なく、覚えているギルドの名前を挙げた。

「一刀旅団なんかだろう。刀を持つてる人が集まるらしいよ」

「馬鹿め。これは刀ではない。剣だ。一緒にしないでもらおうか」
「一緒じゃないの？」

そう言つと、レオは立ち上がつて剣を抜いた。

「見る、これはただの剣ではない。バーンハイト家に代々伝わる由緒正しい宝剣なのだ。これで先々代が竜を斬り殺し、先代が巨人を突き殺した。しかし見る、刃毀れ一つないではないか。剣の切れ味を物語つている、だろう？ 現当主から賜つたバーンハイトの剣つ、戦闘のみを追求する下賤な輩が提げる刀と一緒にされては困る！」

「ふうん。じゃあ、一刀旅団は駄目だね」

「貴様あ！ 俺の話聞いていたのか！？」

しつかり聞いていたが、あまり興味がなかったので本当に聞くだけで終わったのである。

「む、そういう貴様は武器を持つていないのか？」

「うん。僕はダンジョンに潜つたり、モンスターと戦つつもりはないから」

「では何故街に来たのだ。ダンジョンに潜らねば新たな発見はない。即ち富を築ける足掛かりすらないのだ。モンスターを倒さねば地位も名誉もその手に出来んではないか」

「僕は生産職に就こうと思つてゐるんだ」

トーマは目を細めて答える。

「生産職だと？ ……鍛冶屋か？」

「あ、それも良いなあ。でも、やっぱり僕は料理人かな」

「ふん、しかし材料が足りなければダンジョンにも潜り、必要とあらばモンスターと対峙する時もあるだろう」

「傭兵さんをお願いするから大丈夫」

トーマがガランから聞いた話では、生産職専門のギルドも街にはあるらしい。大きなギルドにも生産職のプレイヤーを育てるところはあるが、やはり専門としているギルドが一番だろうと、彼はそう思っていたのだ。

「腰抜けめ。だから貴様は農民なのだ。俺は違うぞ、大陸にあるダンジョンを踏破し、凶悪なモンスターを撃破し、プレイヤーの頂点に立ってみせる」

「……ふうん。それで、ギルドはどこにするか決まったの？」

レオは剣を収めて押し黙り、再び座り込む。

「いや、知らん。だから農民、他にも候補を挙げてみる」

「ううん、じゃあ、白騎士団ってところはどうか。君みたいな格好をした人もいるだろうし、人数も少ないからすぐに目立てるんじゃない？」

「小さなギルドで目立ったところで仕方あるまい。やはり当初の予定通り、突風同盟とやらで決まりだな。よし、では行くぞ農民」

「場所は分かるの？」

「俺に相応しいギルドなのだ。俺が進めば、その道の先に必ずある」
立ち上がったレオはさも当たり前のように宣言する。

「信じられないや」

言いつつトーマも立ち上がった。今のところ、別段急いでいるという事はない。自分は突風同盟に入ろうと思わないが、こうやって街を歩いていけば、ここだというギルドも見つかるだろう。レオとはそれまでの付き合いでいれば良い。

満足そうに頷くレオを見てトーマは思った。そんな馬鹿な、と。
広場を出て歩き始めてからおよそ十分。この街でも一番大きな建物

ではないだろうかと思わせるところに人ばかりが出来ていたのである。その建物こそ突風同盟の本拠地であり、人ばかりは新たにギルドへ入りたいと願う者たちだった。

「俺の家よりは粗末だが、中々に大きいではないか」

「じゃあ僕は帰るね。君は頑張つて」

「何を言う。貴様もこのギルドへ入るのだろうか？」

服を引つ張られ、トーマの喉からぐええと声が絞り出された。

「……僕は生産ギルドに入るんだよ。ほら、見てみなよあの人たちがトーマの視線の先には二十を超える人がいる。誰もがその手に剣や槍などの武器を持ち、剣呑な雰囲気を漂わせていた。有体に言えば自分など、それこそただの農民など場違いにもほどがある。

「俺の足元にも及ばん連中だ。それがどうした？」

「そうじゃなくて、どう見たって僕とは全く違う人たちだろ」

「分からん」

「分かつてよ！」

「貴様、いきなり何を怒鳴るか。俺の耳が使い物にならなくなるような事があれば死罪に問われるぞ」

「知らないっ、僕は行くからね」

「農民の分際で俺を袖に？ 良い度胸だ、覚悟は出来ているのだからうな」

「付いてこないでよ！」

「勝手に離れるな農民！」

トーマとレオが言い争っているのを見かねて、一人の男が彼らに近付いてきた。

「ウチのギルドに入る気がないのなら消えろ」

トーマより背が高く、レオよりは背の低い男である。彼の声音には迷惑だ、と言う色が多分に含まれていた。紐で括った長い髪の毛が揺れ、男は踵を返す。

違つと、トーマはそう言いたかったのだが、男に射竦められて何も言えなかった。

「……説明に戻る。お前らも突風同盟の入団希望者だろう。黙って話を聞くんだな」

それだけ言うと、男は人だかりを掻き分けて段差の上に立ち、話の続きを始める。

「偉そうな男だな」

「偉そう、じゃなくて。偉いんじゃないのかな」

「幹部か、仕方あるまい。ここは大人しく話を聞いてやるとしよう」
トーマたちは場の雰囲気の流れされて人だかりに加わった。しかし、男の話はすぐに終わってしまう。

「テストを受けたい者は一時間後、準備を済ませて西側ゲートに集合。テストについての説明は道すがら行う。以上だ」

「あ、行っちゃった」

建物の中に引っ込んでいく男を見て、トーマはふうと息を吐いた。
「ろくな説明もせんと消えるとはどういう見だ」

「君が話を聞いてなかったただだよ」

とりあえず、トーマは安心する。どうやら、突風同盟に入る為にはテストとやらを受けなければいけないらしい。ルートナイン最大のギルドは来る者拒まず、と言う訳ではないのだと思い、テストさえ受けなければ入らずに済むのだと気付いたのだ。

「テスト、頑張つてね」

「心配は無用だ農民。よもや筆記などというくだらない形式ではあるまい。俺の力を誇示するには実践が一番だろう。大方、ギルド内でも力のある者が試験官を買って出て入団希望者のレベルを計るに違いない。くく、くく、はっはっは！ 重畳っ、バーンハイトの力を存分に見せ付けてやろうではないか！」

レオはすたすたと歩き出していたトーマを追い掛けて隣に並ぶ。

「俺は心配ない。が、貴様は少しばかり頼りないな。良し、まずは武器だ。武器を調達するぞ」

「え？ いや、だから僕はあのギルドに入るつもりは……」

「この街一番の武器屋に案内しろ。俺が貴様に相応しいものを見繕

ってやるうではないか」

「え、あ、ちよつと！ 引つ張らないでよ服が破けちゃう！」

トーマは必死で抵抗するも、自分よりも背が高く、体の線も太いレオには力で勝てない。ずるずると引つ張られて、街の喧騒に吸い込まれていった。

テスト

自然に囲まれてのんびりとした時間を過ごしてきたトーマに、慌しい街の空気は合わなかったのかもしれない。彼は溜め息を吐き、自分に付いて来いと言わんばかりな男の背中を眺めた。村にいた時は向かいのジョゼフおじさんの押しも中々に手強いものではあったが、レオの強引さはそれ以上だと思う。

街を引き回されて辿り着いたのは、多くのプレイヤーで賑わうルトナインでも屈指の規模と業績を誇る武器屋であった。出入り口は広く、客を迎え入れる正面には、交差した剣が描かれた大きな看板が吊り下げられている。

「うむ、ここなら期待出来そうだな」

レオは、流石俺の見つけた店だ、などと満足そうに頷いているが、トーマにその気はなかった。武器を買うどころか、店に入る事すら躊躇われたのである。

そもそもトーマは武器を必要としていない。それに、彼には十分な手持ちがなかった。有り体に言えばお金がなかった。大きなギルドならば、ギルドのメンバーが住む為の建物も宛がわれるが、規模の小さなものだとそうはいかない。街に来たばかりで頼れる者もおらず、勿論当面の住居すらあてがない。道端で寝転がるつもりのないトーマは、適当な宿屋に泊まるつもりだった。その為には代金が必要。生活費を削ってまで立派な武器を手に入れるなど宝の持ち腐れと言うものだ。

「やっぱり止めよう。僕はテストを受けないから。君だけでも頑張るよ」

心ない励ましはレオに届かない。彼はさっきから店頭に並んだ武器を物色している。

「この槍を見る農民、地味だが長いぞ。実に長い！」

長さは関係なかった。

「おお、こっちの剣も良いな。どんなモンスターだろうと両断出来そうなたさがある！ 気に入った！」

「だから、僕は武器なんていらないうてば」

商品に釘付けになっっているレオを無視して、トーマは辺りに視線を向ける。武器屋に用のある人間というのは、そこにいるだけでも恐ろしく思えた。目を合わせて因縁を付けられても面白くない。彼は人のいない方へと視線を逃がしていく。と、向かいの路地裏に看板が立っているのが見えた。年月の経ったぼろぼろの看板にはハンマーが描かれている。

「……ねえ、ねえってば」

「む、どうした農民。気に入った武器はあったのか？」

「ほら、あそこにも武器屋があるよ」

レオはトーマの指差している方に目を遣るが、つまらなさそうに息を吐いた。

「豚小屋ではないか」

「豚小屋って……。でも、看板は立ってるよ」

「まともなものが置いてあるとは思えんな。そして、まともな者が入るような場所ではない」

尤も至極な意見だが、このままではレオに押し切られて武器を買わされてしまう。ならばとトーマは考えた。どうせ買われるのなら最低限の出費で済ませたい。この店では最低ランクの武器でも自分にとっては目玉が飛び出るほどの金額だろう。しかし、あの武器屋ならまだマシではないのかと、そう考えたのだ。

「ああいう雰囲気のあるお店の方が良いものを置いているんじゃないのかな。ほら、掘り出し物って言うのかな」

「……ふん、農民の意見を鵜呑みにするほど俺は馬鹿ではない。が、一理あるかもしれんな。良いだろう、付き合ってやる」

ありがとと素直に言うほど馬鹿ではない。トーマは苦笑し、路

地裏の武器屋に向けて歩を進める。

トーマたちは店の前で立ち止まった。

「扉が閉まっているではないか。ふん、どうやらとうに潰れていたらしいな」

看板は出たままである。しかし、閉まり切った木製の雨戸は来客を歓迎するどころか、拒否しているようにさえ思えた。

「でも、何だか人の気配がするよ。それに何もプレートが掛かっていないし、案外普通にやってるんじゃないのかな」

「な、の、農民貴様っ」

トーマは躊躇わず、雨戸に手を掛ける。するりとはいかなかったが、力を込めると少しずつ雨戸が開いていった。

暗く、埃っぽかった店内に光が差し込み、風が入り込んでいく。

「お邪魔します」

トーマは短く告げて、足を踏み入れた。ぎしりと、木製の床が軋む。レオは剣を抜いていた。

「……何してるの？」

「邪悪な気配がするのだ。気を付ける農民、ここには強大なモンスターが潜んでいるに違いない！」

「邪悪なのはてめえの方だろう」

「何者だっ!？」

声のした方にレオが剣を向ける。トーマは呆れて物も言えなかった。

カウンターの隅で何かが蠢いている。トーマは雨戸を全開にして、店内の隅々にまで光を行き渡らせた。

眩しそうに目を細めたのは背の低い、しかしがっしりとした体付きの老人である。長い白髭を蓄えた彼は、迷惑そうにトーマたちへ視線を遣った。

「客じゃねえなら……いや、客だろうが帰ってくれ」

「貴様、店の者か？　は、客に向ける言葉とは思えんな。お客様は神様ですと言う言葉を知らぬようだ」

レオの言葉を受け、店主らしき老人は口の端をつり上げる。

「大なり小なり商いをしている者なら誰でも知ってらあ。だがな小僧、そりゃあお客様の言う台詞じゃねえ。俺たち店の人間が言う言葉なんだよ。知ってるか？　神様には疫病神や貧乏神、死神なんてものもいるんだよ」

気難しそうな人だとトーマは思った。そして運が良いとも思った。帰れと言われたのだから従うのが無難だろう。つまり、何も買わずにここを出られるという事だ。

「よし、出よう」

「良しではない！　この男は俺を貶めたのだぞ！　よりもよってこの俺をつ、レオ・バーンハイトを！」

「うるせえガキだな。そっちの大人しいの、そいつを連れて帰るんだな。ああ、戸は閉めていけよ」

トーマはしっかりと頷く。

「頷くな馬鹿者が。おい店主、決めたぞ。ここで絶対に何か買つてやる。さあ農民、選べ」

「ええー……」

店主は舌打ちして、トーマたちからは顔を背けて椅子に座り直した。

仕方なく、トーマは壁に立て掛けられた剣や、樽に入れられている槍などに目を遣る。

ナイフ。サイズ。ガントレット。ハンマー。トマホーク。ウォーハンマー。カットラス。トライデント。フレイル。メイス。バスタードソード。ファルシオン。サーベル。刀。古今東西の武器がここには陳列されていた。

「まるで節操がないな」

「気に入らないならとっとと帰るんだな」

トーマの興味は店内の隅に置かれたものに移る。陳列されている

訳ではない。ただ単に、そこに置かれているだけだ。彼の目を引いたのは大きなスコップである。

「これ、売り物ですか？」

店主はカウンターから身を乗り出して、トーマの指差しているものを確認した。瞬間、目を見開く。

「まさか、こいつが欲しいってのか？」

「お幾らですか？」

「まあ、欲しいってんなら売るけどよ」

「ちよつと待て！」

スコップとトーマの間にレオが割り込んだ。

「貴様あ！　このようなものを買うと言うのか！？　ふざけるな、武器を探しているのだろっ！」

「うーん、これで叩かれたら痛いと思うよ」

「ならば棒でも持った方がまだマシだ！　こんな、スコップなどと格好が付かないだろうが！」

トーマはスコップを手に取り、重さを確かめる。

「うん、馴染む馴染む。やっぱりこれにする」

「貴様あ！」

「作っちゃった俺が言うのも何だがな、奇特な野郎だぜ。銅貨三枚で良い」

金貨。銀貨。銅貨。この大陸では三つの硬貨によって売買が成り立っている。凡そ、銅貨十枚で銀貨一枚分、銀貨十枚で金貨一枚分と言うのが基本的な価値だ。

トーマの手持ちは銀貨七枚と銅貨が十二枚。悩んだが、今後街で生活するに当たって使い道の見出せない武器を買うよりも、上等なスコップを買うのならばと、無理矢理自身を納得させる。

「じゃあ、はい。これで」

「ひいふうみい、と。毎度あり。さあ、さつさと帰るんだな」

「農民、貴様正気か！？」

「僕が剣や刀を持つなんて想像出来ないよ。これで良いってば。ほ

ら、スコップって結構色々出来ると思うし」

「だから貴様は農民なのだ！」

レオは荒い足取りで店を出て行った。トーマは頭を掻き、スコップを持ってその後ろを追い掛ける。

西側ゲートには二十人程度のプレイヤーと、それから突風同盟の者が二人、既に集まっていた。髪の長い男と、背の低い女である。二人はテストを受ける者たちに値踏みするような視線を送り続けた。

「俺たちが最後のようだな。ふ、主役とは遅れて登場するものだ」
レオは楽しそうだが、トーマの気分は重い。深く、沈んでいる。

トーマは何度も逃げ出そうとしたのだが、その度に捕まり、街中だと言うのに剣を振るわれそうになり、不承不承ここまで付いてきてしまったのだ。

「……行きたくないって言ったのに」

「情けない武器ではあるが、貴様は確かにそれを手にしたのだ。さあ、行くぞ農民」

プレートアーマーを着込んだレオと、スコップを持っているトーマに視線が注がれる。得体の知れない取り合わせに、その場が俄かにざわついた。

が、長髪の男が掌を叩き合わせて全員の注意を引き付ける。彼の眼光に射竦められて殆どの者が押し黙った。

「時間だ。……集まったのは全部で二十、二十一名か。私はコビヤク。試験官を務めさせてもらう者だ。隣の者はプリカ、私の補佐をしてもらう」

プリカと呼ばれた髪の短い女は頭を下げるが、声は発さなかった。コビヤクと名乗った男は提げていたロングソードを鞘から抜き取り、あらぬ方角を示す。

「テストは簡単だ。今からダンジョンに潜ってもらい、モンスター

を倒す。それだけだ」

「……それだけ？」

「おいおい、マジかよ」

場がざわつくが、コビヤクはそれを止めようとはしない。思い思いに口を開く志願者たちを見て、薄く笑うだけである。

「ふん、どんな難題を突き付けられようがクリア出来る自信はあったがな」

「拍子抜けだ」と呟き、レオは不敵に笑った。

トーマの頭は真っ白になっていた。彼の顔色は少し、悪い。そのつもりもないと言うのに、いきなりダンジョンに潜れと言われ、拳句モンスターを倒せとも。そんなの無理だと頭を抱えて、トーマは蹲った。

「但し、制限時間を設ける」

コビヤクはロングソードを鞘に収めて、指を三本立てる。

「三時間だ。三時間以内にモンスターを倒したと言う証拠を持ってここに戻って来れば、それでテストは終わりだ。尚――」

プリカに視線を送り、コビヤクは髪の毛をかき上げた。

「――彼女にもダンジョンへ潜ってもらう。何か問題が起これば彼女を見つけて助けてもらうと良い。潜ってもらうダンジョンはギナ遺跡、この道を十分ほど進めば見えてくる。……では、テストを始める」

コビヤクが告げた瞬間、大勢のプレイヤーが我先にと走り出す。

トーマは未だ自身が置かれている状況を飲み込めず、その場にぼんやりと立ち尽くしていた。

「何をしている農民、俺たちも行くぞ」

「ほ、本当に行くの？」

「その為に来たのだろうが！」

レオは鼻息も荒く歩き始める。トーマはこの場に残っていた数人のプレイヤーとコビヤクの様子を窺うが、勿論、助けてくれそうな者などいなかった。

ギナ遺跡。

ルートナインから最も近いダンジョンだ。その為、ここは最も早く踏破されている。手垢の付いていない場所など殆どなく、ここでの生活に慣れた人間は寄り付かない。尤も、人の寄り付かなくなつた場所なので、小鬼、大ムカデなどの比較的低級なモンスターが棲み付いている。最近では突風同盟のように、新人の育成及びテストに使われるのが専らだった。

「う、うわ……」

しかし、幾らレベルの低いダンジョンと言えども、新人にとっては未知の領域であり、初めての経験なのだ。足を踏み入れた瞬間から、その独特の空気に吞まれてしまう者も多い。

トーマもその一人であり、きよろきよろと辺りを見回しながら、レオの背中を追い掛けるので精一杯だった。

「暗いね」

「うむ。地下のダンジョンだからな」

ギナ遺跡を建造した者も、建造した理由もはつきりとはしていない。何かを祭る為だとか、宝を隠す為だとか言われてはいるが、祭る対象はおろか祭壇らしきものも見当たらず、金目の物は全て掘り尽くされている。石造りの遺跡も、今はただモンスターの巣と化していた。

レオはずんずんと進んでいく。その歩みには一切の迷いが無い。

恐怖を感じていないのか、そんなものはとくに麻痺しているのか、トーマには判断が付かなかった。

「恐くないの？」

「石の通路が続くばかりで他には何も無い。一体何に怯えろと言うのだ」

「モンスターが出てきたらどうするんだよ」

レオは立ち止まり、鞘を叩く。かしやりと音がして、トーマの心

臓が跳ねた。

「その時は剣を抜くまでだ。元より、テストをクリアするにはモンスターを倒せねばならんからな」

両手を腰に当てて笑うレオを見てみると、トーマも幾分か落ち着きを取り戻してきた。

「僕はクリアしたいとは思わないけど、まあ、君がどうなるかくらいは見届けたくなったよ」

「何を言う。俺がクリアするからには貴様もクリアするのだ」

「ふうん、僕が失敗したら君はどうするの？」

「失敗する事を考えて動こうとするな。ふん、俺には前しか見えておらん。が、そうだな、仮に貴様が失敗した時は……」

レオが何か言い掛けたが、トーマはその口を手で塞ぐ。

「きつ、きさ——」

「静かに。今、何か音がしなかった？」

トーマは目を瞑って耳を澄ませた。尋ねてはみたものの答えには期待していない。確かに物音が聞こえたのである。

「……俺たちより先に入った者の足音だろう」

「いや、何かが倒れるような音だった気がする」

「この先か？」

トーマは小さく頷いた。

「実際に見た方が早いな。行くぞ農民、俺に続け」

「まっ、待つてよ。だって一本道だよ？　ここから先はどうなってるか知らないけどさ、何かが待ち構えているかも……」

「仕掛けられた罠は打ち壊し、待ち受けている敵は斬るだけだ。バーンハイトは怯まない。前進あるのみだ」

レオは剣を抜いて右手で構える。そして先程と変わらない速度で悠然と歩き始めた。

「どうなってもしらないからね」

結局、トーマも彼のあとを追いついていく。

少し進むと、道が二つに分かれていた。先は暗くて見通しが利かない。何があるにせよ、奥に行って確かめるしかないのだ。

「右と左、どちらに進むべきか……」

レオは通路に背中を預けて腕を組んでいる。

トーマはさつきから鼻をすんと鳴らしていた。泣いているのではなく、臭いを嗅いでいるらしい。

「貴様、その耳障りな音を止めろ」

「何か臭わない？ ほら、油が燃えたような感じの」

「……油？ そうか、なるほど。農民も役に立つのだな。おい、その臭いはどちらからしているのだ」

「右、かなあ」

その言葉を聞いて、レオは左の通路をすたすたと歩き始める。

「何か分かったの？」

「誰かがたいまつを使ったのだろう」

「じゃあ、右に行ったら誰かと会えるんじゃないの？」

「馬鹿め」

立ち止まり、レオは通路の先を指差した。

「俺が後塵を拝する訳にはいかないだろう。モンスターの数も有限ではない。先を進まれているのなら、誰も足を踏み入れていない方へと行くのが当たり前だ」

レオが何かを考えて動いていると言うのは意外だったので、トーマは溜め息を漏らす。

「あ、でも、こっちにも誰かがいるかもしれないよ」

「その時はその時だ」

「やっぱり何も考えてなかった……」

ギナ遺跡地下一階の大広間は惨状と化していた。

広間ではモンスターの奇声や怒号が飛び交っている。風を切るよ

うな音がして、ゴブリンの頭に矢が突き刺さった。

広間には二十を超えるゴブリンが潜んでいたのである。どうやらここを巢の代わりとしていたらしい。が、一人の人間が足を踏み入れた。

ゴブリンは力も弱く、知能も低い。しかし、繁殖力が異常に高く、個体数が多い。一体だけでは脅威に成り得なくとも、集団で襲い掛かられては熟練のプレイヤーでも命を落としかねない。新人ならば尚の事だろう。だからこそ、今回のテストにはプリカがいた。

プリカ。突風同盟では主にダンジョンでの偵察や、街での情報収集を担当している女性である。前衛に立つ戦士や騎士には及ばないが、それでもギナ遺跡周辺のモンスターには遅れを取らない程度の戦闘能力を有している。今回、ギナ遺跡に潜った彼女の役割は危険な状況に陥ったテスト生を救出する事だ。無論、よほどの事態で助け出された者でない限りは失格となる。ギナ遺跡程度に手こずる者は突風同盟に必要ないと、そう考えられていたのだ。

「……………」

少なくとも、今はそんな事を考えなくても良さそうではあったが、また一匹、ゴブリンが生き絶えていく。柱に飛び散った緑色の体液を見遣り、プリカは息を呑んだ。

ここで殺戮を繰り返しているの人物の横顔が、あまりにも綺麗だったからである。

やがて、声が止んだ。広間にいたゴブリンが全て死んだのだ。広間の真ん中にはたいまつが置かれており、明かりに照らされた男の顔を浮かび上がらせた。冷たい目だった。今まさに多くの命を狩り終えた後だと言うのに、そこには何の感情も宿ってはいない。透き通った白い肌、整った鼻梁、引き締まった細身の体。しかし、彼に言い寄るような女は存在しないだろうと思われた。視線に射竦められて動けなくなるので関の山、あるいは本当に射殺されてしまうか、だろう。

間違いなく、テストをクリアするのはこの男だ。プリカはそう判

断して広間を後にする。

「……趣味の悪い人だ」

広間に残った男は、プリカが去っていった出入口に目を向けると、
退屈そうに視線を逸らした。

テスト・2

何もない通路を進んでいくと、小さな部屋らしき空間を見つけた。トーマたちは今までにもこういった空間を見つけてはいたのだが、空だったり、モンスターの死体が転がっているばかりだったのである。

「い、いる……」

トーマは僅かに顔を覗かせて、その中の様子を確認する。

そこには、ゴブリンが二匹いた。意地の悪い顔をした小人らしきモノが二匹。ゴブリンは広くない部屋の中をぐるぐると回り回っている。意味はない。知能の低い彼らの行動に意味を問うのは無駄なのだ。

「何がいた？」

声を潜めて尋ねてくるレオに、トーマは指を二本立てる。

「二匹だけ」

トーマにとつては二匹も、である。彼は今すぐにも逃げ出した衝動に駆られた。が、レオは鞘から剣を抜いていつでも飛び出せる状態である。むしろ、彼の気性から言えば今飛び出していないのが奇跡なのだと思えた。

「帰ろう」

「馬鹿か貴様、俺たちは先を越されているのだぞ。これ以上足踏みしていられるかっ」

あつと声を掛けるには遅過ぎる。レオはがちゃがちゃと、容赦なく音を鳴らして部屋に踏み込んだ。彼の侵入に気付いたゴブリンがぎいぎいと奇声を発する。言葉の通じない相手だと判断したのだから、彼はゴブリンの頭に剣を振り下ろした。そこには、一切の躊躇いという物が感じられない。

「ギイイイイツ!?」

モンスターとの戦闘と言うのは、トーマが思っていたよりあまりにもあつさりとしていた。剣で斬られれば、いとも簡単に命が終わる。そんな事、分かっていたつもりだった。

「ギイイ!」

「俺に触れるな!」

同胞を殺されたゴブリンがレオに飛び掛かるも、彼のガントレットに胴体を殴られて壁に叩き付けられる。頭を強打したのだろうか、ゴブリンは痙攣を繰り返した後、二度と動く事はなかった。

音が止み、しんとした静寂がトーマの鼓膜に襲い掛かる。耳鳴りがして、吐き気がした。その場に蹲り、必死で呼吸を試みたが、悪臭が邪魔をする。彼は諦めて座り込み、胃の中のを全て戻した。

「落ち着いたか、農民」

「……ん、うん」

水筒の水は口をゆすいだせいで空っぽになっている。これからの事を考えて、トーマの気は滅入るばかりだった。

「ごめん、時間取らせちゃって」

「ふん、気にする事はない。貴様が足を引っ張ったところで俺には何の影響も及ぼさん。それに、テストとやらは終わってしまったからな」

レオは麻袋を誇らしげに提げている。その中にはモンスターを倒したという証明が、即ちゴブリンの頭が二つ入っていた。

「あ、また誰か来る」

足音に気付いて、トーマとレオは部屋の隅に隠れる。やってくるのはモンスターではないのだが、彼らは何となくこうしていたのだ。「うわきったねえ!」

トーマは心の中でごめんなさいと謝っておく。

部屋を確かめもせず通り過ぎていったのはバンダナをした小柄な男だった。彼は袋になるようなものを所持していなかったのか、ゴブリンの頭部をその手に抱えたままである。

「……これで三人目か。まずいな、俺たちより先にクリアした者がいるとは」

「しょうがないよ。僕たちが遺跡に入っただのは後の方だったもの」

「急いで戻るか」

「あ、でもまだ時間はあるよ」

トーマがあまりにも何気なく言ったので、レオは目を丸くさせた。時間は残っているかもしれんが、あとどれくらい残っているかまでは分かん。戻る事も考えれば、そろそろ地上を目指すのが良いだろう」

「まだ一時間ぐらいしか経ってないよ？」

「……何故分かる？」

「村には時計なんてなかったからね。何となく、体感で分かるんだ」「自慢じゃないけど」と付け足し、トーマは苦笑する。

「だがテストはクリアしてしまったではないか。こんなところに残る理由はないぞ」

レオの言う事は尤もだが、トーマは腕を組んで考えを巡らせる。

「ちよつと変じゃないかな？」

「何がおかしいと言うのだ」

「時間だよ。どうして制限時間なんて作っただろうと思って」

その問いに、レオは鼻で笑う事で返した。

「突風同盟とは街でも最大のギルド。しかし有象無象の雑魚など必要ない筈だ。テストとはその雑魚をふるいに掛けるものなのだからな、時間を設けるのも頷ける」

「だから、変じゃないかな。そんな凄ところをやってるテストなんだでしょ？ 三時間なんて長過ぎると思わない？」

「……ふん、ここまで来るのに一時間か。貴様が醜態を晒していたせいで時間を取られたが、それがなければとつくに外へ出ていても

おかしくはない時間だな」

その通りだが、その通り過ぎてトーマはへこむ。

「では、奴らは何を求めているのだ？」

「そこまでは。けど、今戻っても一番にはなれないと思うよ」

「速さでは劣るか。ふん、決まりだな」

レオは一人で納得したように頷き、部屋を出た。

「決まりって、何がさ？」

「質と量だ。俺と貴様でモンスターが一体ずつではつまらんだろう。どうせならこの袋をいっぱいにするぐらいの首を集めるとしようではないか」

「……僕の袋なんだけど」

多分、二度と使えない。使う気にはならないだろう袋を見つめてトーマは溜め息を吐く。

「気にするな」

「するよっ」

「貴様の助言もあって俺の気分は実に良い。良し、奥に進むぞ」

何だかんだでレオに協力しながら、自分も少しずつクリアに対しての気持ちが上がきつつあるのに気付いて、トーマはもう一度溜め息を吐いた。

ここで何があったのかは容易に想像が付く。だが、信じたくなかった。こんな事をしでかすような者が本当に存在するのかどうか、果たして、人間なのかどうか、トーマには分からなかった。

辿り着いた大広間にはゴブリンの死体が転がっている。その数は大雑把に見ても軽く二桁に上るだろう。床や柱、壁に付着した体液と悪臭にトーマはまたも吐き気を催した。

「誰が、こんな事を」

「さあな。だが、俺には及ぶまいが中々の腕を持っている」

レオは汚れていない壁に背を預けて、退屈そうに目を細める。

「既に狩られた後か。ここに用はない。農民、そこに階段があるだろう？ 下に行くぞ」

「う、うん」

「……馬鹿め。一々モンスター如きの死を気にする奴がいるか」

「だって、しょうがないじゃないか」

ダンジョンに潜って、モンスターと戦うなんて初めてなのだから。そう言おうとして、トーマは気付いた。

「ねえ、君はダンジョンに来るのは初めてじゃないの？」

「初めてだ」

「え、そうなの？ だって、さっきはモンスターと戦っていたじゃないか」

「このレオ・バーンハイトがゴブリン程度のモンスターに遅れを取るとでも思ったか。戦いと言うものはな、心構えが大事なのだ。それさえ理解していれば何とかなる」

レオは何でもない事のように言うが、トーマには理解出来なかった。

「大物がいれば良いのだがな」

「いたら困るよ」

一時間が経過して、二十一名の内テストを切り上げて地上に戻ってきた者は八名。

戻ってきた者を、コビヤクはつまらなさそうに眺めた。彼らが持ち帰ってきたのは全て同じである。全て、ゴブリンの体、部位だ。頭であったり、腕であったりとばらけてはいたが、それも全員が一つずつのみ。つまり、この八人は一時間掛けてゴブリン一体しか倒せなかった事になる。彼は喉の奥で笑うのを噛み殺して、冷静な風に装った。

「突風同盟つつつても、案外大した事ねえな」

「ああ、他の奴は何してんだろうな？ さっさと戻って来いよー」

「良い酒場見つけたんだよ、これが終わったら行こうぜ」

「合格した方のおごりな？」

「はっ、したら割り勘になんだろ」

弛緩し切った者たちを再度眺め、コビヤクは口の端をつり上げる。自らの無能さを露呈して、何を笑っているのだろうか、と。

ここにいる者は突風同盟どころか、どのギルドに行ってもうだつが上がらない。そもそも、彼らを受け入れるような懐の深いところがあるかどうかだ。

今年もまた不作に終わりそうだと、コビヤクは愁いを帯びた瞳で遺跡の方角を眺める。

ただ、一人だけ例外はいた。一番最初に戻ってきた少女である。彼女はコビヤクが把握している限り一番最初に遺跡に潜っていた。持つて帰ったのはゴブリンの腕一本だったが、その戻ってきた時間あまりにも速過ぎる。十分掛かったか、掛かっていないか。このテストは毎年行われており、今回で八度目になるが、その中でも最も早いように思える。

「名前は？」

他のテスト生を避けるように、離れた場所に座り込んでいた少女へコビヤクは近付いた。

「……名乗りやあギルドに入れてくれるのかよ？」

ぎらりとした獰猛な笑みがコビヤクを捉える。

「さて、どうだろうな」

少女の体は小さい。だが、自分よりも大きく、立場も上であるコビヤクに媚びる姿勢も、動じた様子も見られない。切り揃えられた前髪を指で弄びながら、彼女の笑みは皮肉っぽいものへと変質した。赤々とした髪の色は、彼女の気性を表しているようだ。コビヤクは思っ。

「冗談だよ。ま、あいつらよりもオレの方が見込みはあるって事だろ？」

「想像するのは自由だがな。話し掛けたのはただの気紛れだ」

「そうかよ」

少女は口の端を片方だけつり上げて、流し目でコビヤクを見遣った。

「ジュリ」

ジュリと名乗った少女は立ち上がる。彼女の服装は体の殆どを露出させていた。活動的にも見えるのだが、ジュリの持ち合わせる雰囲気と相俟って挑発的でもある。

「生まれは？」

「良いもんじゃねえよ、あの街だ。で？ 次は何を聞くつもりだよ？」

「ふ、女性に対していささか無粋だったな。気を付けよう」

「気に入らねえ奴だぜ」

呟き、ジュリはどこかへと歩き去っていった。その後姿を見届け、コビヤクはくつくつと喉の奥で笑みを零す。テストをクリアするのは、アレで決まりだ、と。

地下二階も、一階と殆ど変わらない造りであった。どこまで行ってもどこを向いても石造りの通路が伸びている。時折部屋を見つけては、何もないと肩を落とすばかりだった。

「どうなっている、あるのは死体ばかりではないか」

「先を越されたんだろうね」

「貴様あ、何をのんびりとした事を！ このままでは俺の計画が丸潰れではないか！」

計画なんてあったのかと、トーマは心底から驚く。

「この際他のプレイヤーの首を狩るか」

「お願いだからそれだけは止めてくれないかな」

「だが、こうもモンスターがいないのではな……」

レオは何気なく剣の柄に手を遣った。その仕草が、トーマにはとても恐ろしいものに見える。

誰かに助けて欲しいという気持ちがなかった訳ではない。トーマはレオから視線を逸らして、背後の天井に目を向けた。瞬間、背中に嫌なものが走る。

「もっ、モンスターだ！」

「何だと!？」

叫び、トーマはレオの後ろに身を隠した。

「どこだ、どこにいる？」

レオは焦りながらも抜剣し、前方に向けて構える。

「う、上だよ！」

トーマが指差す方を見ると、何かが天井の辺りを蠢いていた。ゴブリンではない。レオも思わず身震いしてしまうほどの大きさのムカデである。ムカデは牙を剥き出しにして、トーマたちをじっと見ていた。

「虫如きが俺を見下ろすかつ」

レオは剣を天井に向かって突き上げる。ムカデはその体に似合わない俊敏な動きで攻撃を避け、

「あ、うわあ！」

トーマへと襲い掛かった。

「農民っ」

殺されないまでも、何かしらのダメージは負わされてしまう。トーマは背中を向けて逃げ出した。だが、動く彼に反応してムカデは天井から彼を追う。

「馬鹿者止まれ！俺がこいつを仕留める！」

「むっ、無理だって！」

止まったら死ぬ！走るのに邪魔なので、トーマは荷物を捨てようとまで考えた。が、閃く。自分だって武器を持っているのだと言う事に。

背負っていた袋を投げ捨て、スコップを両手で構えて立ち止まる。すぐそこまでムカデは迫ってきていた。醜悪な外見をしたモンスターに気圧されたが、彼は目を瞑る事でそれを忘れ去る。何も考えな

いでスコップを思い切り振り被ると、何かが潰れるような感触が柄を通して伝わってきた。

「良くやった！」

「やったの！？」

目を瞑っているので何が何だか分からない。トーマはふらついて壁に頭をぶつける。レオはうそぞと動いている大ムカデを踏み付けて彼に駆け寄った。

「うむ、見事に頭を潰したぞ。しかしだな、目を瞑って戦うというのは見苦しい。良いか、バーンハイトは無様な醜態を晒さない。バーンハイトの臣下たる貴様も……」

「僕は君の子分じゃないってば」

心臓がまだ早く脈打っている。思っていたよりも体が動いたのは、対象がムカデという、いかにもモンスター然とした姿だったからだろう。人間に近い姿をしたゴブリン相手ではこうはいかなかったと、トーマは安堵の息を吐く。

「ああ、そうだ」

レオは剣の切っ先をトーマに向けてから、

「え、あ、なっ、何？」

倒れていた大ムカデの体を切り刻んだ。

「虫の生命力を侮るなよ、農民。俺とは違ってこいつらには恥も外聞もなければプライドの一欠けらだって持ち合わせてはいない。隙を見せれば生き残る為に襲い掛かってくる。この手のモンスターは確実に息の根を止めるのが常道だ」

「そこまでする事はないんじゃない……」

「このムカデに囲まれても同じ事が言えるか？」

「時と場合によるよね。さあ、先を急ごう」

レオはムカデの頭を袋に入れて担ぎ直す。

「地下への階段を見つけるのが手っ取り早いな。凶悪なモンスターは一番下にいるものだ。そいつの首を持って帰ればテストもクリア出来るだろう」

「凶悪な……」

想像するにおどましい。トーマは頭を振って、そんなモンスターとは出会いませんようにと強く祈った。

地下一階と同じく、地下二階でも大広間を見つけた。トーマたちは広間の真ん中に腰を下ろして、辺りをぼんやりと見回す。

「通路を進んで広間。広間には階段。……どの階も造りは同じ、つまらん」

「分かりやすくて良いんじゃないかな。ほら、多分迷わないで済みそう」

「モンスターも小鬼と虫だけだ。袋はだいぶ重くなってきたが、中身は変わらない」

何が不満だと言っのだろう。レオは長い息を吐き、その場に寝転がった。

「起き上がれるの？」

「案ずるな。この鎧はオーダーメイド、俺の体格にぴったりと合っているだけでなく、軽くて丈夫な素材で作られている。起き上がるくらい訳はない」

「そっか。……あと一時間つてところだね」

そろそろ戻らなければ、モンスターを何匹倒していようが問答すら無用で失格になる。レオは何も言わずに立ち上がり、誰もいない広間を見回した。

「袋には十を超えるモンスターが入っている。この辺で良からう」

全然良くない。レオの表情からは満足していないといった色が見て取れる。彼が口に出したのは、自身に言い聞かせる為なのだ。

「農民、道は覚えているか？」

「何となくだけだね」

「では行くぞ」

諦めたように薄く笑うと、レオは歩き始める。先を行かれてしま

つてはどうやって案内すれば良いのか分からない。トーマは苦笑して彼を追い掛けた。

——何かがおかしい。

試験官のプリカは言い知れぬ不安を覚えていた。テスト生の殆どは遺跡を抜け出した。残っているのは二名。プレートアーマーを装備した少年と、スコップを持ったそのお供の少年である。彼らは地下二階の大広間まで到達したらしいが、空振りに終わって地上に戻ってくる様子だった。仕留めたのはゴブリン八匹と大ムカデが二匹。実に平凡な戦果である。今回のテストではゴブリン二十四匹を一人で殺し切った射手がいる。何をやったところであの二人が彼を押し退けてクリアするのは難しい。であるから、早く地上に戻れと言うのがプリカの正直な意見だった。

彼女は最後まで残ったテスト生、レオたちの後方に位置取りながら帰還を目指している。しかし、一つだけ問題があった。

どうにも、臭う。空気が重く、淀んでいた。今の時期のギナ遺跡で感じるレベルの圧ではない。気のせいかもしれないが、今まで培ってきたモノが訴えている。早く逃げろ、ここは危険だ、と。

それでも、前に行く二人が脱出しなければ動けない。焦れた気持ちを抱えたまま、プリカは歯噛みした。

地下二階の広間を抜けて、地下一階に上がる為の階段を目指す。遺跡内には自分たち以外の足音はない。物音すらなかった。テストを受けていた者の多くはダンジョンを抜け出したのだろう。二時間以上も経っているのだから、モンスターも殆どが狩り尽くされている。

つまり、これ以上ここにおいても何も起こらない。時間はまだ少し残っているが、テストは終わったも同然だった。

レオは最初の頃の勢いもなく、疲れた風に歩いている。トーマはと言うと、テストが終わりに近付きつつあるので緊張から解き放たれようとしていた。まさか自分のような人間が訳も分からぬままダンジョンに入り、モンスターと戦闘する事になるとは、馬車に乗って旅をしている時には思いもしなかっただろう。そんな事を考えて、でも意外とやれるものだ、ほんの少しの自信も得ていた。

「……まあ、このギルドが駄目でも他があるじゃないか」

「バーンハイトに敗北は許されぬ。くっ、よもや最初の一步で躓くとはな。だが、俺はここで終わらんと。必ずや……」

人生設計を語るレオを無視して、トーマは階段を上っていく。先ほど得た自信を粉々に碎かれる事など、今の彼は知る由もなかった。

テスト・3

地下一階の大広間には、頭や腕のないゴブリンの死体が散らかっているままだった。トーマは吐き気を堪えてその場に踏み止まる。当たり前の光景なのだが、少しは期待もしていた。誰かが片付けてくれているんじゃないか、と。

「農民、時間はあとどれくらい残っているのだ？」

「うーん、二、三十分くらいは」

「余裕があるな。袋が重くて少し疲れた。おい、ここで休んでいくぞ」

レオはトーマの返事を聞かずにその場に座り込む。

「そんなに疲れるなら、鎧なんか着なければ良いのに」

「格好が付かんだろう。俺は誇り高きバーンハイトの長子なのだぞ。何も知らない者どもに威光を見せびらかさんでどうする」

「どうもしなくて良いんじゃないかな」

トーマはレオの隣に座り、息絶えているゴブリンを眺めた。街に着いてからまだ一日と経っていないのに、既に神経は磨り減り、感覚が麻痺している。ここで暮らす限り、村と同じように平穏には暮らせない。分かってはいたのだが、やはり、辛かった。

「ねえ、街に戻ったらどうするの？」

「決まっている。まずはギルドの頂点に立ってだな……」

「……無理じゃないかな」

「無理な事などない。農民、後ろ向きな考えは貴様の悪い癖だぞ」
前向き過ぎるのもどうかと思ったが、トーマは口に出さずに胸にしまっておく。

「もしもの話で良いよ。もしも突風同盟に入れなかったら、その時はどうするの？」

「万が一にも有り得ない話ではあるが、そうだな、その時は……宿を探す」

「宿？」

「そうだ」とレオは頷いた。彼は自分の体を見ようとして首を動かす。

「随分と汚れてしまった。風呂に入りたい。少し、眠りたい」

レオはその足で別のギルドを探すとも言っていた。だからトーマは吹き出す。確かに、そうだ。自分だって汚れてしまったし、疲れている。早く宿を探して眠りたい。

「貴様、何を笑っている！」

「い、いや、君がそういう事を言うとは思ってなかったから」

「ふん、俺だって人間だ。生きている限りは腹も減るし喉も渴く。何もおかしい事はない」

「そ、そうだね」

憤慨した様子で立ち上がると、レオは鞘から剣を抜いた。その切っ先をあらぬ方角に向けて彼は吼える。

「突風同盟など知るか！ 最初から俺には合わなかっただけよつ、それよりも宿だ！ 俺に相応しい最高の宿を探すのだ農民！」

「宿まで君と一緒になの？」

「当然だ！ 臣下たる者が仕えるべき主を置いてどこへ行こうと言うのだ！」

トーマは、レオと出会ってからまだ少ししか経っていない事に気付く。自分たちは友人と呼べるような間柄ではないのだろう。しかし、友人になっても良いと、いや、なりたいと思った。生き馬の目を抜くような生活が待ち受けていたとしても、まっすぐな彼となら上手くやっていける。そんな気がしていた。

「良いよ、宿を探そうか」

言ってからトーマも立ち上がる。瞬間、強烈な重圧を感じた。背中に嫌なものを感じて振り向くと、そこにはゴブリンが立っている。

「……何、だ？」

レオはたじろぎ、数歩下がった。彼の怯えた様子を見て、トーマは息を呑む。

「ギイイイイイイイイイイ！」

耳を劈くような声を上げたのはただのゴブリンではない。レオよりも大きな、異常に発達した筋肉を持つ巨大なゴブリンだ。今まで倒してきたゴブリンとは比較にならない。そこにいるだけで、ただ、恐ろしい。

「何だこいつはあ!？」

レオは巨大なゴブリンに剣を向けるが、その切っ先は震えている。ゴブリンは醜悪な笑みを浮かべて、その手に持っていた棍棒を床に叩き付けた。石で出来ている筈の床があっけなく碎ける。強烈な脅力を見せ付けられ、トーマの膝がぐくぐくと震えた。一体、何が起きているのか、分からない。

嫌な予感はある。

プリカは得物のダガーを抜いて、広間の様子を陰から観察していた。

二人の少年の前に現れたのは、緑がかった肌、大きな耳、皺だらけの鼻、不揃いの歯を持つ――ハイゴブリンだ。近寄りがたいのは風貌のせいだけではない。並のゴブリンでは有り得ない、巨体のせいでもある。更に、ハイゴブリンは戦いに関しての知能も備わっている。素手でも生身の人間を軽く吹き飛ばせる力を持ち得ながら、武器まで使うのだ。人間の落としていった武器や、時にはその場にあるものを利用する。

ハイゴブリンはこのゴブリンを束ねている、言わば親玉だ。縄張りを荒らされ、仲間が殺されている事に対して腹を立てているらしい。しかし、おかしい。ハイゴブリンはつい数ヶ月前に討伐されたと聞いていたのだ。ある程度の安全が保障されているからこそ、テストを行ったのである。

ゴブリンの長、ハイゴブリンはゴブリンが突然変異したものとされていた。突然、生まれるのだ。それでも、この時期にハイゴブリンが出現した事は今までにない。

油断していなかったと言えば嘘になる。街でも最大を誇るギルドだと言うのに胡坐を掻いていたのは事実だろう。テスト生を送り込んでも大丈夫かどうか、しっかりと確かめておかなかったのは自分の手落ちだ。

少年たちはゴブリンや大ムカデには苦戦を強いられなかったようだが、ハイゴブリンが相手となると話は違ってくる。熟練のプレイヤーでも単独での戦闘は避けるべき、多数で挑むべき相手だと言われているのだ。素人には荷が重過ぎる。

ハイゴブリン単独でも危険だ。加えて、

「うっ、わあああああ！？」

ハイゴブリンが姿を見せるとなると、それだけでは済まない。

突如現れた巨大なゴブリンに恐怖した。だが、体は何とか動く。

トーマは逃げ出そうとして振り向くが、その光景を見てしまい、吐息を漏らした。

「う、あ……」

広間には出入り口が三つ。その全てから、ゴブリンが姿を覗かせていた。何匹いるかなど、数える気は失せている。広間全体にモンスターの声が反響しており、トーマたちの心をじわじわと揺さぶった。

「ギイイイイイイイイイ！」

ハイゴブリンが咆哮を上げると、ゴブリンが広間に向かって猛然と飛び出してくる。

「うっ、わあああああ！？」

「伏せる農民っ」

トーマに飛び掛ろうとしていたゴブリンが、レオの剣の錆となっ

た。胴体を切り裂かれ、苦悶の声を上げながら床を転がる。

「後ろ！」

トーマの声に反応したレオが後ろに向かって剣を払った。二匹のゴブリンが斬撃を喰らって吹き飛ぶも、次から次へとゴブリンは彼らに襲い掛かる。

広間には奇声を発して走り回るゴブリンが多数おり、中央ではトーマを庇いながらレオが剣を振るっていた。

「くっ、農民！ 貴様も武器を取れ！」

「そっ、そんな！？」

「俺だけでは無理だ！」

レオは決して凄腕のプレイヤーではない。トーマと比べればまだ戦えるレベルに達しているのだが、彼とて駆け出しのプレイヤーである。装備こそ並大抵のものではないが、それだけなのだ。誰かを庇いながら戦うような事は出来ない。

「ここで死にたいのか！？」

一喝され、トーマはスコップの柄を握る。

死にたい筈、ない。まだ街に来て一日も経っていない。死にたくない。母親と会いたい。村に帰りたい。楽しい事も、何も経験していないまま死ぬのは嫌だった。

「くっそおお！」

相手はモンスターである。だが、彼らにも命があるのだ。仲間を守る為に生きている。それでも、自分以外の命を糧にしてでも、他者を踏み付けにしてでも生き延びたい。

トーマはスコップを振るい、ゴブリンを弾き飛ばす。彼の働きを見て、レオを笑った。この状況下で笑ったのである。

「そうだっ、それでこそバーンハイトの臣下に相応しい！」

レオも剣を操り、ゴブリンの頭を串刺しにして、胴体を薙ぎ、足を切り払っていく。

トーマたちが倒したゴブリンの数は十を超えた。しかし、まだまだ数が残っている。ギナ遺跡中のゴブリンが集まっている事を考え

れば、氷山の一角にも過ぎない。

「あああああああつ！」

足元に纏わり付くゴブリンを踏み潰してレオは前方を薙いだ。剣を奪おうとするモノをガントレットの表面で殴り飛ばす。一々上げる奇声が耳障りで彼は顔をしかめた。

スコップの先端に喰らい付こうとするゴブリンを、トーマはそのまま床にぶつけて押し潰す。群がるモンスターを蹴り飛ばして、意味の成さない声を上げた。

レオの背中にゴブリンが張り付けば、トーマがそれを払って潰す。一方で、トーマの死角の敵をレオが切る。二人は次第に、互いの背中を預け合いながら戦っていた。

疲労感は何論ある。だが、それよりも興奮が勝っていた。ハイゴブリンの醜惡な笑み。傷の痛み。ゴブリンの奇声。迫る死への恐怖。今止まれば、もう二度と動けなくなる。そんな強迫観念に後押しされて、トーマとレオは己の得物を振るい続けた。

「ギイイイイイイイイ！」

「……なんだ？」

ハイゴブリンが高く声を上げると、ゴブリンたちの動きが止まる。ゴブリンは皆、自分たちを束ねるモノへと視線を注いだ。その期待に応えると言わんばかりに、ハイゴブリンは棍棒を振り払う。近くにいたゴブリンが天井や壁に吹き飛ばされたが、しでかした当の本人は気にする素振りを見せない。

「来るか、化け物め」

遂に、ハイゴブリンが動いた。ここが自らの領土だと宣言しているかのように、知らしめるかのように悠然と歩く。トーマたちは霧囲気に吞まれてしまつて動けず、広間の中央で武器を構えるしか出来ない。

「どう、するの？」

「戦うしかあるまい。……奴の一撃は俺が受け止める。その隙に攻撃を加えろ」

「僕が!？」

「ならば貴様が受け止めるか？」

ハイゴブリンが右手にぶら下げている棍棒を見て、トーマは首を横に振る。

「それより、逃げようよ。ゴブリンたちも動いてないし」

「俺たちが逃げれば追い掛けられる。この数相手では囲まれて終わりだぞ」

「でもっ」

「くだい！」

レオは剣をハイゴブリンに向けて、深く息を吸い込んだ。

「俺の名はっ、レオ・バーンハイト！」

彼の声に呼応するかのように、ハイゴブリンが大きく足を踏み出す。一步、二歩。手の届く距離まで近付いたところで、棍棒を上段から振り下ろした。レオは両手でグリップを握り、剣を振り上げる。

「貴様などに——っ！」

レオが棍棒を受け止めている隙にトーマが走り出した。彼にはあの巨体を一撃の下に倒せる自信はない。しかし、やらなければやられるのはこちらなのだ。

トーマの動きに気付いたハイゴブリンは右手だけで持っていた棍棒に左手を添える。力が加わり、レオの膝が崩れ落ちていった。それでも、彼は必死の形相で攻撃を受け止め続けている。

「このお！」

ハイゴブリンの背面に回ったトーマはスコップの腹で背中を強打した。だが、まるで効いていない。彼の腕力が低過ぎた訳ではない。疲弊しているからとは言え、鉄の塊で殴打したのだ。並のモンスターなら悶絶し、あるいは死に到ってもおかしくない。

「う、く……」

「ギイイイイイイ！」

ただ、やはり相手が悪い。ハイゴブリンの恵まれた肉体には打撃が通り難いのだ。その事実にとーマが気付いたのは、レオが限界を

迎えた時である。

レオは床に両膝を着き、許しを乞うかのような体勢でハイゴブリンを見上げていた。にいいと、口元を歪ませたモンスターは棍棒を一度持ち上げ、容赦なく振り下ろす。

轟音が呻き声を掻き消した。石造りの床が粉々に碎け散って穴が開き、粉塵が舞い上がる。昂ぶったハイゴブリンは棍棒を天井に突き出し、雄叫びを發した。

トーマは、一步も動けないままだった。現状を理解したくない。モンスターの死ならば、ここで見た。嫌と言うほど見て、殺した。だが、人間だってゴブリンと同じくあつさと死んでしまうのだ。レオの死を理解した瞬間、スコップは手から零れ落ちる。戦意を失い、その場にへたり込んだ。彼の取った行動は最悪と言える。諦めずに立ち上がり、逃げ出せば良かった。

「ギイイ……？」

この場に留まると言うのは、ハイゴブリンの次なる獲物として立候補している事に他ならない。

戦闘での巻き添えを避ける為、広間の端に固まったゴブリンたちが口々に声を上げる。何を言っているのかトーマには分からなかったが、ハイゴブリンを煽る声には違いなかった。

持ち上げられた棍棒を見遣り、トーマは心中で母親に詫びる。何も出来なくて、ごめんなさい、と。

——全く。全く。全くだ。

何も考えないで奥まで行かずに、最初にゴブリンを倒していた段階で大人しく地上に戻れば、こんな目に遭わずに済んだのだ。誰も苦しい思いをせずに終わったのだ。

彼女は両腕に抱えていた者を見遣ってからこれ見よがしに舌打ちして、広間の隅の床へぞんざいに放り投げる。

「痛……っ」

放り投げられたのはトーマだ。彼は自分の体を手でまさぐり、その感触を確かめている。

「……生きている証拠だ。良かったな、少年」

「生きて……？ 僕、生きてるんですか？」

背の低い黒髪の女は口の端をつり上げた。尤も、彼女は赤い布で口元を覆っている為にトーマにはその表情が読み取れない。

トーマは中央で怒り狂っているハイゴブリンに視線を移す。

「助けて、くれたんですか？」

「……任務だからな」

「任務？」

「……覚えていないのか？ 私は試験官のプリカだ」

その時、数匹のゴブリンがプリカに向かって駆け出していた。歯を剥き出しにして、親玉の戦闘を汚した乱入者へと襲い掛かる。

プリカはベルトに差していた諸刃の短刀、ダガーを二本抜いた。

両手にそれぞれ構え、飛び掛かるゴブリンの喉を的確に捉えて、突き刺す。彼女がダガーを引き抜いてその場で回し蹴りを放つと、三匹のゴブリンが床に倒れ込んだ。

「うわ……」

無駄のない流麗なプリカの動きに、トーマは思わず息を呑む。彼女は倒れているゴブリンの急所に刃を突き立ててとどめを刺していた。

別のゴブリンがプリカに向かおうとするが、ハイゴブリンが叫び、彼らの動きを止める。

「……お前のご主人様も無事だ。全く、厄介なものを着込んでいるから重くてしょうがなかった」

「あ、あ……」

トーマのすぐ近くには、レオが仰向けで転がされていた。苦しそうに唸っている。彼はまだ、生きていた。

「本当に、良かった」

だが、プリカの言った言葉が引っ掛かる。

「でも、コレは僕のご主人様なんかじゃないです。と言うか、僕は誰かの物になった覚えはないですから」

「……そうなのか？ まあ、私には関係ない。それよりも、今はアレをどうにかするのが先だな」

プリカは顎をしゃくってハイゴ布林を示したが、トーマにはアレをどうにかするのは不可能だとは思えなかった。

「……少し辛いが、何とかなるだろう」

ダガーを逆手に構え、プリカはトーマたちを庇うように前へ出る。「本当ですか？」

「……任務だからな」

嘘だった。

プリカにはギナ遺跡程度のモンスターには倒されないと言う自信があった。しかし、ハイゴ布林は別である。今の時期にあのモンスターと対峙するなんて思いもなかった。

彼女の機動力は突風同盟でも群を抜いている。そのスピードに付いていけない人間もそうはいない。そこに加えて、プリカは低位の身体強化魔法、回復魔法を習得している。生存能力にも優れている彼女には単独での任務が与えられる事が多く、また、その任務全てを完遂してきた。

それでも、分が悪い。

「モンスターの注意を引き付ける。隙を見つけて地上に戻り、コビヤクにこの事を伝える」

「プリカさんは……？」

「……言つたらう」

プリカはくると、慣れた手付きでダガーを回しながら広間の中央に向かって歩いていく。ハイゴ布林の正面で立ち止まり、ステップを踏んだ。

ハイゴ布林が棍棒を振り上げ、下ろす。周囲には石の碎ける轟音が響き渡り、その衝撃による粉塵が舞い上がった。

力は強いが、頭は弱い。プリカはハイゴ布林をそう評す。彼女

がこのモンスターと戦闘するのは初めてだった。が、速さでは負けていない。プリカは煙に紛れて跳躍し、ハイゴブリンの肩にダガーを突き刺す。

「ギイイイイイ！」

「……こいつ」

硬い。刃は肉を抉れずに、皮を剥ぐだけに止まった。ならばと、プリカは一度距離を取り、ダガーを鞘にしまう。掌を右腕にかざすと、淡い光がその部位を包んだ。彼女が習得した身体強化の魔法である。低位の魔法である為に特定の部位のみ、それも短い時間しか強化出来ない。それでも、何もしないよりはマシだと言えた。

猛るハイゴブリンに怖じず、プリカは床をジグザグに走り回る。モンスターが棍棒を振り上げたのを見計らい、一息に懐へと飛び込んだ。ハイゴブリンの喉を狙ったが、やはりそこもダガーのような武器では通らない。皮を僅かに裂く程度のダメージしか与えられなかった。

ハイゴブリンは嗚声を轟かせ、左腕でプリカを追い払おうと試みるも、彼女はするりとその場から飛び退いた。モンスターは自らの胸元を叩く破目になり、苦しそうな呻きを漏らす。

プリカは一度息を吐いた。自分が鈍重なモンスターに掴まるとは思わないが、あまりにも決め手がなさ過ぎる。周囲を取り囲むゴブリンたちは相変わらずで、トーマたちが逃げ出せる隙など生まれそうにない。ゴブリンを束ねるハイゴブリンさえ倒せば彼らにも混乱が生まれるだろうが、強化魔法を使ってもダメージを与えられないのでは絶望的である。それでも、時間さえ経てば地上にいるコビヤクが不審に思い、ダンジョンへ様子を見に向かうかもしれない。問題は、それまで時間を稼げるかどうかだ。彼女の体力とて無限ではない。疲弊すれば足は重くなり集中力も途切れる。ハイゴブリンの攻撃をいつまでも回避し続けられるかどうか分らない。それに、モンスターが気を変えてトーマたちを襲えば、そこで終わりなのだ。

——全く。全く。全くだ。

爪先を床に当て、床を鳴らす。性懲りもなく、ハイゴブリンが棍棒を振り上げた。プリカが床を蹴ってモンスターに飛び掛かる。彼女が身に着けている布がたなびいて、まるで赤い風が吹いたように見えた。

テスト・4

ハイゴブリンの攻撃を避け、懷に飛び込んでいくプリカ。彼女の戦いを見ながら、トーマは我知らず拳を握り込んでいた。突風同盟の試験官、彼女なら何とかしてくれる筈だ、そう思いながら彼は息を呑む。

「……く、う」

「生きてる？」

苦しそうに息を吐き、寝返りを打ったレオにトーマは声を掛けた。
「俺が、死ぬ事は有り得ん」

レオは唸りながら上半身を起こして頭を振る。

「農民、俺の身に何が起こったのだ？」

「あの人が助けてくれたんだよ」

トーマは、広間の中央で踊るようなステップを踏んでいるプリカを指差した。レオは彼女の動きに瞠目する。

「何だあの女の動きは？ 信じられん、同じ人間とは思えんな」

速い、と言うか速過ぎる。まるで風だ。ハイゴブリンは動きに付いていけず、棍棒をやたらめったら振り回すだけである。

「これで助かるね」

レオは頷かなかった。確かにプリカは速い。しかし、それだけでハイゴブリンを倒せるのかと言えばそうではないのだ。彼は傍に置かれていた剣を掴み、それを杖の代わりにして立ち上がる。

「農民、貴様はまだ動けるか？」

「動ける、けど……」

トーマはその続きを言いよんだ。動けるが、動けたところで何をしようと言うのだ。彼は唾を飲み下し、レオの返答を待つ。

「このままでは全員死ぬぞ。俺たちも戦いに加わるのだ」

「そつ、そんな、どうして？　だつて、あの人に任せていれば平気じゃないか」

「俺としては気に入らんが、奴がモンスターを倒せるのなら座して傍観するのも良かったかもしれん。だが、あの女では無理だ」

レオは片手で剣を振り、感触を確かめた。本調子とはいかないが、まだ戦える事を確認して、息を吐く。

「細過ぎる。速いが、小さな武器であのモンスターの肉を貫けるような力を持っているとは思えん。いずれは力尽きるだろうな」

「ちよつと待つて、あの人は試験官なんだよ？　僕たちの出る幕はないと思うんだけど」

「俺の生き死にが掛かっている。ならば俺が出ないでどうすると言うのだ。農民、貴様とて同じだ。ここで動かなければ死ぬだけだぞ」
「でもっ」

トーマは広間の中央へ視線を逃がした。そこには、彼の持ち物であるスコップが転がっている。

「……なるほど、貴様の武器は手元にないのか。よし、まずはそれを回収するぞ」

そうではない。武器がないなら戦わなくても良いのではないか。

トーマはそう、言おうとしていたのだ。

「ゴブリンが襲ってくるかも知れんが、俺が道を開く。貴様は後に続けば良い」

だが、言わない。

恐怖はある。しかし、死にたいとは思わない。プリカではハイゴブリンを倒せない。レオの言った事が本当だったなら、このまま立ち尽くしている自分は彼女を見殺す事になるのだから。

トーマは頷き、息を精一杯吸い込んだ。勇気はまだ残っていると信じて、ハイゴブリンを睨み付ける。

ゴブリンが異変に気付き、奇声を上げた。先ほどまで立ち尽くし

ていた者が動き出したのである。トーマと、レオだ。ゴブリンの知能では彼らが何をしようとしているのか、考えられない。それでも動いている。

「ギイイイイ！」

気付けば、数匹のゴブリンが先頭を走るレオに襲い掛かっていた。剣が煌めき、一番最初に飛び掛かったゴブリンの足が切り落とされる。床に落ちて動けなくなったところを足で踏まれて、それきり動かなくなった。

同胞の死を悼むよりも、まず報復を。次いで、新たなゴブリンが床を舐めるように駆ける。

「そこで寝ている」

そのゴブリンの頭をレオが剣で串刺しにした。彼は剣を抜き、振り向きざまに背後にいたゴブリンを薙ぎ払う。

「……何をしている！？」

トーマたちの行動に気付いたプリカが叫んだ。注意の逸れた彼女にハイゴブリンが棍棒を叩き付けたが、プリカは何とかその攻撃を回避する。瓦礫が飛び散り、周囲のゴブリンへつぶてとなって降り注いでいた。

レオが飛んできた石をガントレットで防ぎ、トーマに視線を送る。
「大丈夫っ」

トーマは短く答え、落ちていたスコップを掴んだ。しゃがみ込んだ彼にゴブリンが飛び付こうとするが、トーマはスコップの腹でそれを撃退する。吹き飛ばされたゴブリンが固まっていたモンスターと衝突して叫び声を上げた。

「ギイイイイイイイッ！」

ハイゴブリンが棍棒を振り回しながら咆哮する。ゴブリンたちは怯えて広間の隅に我先にと駆け出した。

「……お前ら、気は確かなのか？」

モンスターから距離を取ったプリカがトーマたちの傍に駆け寄る。彼女は少年たちを心配しているのではなく、邪魔をするなどでも言

いたげな目をしていた。

「問題ない。無事だ」

プリカに答えるのはレオだ。彼はつまらなさそうに彼女を見遣り、やはり細いなと呟く。

「……そういう意味で言ったのではない」

「それよりも女、あのモンスターを倒す術はあるのか？ 何やら、攻めあぐねていたように見えたが」

レオは口の端をつり上げた。プリカの頭に血が上るが、彼女は滾る感情を冷静に処理していく。

「……関係ない。これは私の任務だからな」

「何……？ 貴様、俺の質問には——っ！」

「ないんですね」

今まで口を開かなかったトーマの声に二人が反応した。彼はまっすぐにプリカの瞳を捉えている。その目に気圧されるような形で、彼女は逃げるように視線を逸らした。

「ないん、ですよ。あいつを倒す方法なんか」

「……ああ、ない」

トーマは落胆しなかった。何となく、予想は付いていたのである。「……私はハイゴ布林を倒せないだろう。しかし、助けは来る筈だ。地上にはもう一人試験官がいただろう？」

「だが絶対ではない。それに、助けを待つような真似は氣に入らん。俺はレオ・バーンハイト。自らの力で道を切り開いてみせようではないか」

「……さっきまでのびていた者の台詞とは思えないな」

「何だと貴様あ！？」

レオがプリカに詰め寄った時、ハイゴ布林が怒りにその身を震わせていた。モンスターは床を踏み砕く勢いで彼らに近付き、棍棒を横薙ぎに払う。

「伏せろっ」

身を低くして攻撃を避けた三人は、モンスターから再び距離を取

った。

「……鈍いのが唯一の救いだな」

「や、やっぱり今の内に逃げちゃえば。三人なら、何とかなるんじゃないんですか？」

トーマは出入り口を指差す。そこにもゴブリンが固まっていたが、ハイゴブリンと戦うよりは、あそこを無理矢理に抜けた方が助かるのではと、彼は思った。

「駄目だろうな。先も言ったが、俺たちが逃げ出せばゴブリンは足止めを仕掛けてくるに違いない。三人が三人とも、上手くその囲みを突破出来とは思えん」

「……時間を掛ければ、後ろからハイゴブリンに襲われておしまいだ」

しかしハイゴブリンを倒す手段はない。

「じゃあ、こうやって逃げ回るしか出来ないんですかつ」

「……死ぬよりはマシだろう」

トーマは何も言えなかった。眼光の鋭いプリカが強く見据えたかと言うのもあったが、助けが来るのなら、下手に動くよりもこうやって時間を稼いでいる方が助かる確率が高いと感じたのである。

だが、彼はそう思わなかったらしい。レオは剣を構えて、ハイゴブリンに向かって走り出したのだ。トーマたちの呼び掛けの声を無視して、モンスターの攻撃を床を転がる事で回避する。

「おおおおっ！」

レオは勢いを殺さぬ内に両膝を着き、上半身の力だけでハイゴブリンの足を切り付けた。肉を両断するには到らなかったが、

「ギイイイイイイイッ！」

苦悶の表情を浮かべるモンスターを確認して、ダメージは通っているのだと気付く。レオは追撃を加えようとして背後から剣を振り下ろすが、ハイゴブリンは振り返って棍棒を払った。

「……考えなしが」

プリカは苛立たしげに呟き、レオを両手で抱えてその場から脱出

する。彼女がついさっきまでいた場所を棍棒が通り過ぎていき、その様子を見ていたトーマは震え上がった。

「けっ、怪我は？」

「俺が傷を負うとも思ってたか」

プリカはトーマの傍へレオを投げる。鎧が間拔けな音を立てて軋んだ。

「貴様っ、俺が怪我をしたらどうするつもりだ!？」

「……本物だな、お前」

ハイゴブリンは足を押さえてトーマたちを強く睨み付けている。

「……倒せもしないのに勝手な真似はするな。お前が死ぬだけならまだしも、私たちまで巻き込むつもりか？」

「死にたくないならやらねばならんだろう。何もしないで殺されるなど、バーンハイトには許されん。そうだろう、農民？」

「僕、バーンハイトじゃないし。それよりプリカさん、あの、力持ちなんです」

女性に対してこんな事を言うのは躊躇われたが、気になったのだから仕方がない。トーマは少しだけ目を伏せていた。

プリカは気にした素振りを見せず、自身の腕を掲げてみせた。

「……ああ、私は肉体を強化する魔法が使えるからな」

「貴様、魔法使いだったのか？」

「これぐらいしか出来ないからな、魔法使いと呼ばれる域には達していない。それよりも、目上の者に対して貴様とは……」

言い掛けて、プリカは背後から走ってきたゴブリンを蹴り飛ばす。

「……まずいな。なりふり構わず私たちを殺す気らしい」

殺気立ったゴブリンたちを見回して、トーマの手が震えた。

「雑魚を黙らせるには親玉を潰すのが一番だ。農民、俺に続け。死ぬ気で掛ければ何とかなろう」

ならないと思った。トーマは今までに生きてきて、一番頭を使っただ。どうすれば助かるのか、どうやって逃げ出すのか。

「時間など残されておらん。今やらなければ死ぬぞ」

「……不用意に動くなと言っている。今、私たちに何ができる？」

「あ、あのっ」

「……なんだ？」

「その魔法って、僕たちにも効き目があるんですか？」

結局、自分だって馬鹿なのだ。毒されたのかもしれないが、彼の言う事にも一理ある。今動けなければ、これから先ずっと、何も出来ない。可能性があるなら賭けてみるべきだ。トーマが出した答えは、ハイゴ布林を倒す為のもので、レオに同意するものだった。

プリカが先行してハイゴ布林に向かう。モンスターは闘争本能に駆られて棍棒を振るった。彼女は跳躍し、ハイゴ布林の背後に回る。

後にくトーマたちも戦闘に加わり、まずはレオがハイゴ布林の厚い胸板目掛けて剣を振るった。その攻撃はモンスターの素手によって受け止められる。

「来るぞ農民！」

レオが叫んだ途端、ハイゴ布林は彼に向けて棍棒を払った。鎧を着込んでいたとして、まともに食らえばただでは済まない攻撃である。それをトーマがスコップの腹で防いだ。衝撃に歯を食い縛り、彼は悲鳴のような叫びを上げる。

「プリカさんっ！」

「……分かっている」

プリカはハイゴ布林の背を蹴り、モンスターの肩に着地した。両手にダガーを構え、ハイゴ布林の両目に突き刺す。固い肌とは違い、柔らかな眼球はいとも容易く刃を飲み込んでいった。ハイゴ布林は痛みに耐えかねて呻き、怒りに任せて叫ぶ。

「持たない……っ！」

「女っ、早くしろ！」

プリカはダガーを引き抜かず、空手のままでモンスターから飛び

降りた。彼女はハイゴブリンの腕を押さえている二人に近付き、両手を向ける。

「……これで打ち止めた。しくじれば終わりだぞ」

「やる前から失敗を恐れてはっ！」

身体強化魔法の効果は、それを行使する術者だけに与えられるものではない。対象を選ぶ事も出来るのだ。

トーマたちがハイゴブリンの攻撃を受け止められているのは、プリカが彼らに魔法を掛けたからである。尤も、魔法の効果は長く続かない。更に言えば、もともと力の弱い——例えば彼女のような——者に掛けても大幅なパワーアップは望めない。しかし、最初から力の強い者に掛ければその効果は低位の魔法とは思えないほどに高まるのだ。

「農民っ、役割を果たせよ！」

レオがハイゴブリンの手から剣を抜き取る。勢い余ってモンスターの指を切り裂くが、彼らの狙いはここではない。

「……最後だ。不本意だけど、預けるぞ。私の命」

「う、わ……」

トーマの体に力が沸き起こる。こんこんと、枯れない泉のように力が流れる。増していく。魔法を限界まで使用したプリカがふらつき、彼の後ろで膝を着いた。

ハイゴブリンが自由になった腕、その行く先は正面にいるトーマである。モンスターは彼を殴り潰す勢いで、

「うわあああああああっ！」

拳を振るった。

が、届かない。

両手を広げたトーマがハイゴブリンの攻撃を一人で受け止めているのだ。

身体強化魔法の重ね掛けである。プリカは残った力を全てトーマに注いだのだ。彼は潰されまいと必死に耐える。気の遠くなる痛みと重みが、いつまで経っても終わらない。

「良くやった農民！」

力を込めようとして姿勢を低くしたのが、ハイゴブリンの運の尽きだった。その体勢はレオにとってあまりにも都合が良い。剣を振り下ろし、首を斬り落とす為にはあまりにも。

レオにとってはまるで、覚悟を決めたハイゴブリンが自ら首を差し出しているように見えていた。

確かな手応えを感じ、

「ここまでだ、下郎」

首を、落とす。

ハイゴブリンの体に一瞬間だけこれ以上ない力が入り、その後はもう、あっけなく崩れ落ちた。その衝撃で堆積していた埃が舞い上がり、やがて全ての音が止む。

魔法の効果が切れたトーマはスコップを取り落とし、その音で周りにいたゴブリンたちが奇声を上げた。

「……来るか？」

「そんな……」

余力は残っていない。与し易いゴブリンと言えども、トーマたちはもうまとともに戦えないのだ。多勢に無勢、あの数で来られては嬶り殺されるしかない。

しかし、長の死を間近で見てしまったゴブリンたちはトーマたちを避けて散々に逃げ去っていく。やがて全てのモンスターがいなくなった後には、プリカの溜め息が殊更にうるさく聞こえる有様だった。

「や、やった……」

「……何とか繋がれたか」

強敵に勝利した喜びよりも、生き残った事が何よりも嬉しかった。トーマは大の字になって床に寝転がる。

「見たか俺を！ 後世まで語り継がれるであろう俺の八面六臂の活躍を！」

レオだけでも嬉しいがっていた。彼にとっては強敵を倒した事の

方が大きいのだろう。

「流石は俺だつ、レオ・バーンハイトの名は未来永劫語り継がれるであろう！」

「……あのうるさいのをどうにかしろ」

どうにか出来ていたならここまで付き合わされてはいない。トーマは曖昧に笑って、苛立っているプリカを受け流した。

「見たか農民、俺の凄さを！」

「あはは、凄かったよ」

「うむ。しかし貴様も良い仕事をしたな。女、貴様の魔法も中々のものだったぞ」

「……ああ、光栄の極みだね」

プリカは皮肉っぽく呟き、ハイゴブリンに刺したままだったダガーを回収する。そして、トーマたちに向かって頭を下げた。

「すまなかった。こんな事になったのは全て、私たち突風同盟のミスだ」

頭を下げられた二人は顔を見合わせ、何の事だか分からないと言った風な顔を浮かべる。

「あの、僕はそんなの氣にしません。だってプリカさんは僕らを助けてくれたじゃないですか」

「……いや、しかしだな」

「モンスターを倒せたのだから、俺から言う事は特にない。それに、だ」

レオはハイゴブリンの首を掴み、プリカの方へ見せ付けるように突き出した。

「これでテストは文句なしにクリアだろう？」

プリカは目を丸くしていたが、レオの言葉を理解して、また、彼の気性をも理解出来た氣がして喉の奥で笑む。

「……ああ、そうだね」

「うむ、では地上に戻るとしよう」

トーマたちが歩き出したと同時に、広間の入り口から一人の男が姿

を現した。もう一人の試験官、コビヤクである。

「……遅かったじゃないか」

「それは俺の台詞だ。プリカ、何があった？」

コビヤクはまず、広間に点々と転がっていたゴブリンの死体を見て、それから、中央に転がる首をなくしたハイゴブリンの死体を確認して驚きの声を上げた。

「まさか、ハイゴブリンが？」

「……そのまさかだよ。コビヤク、これは私らのミスだ」

「だから気にするなと言ったではないか」

偉そうにふんぞり返るレオへ訝しげな視線を送り、コビヤクは腕を組む。

「誰がやった？」

「無論、俺だ。まあ、少しはこいつらも働いたがな」

レオの言葉が信じられないコビヤクはプリカを見た。が、彼女はその通りだと言わんばかりに両手を上げる。試験官の彼女がいたとは言え、新人プレイヤー二人を加えた三人でハイゴブリンを打倒したとは未だに信じられなかった。

「……コビヤク、私はこいつを推薦するよ。間違いない、文句もないだろう？」

プリカはレオを指して立ち上がる。

良かったと、トーマは素直に思った。一時はどうなる事になるかと思っただ、これで全て終わりである。全員が生きて戻る。しかも、レオにとっては十全な結果だろう。地上に戻ったら自分だけでも宿を探して、それからゆっくりとギルドを見つけよう。そう思い、トーマはほっと息を吐く。

「ああ、文句はない。詳しい話はまた後で聞きましょう。とりあえず、今はここを出るのが先だ」

コビヤクの後にレオが続き、それからトーマが歩き出した。

「……ああ、それと」

トーマの肩をプリカが掴む。

「この子も推薦するよ。彼がいなければ、私たちは死んでいた。命の恩人だし、何より突風同盟に相応しい力も持ってる。どうだい、文句はあるか？」

「ほう、お前がそこまで言うとはな。良いだろう。勿論、許可だ」

「おお、良かったではないか農民！」

「え？ えつと？」

意気揚々と歩き出すレオ。足早に広間を後にするコビヤク。

「あ、あの？　じつ、実は僕……！」

「名前は？」

プリカに見つめられ、トーマは思わず名乗ってしまった。本当はこのギルドに入りたいと思っていたいなかったんですと、そう言おうとしたのだが。

「……トーマ。ん、トーマ」

プリカは口元を覆っていた布を外して、笑う。

「これで借りは返したよ。良かったじゃないか、お友達と離れ離れにならなくて」

「う、あ。………はい」

——やたら笑顔の男と綺麗な女には気を付けな。

トーマは今更ながら、旅立つ前に母親が言っていた事を思い出し、忠告を無視する形になってごめんなさいと心の中で謝った。

嘔き出す君と吐き出すあなた

トーマとレオはハイゴブリンとの戦いの後、試験官二人に連れられて突風同盟の本拠地に案内された。

『ギルドに籍を置く者の大半はここで寝泊りをする。お前たちの生活の中心は、今日からここになるんだ』

そのような言葉をコビヤクに掛けられたが、トーマたちの耳には入っていなかった。さっさと部屋に案内してくれ。風呂に入らせてくれ。と言うより何より早く眠らせてくれ。そんな事しか頭の中にはなく、彼らはぼんやりとした意識で説明を自ら聞き逃していたのである。

街に着いてから初めての夜が終わり、初めての朝を迎えた。

「んん……」

トーマは寝ぼけ眼を擦り、上半身を起こす。ここはどこだろうと思ったが、昨日起こった事を思い出して頭を抱えた。望んでいようが、いまいが。彼は今や突風同盟の一員となったのである。

まず、部屋の中を見回してみた。突風同盟に所属する者に割り当てられる部屋らしいが、造りは粗末に見える。広さはそこそこあるのだが、壁は薄く、木製だった。窓からは陽光が降り注いでいるが、少し日当たりが悪いように感じる。置いてあるものは部屋の隅の机ぐらいのもので、トーマの持ってきていた荷物はベッドのすぐ近くの床に置かれていた。その全てを確認してからようやく安堵の息を吐く。

「僕、この街で生きてるんだ」

「……うーん」

苦しそうな声が隣から聞こえた。誰だろうと思うまでもない。トーマの荷物と同じく、彼の荷物のプレートアーマーも近くに置かれていたからだ。そして驚愕する。荷物は、これだけなのかと。

「お、おはよう」

トーマの隣のベッドで眠るのはレオ・バーンハイト。

昨日、街で出会ったばかりのトーマを引っ張り回して、拳句ギルドの入団試験を無理矢理受けさせたわがままな少年である。

「ぐ、あ、朝か。うう、朝餉を持てい」

「嫌だよ」

レオはどうやら寝起きが悪いらしい。トーマはベッドから起き上がり、ぎしぎしと軋む安っぽい音に安心した。

そして、良く部屋を見ると、今自分がいる場所とは反対側にもベッドが二つあるのに気付く。どうやらこの部屋は四人で使っているらしい。起きるのが遅かった為か、同室の二人はどこかへ行っているのだと推測する。

「でも、挨拶の一つぐらいは欲しかったかも」

トーマはすんすんと鼻を鳴らして、自分の衣服の匂いを嗅いだ。びつくりするぐらい臭い。頭を掻きながら、彼は袋の中から着替えを取り出した。

「何故起こさんのだ!？」

目覚めたレオの第一声は実にうるさかった。

トーマは耳の穴に指を入れて顔をしかめる。起きるまでは時間が掛かるが、起きてしまえばいつものレオだ。やかましい事この上ない。

「そしてどういう事だ。俺がこのような、家畜を住まわせるのと同じレベルの小屋で寝食をせねばならないだ? ふざけるな、俺はバーンハイトの長子、レオ・バーンハイトだぞ!」

「知ってるよ。あ、ご飯は食堂で食べるんだって。ここじゃないら

しいよ、良かったね」

「良くないに決まっているだろう！」

レオはベッドから立ち上がり、拳を固めて熱弁を振るう。しかしトーマはその全てを聞き流した。それよりも、改めてレオを見ると、彼は実に恵まれているのだと思う。髪も肌も綺麗で、体付きも良い。鎧を脱いでもレオには何か気品と言うか、やんごとなき者の雰囲気がある。自分と同じ男で、自分と同じ世界の人間なのかどうか疑わしくなってくるものだ。

「何をじろじろと見ているのだ」

「あ、ごめん。それよりさ、この部屋は僕たちだけで使っんじゃないらしいよ」

トーマは二つのベッドと、その近くに置いてある荷物を指差す。

「……なっ、まさか。まさかっ？ そんな馬鹿な！？ ただでさえ狭い部屋が余計狭くなるではないか！」

「そうかなあ？ 結構広いと思うよ。僕の部屋より全然広い」

「農民の貴様はそう思うかもしれんがな。俺には耐え切れん」

「だったら出れば良いのに」

何気ないトーマの呟きに反応し、レオは更に憤った。声を荒らげてベッドの上でぎゃあぎゃああと喚く。一頻り暴れるとすっかりしたのか、彼は座り込んでお腹を押さえた。

「腹が減った」

「そう言えば、昨日は何も食べずに寝ちゃったんだっけ。……お風呂、貸してくれるのかなあ」

「貸さんと言うのなら奪うまでよ。よし、農民、まずは腹ごしらえだ」

そう言ったレオは着ていた白いシャツを脱ぎ捨てる。上半身裸の彼は部屋中を見回して、とぼけた顔で呟いた。

「おい農民、俺の着替えはどこにあるのだ？」

君は本当に馬鹿なんだね。遠回しに遠回しを重ねたトーマがレオに掛けたのはそんな言葉だった。

トーマたちは部屋を出て、建物の中を当て所なく歩き回る。その結果、どうやらここはギルドの人たちが使う、寮のような場所なのだと気付いた。彼らは階段の踊り場の窓から、ぼんやりと眼下を見下ろしている。中庭のような空間があり、そこでは数人の男女が噴水の周りで談笑しているのが見えた。

「似たような造りだな。まるでギナ遺跡と同じだ」

「こっちは地下じゃなくて地上だけだね。おまけに凄い、八階建てだよ？ 街って本当に凄いんだね」

「む？ それくらい普通ではないのか？」

レオはつまらなさそうにトーマを見る。

「……どうせ僕は田舎者ですよーだ」

「貴様が田舎者なのは知っている。それよりも、貴様が言っていた食堂はどこにあるのだ？」

「一階じゃないのかな？」

「ならば何故俺たちはここにいる？」

「どうしてだろうね」

トーマが笑ったので、レオは彼の頭を思い切り殴った。そして拳を押さえて悶絶する。

「き、貴様よくも、この石頭が……」

「僕は何もしてないよ！」

レオは暫くの間怨嗟の声を漏らしていた。トーマは窓から顔を出して、寮とは反対側に位置する建物を見遣る。

突風同盟はルートナインで最も大きいギルドだ。大人数を抱えている為、その本拠地も数あるギルドの中で一番大きい。そして街の中心部に位置している。現在トーマたちがいるのは突風同盟の南寮、五階だ。寮は中庭を中心にして屋根の赤い南寮、屋根の青い東寮、屋根の白い西寮と全部で三つあり、このギルドに属する者の生活の中心となっている。また、北側に位置する黒い屋根の建物は突風同

盟の重要な人物や、優れた能力を持つ者、言わば幹部の人間の住居となっていた。

「あれ？」

「どうした農民」

レオが窓に近付き、トーマの横から外に向かって顔を覗かせる。

「ほら、あっちの黒い建物から出てきた人。見覚えはないかな」

「……見えんぞ。どれだ？」

「え、そう？ とにかく、プリカさんじゃないかな、あの人」

着替えのないレオとは違って当たり前なのだが、プリカ、らしき人物は昨日と違う服装で中庭を歩いていていた。

「あ、そうだ。プリカさんに食堂の場所を聞こうよ」

「何？ 駄目だ。バーンハイトは自らの手で道を切り開く。他者に力を借りるなど……」

「じゃあ僕が聞くよ」

トーマは息を腹いっぱい吸い込む。何をするつもりなのかとレオが問おうとした瞬間、

「プ・リ・カ・さああああああああああん！」

大音声がレオの耳をつんざいた。彼は耳を押さえて踊り場にしゃがみ込む。

中庭にいた全ての人間が突然響き渡った大声に驚き、視線をきよるきよるとさ迷わせて、こちらに向けたり、あちらに向けたりしていた。その中で、はつきりとした視線をトーマに向ける者が一人。

「あ、気付いてくれたみたいだよ」

プリカは拳を震わせて、両手を上げて何やら叫んでいたが、何を言っているのかは聞き取れない。彼女はやがて脱兎の如き勢いでその場を逃げ出してしまう。

「ところで、どうしてしゃがんでるの？」

レオは答えず、トーマの頭をもう一度殴った。

南寮五階の踊り場まで全速力で駆けてきたらしいプリカは、肩で息をしながらトーマを睨んでいた。彼はと言えば、睨まれるような事をした覚えがないので首を傾げる始末である。

「おお、来たぞ」

「……………お、お前、わつ、私に恨みでもあるのか？」

「ええ？ そんな、ないに決まっていますよ！」

「……………そ、そうか」

プリカの服装は半袖のシャツに丈の短いズボンだった。昨日と似たような格好なのだが、戦闘から離れた彼女の雰囲気にはとげが感じられず、トーマの頬は自然と緩んでしまう。

「……………何を見ている？」

「み、見てません」トーマは嘘を吐いた。

「で、お前ら。私を呼んだからにはそれなりの理由があるんだろうな？」

勿論ですと、トーマは頷く。

「食堂の場所を教えてください」

「うむ、俺は腹が空いている。美味しい飯を所望するぞ」

プリカは呆れて物も言えないのか、壁に背を預けて溜め息を吐いた。

「……………昨日説明しただろう」

「そうなのか？ 俺は全く覚えておらんぞ！」

何故か胸を張るレオ。

「どうしてこんなの推薦してしまったんだろう」なんて呟くプリカだったが、気を取り直してトーマたちに向き直る。

「……………まあ、良い。いや、良いんだ。ちょうど良かった。私もお前たちを呼びに行くところだったからな」

「うむ、そうか。俺の従者になりたいとは良い心掛けだな」

こいつやつぱり馬鹿だ、なんて冷たい視線を浴びせながらプリカは話を続けた。

「昨日に説明してやった事の補足が必要だろうと思ったのだが、そ

の様子ではまた一から話さなければならんようだな」

「それよりも俺は腹が減った。早く食堂に案内しろ」

「あ、はは、出来れば僕もご飯を食べながらお話する方が良いかなあ、なんて」

「……仕方ない」

プリカは階段を下りながら手招きする。

「付いておいで」

元気良く返事したトーマと、やはり偉そうなレオが彼女の後ろをてくてくと付いていった。

突風同盟の各寮の一階には食堂が設置されている。時間によればその寮に住む人間の殆どの食事を一度に賄う為、食堂は寮一階の半分程度の空間を使っていた。

ただっ広い空間に敷き詰められた長い机と丸い椅子。白い壁と床が清潔感を保ったままでトーマたちを出迎える。食堂にはギルドの者が二十人程度おり、思い思いに食事をしていた。

「……そう言えば、ここで食べるのは久しぶりだな」

プリカは感慨深そうに呟くのだが、トーマたちは彼女を無視してカウンターで注文を済ませている。

「プリカさん、ここって、どこに座っても良いの？」

「構わん。席ぐらいでくだらん事を言うな農民。俺はここだ、真ん中が良い！ここに決めたぞ！」

「あ、じゃあ僕端っこで」

「貴様は俺の隣に座れ！」

どうして食堂のシステムについてだけはきっちり覚えているのだろう。プリカの頭は話を始める前から痛くなってきた。

「……ちなみに言っとくと、料理が出来上がる前に席に着いてもしようないからな。ここには給仕なんていないんだから」

「何？では誰が俺の料理を運ぶのだ？」

「お前だよ」

プリカはぞんざいな口調でレオを指差す。

パンを口に加えながらで、出来上がった料理を自分の席まで運ぶと、トーマの頬は緩んでいた。緩み切っていた。湯気の立った熊肉のスープ、色とりどりの野菜が並んだサラダに果実のジュース。

「……栄養バランスは良いが、少し行儀が悪いな」

トーマは急いでパンを飲み込み、ごめんなさいと頭を下げる。

「ああ……いや、すまないな。つつい口を出してしまった。迷惑だろう？」

「うつん、そんな事ないです。プリカさんってお姉ちゃんみたいですね」

「……姉がいるのか？」

「あ。えーと、村に住んでたお姉さんです。血は繋がってないけど、良く遊んでもらってました。あと、色々教えてもらったり。ずっと前に村を出て街に行っちゃったんですけどね」

「そう言う事か」とプリカは呟き、小麦粉を練って茹でた麺を、フオークで器用に巻いて口に運んだ。表情こそ変えないが、彼女はこの料理が好きである。麺に絡まるミートソースが何とも言えないのだ。

「プリカさんも美人さんだし、街の人って綺麗な人が多いんですね」
麺を吐いた。

「うおお！？ 貴様何を考えているっ！？」

「……あ、いや、何でもない」

プリカは平静を装って、テーブルに用意されている紙ナフキンを大量に掴んで口に押し当てる。

「何でもない訳あるか！ まさか貴様、流行り病にでもかかっているのではないだろうな？」

「だ、大丈夫ですか？ あ、僕、水持ってきます」

「……問題ない。少しむせただけだ」

「喉を痛めてるんですか？」

美人やら綺麗などと言われて少し驚いただけだ、とは言わない。まさか年下の男の何気ない発言に照れるとは思わなかった。修行が足りないというプリカは自戒して、ゆっくりと呼吸を繰り返す。彼女が気を落ち着かせる為に何気なくレオの料理に目を遣ると、見事に肉料理ばかりであった。しかし、彼の行儀は異常に良い。ナイフとフォークを使い分け、ナフキンで口を拭く仕草にも慣れが見受けられた。

「野菜も食べたかどうか？」

「野菜は嫌いだ。それより貴様は薬でも齧っているんだな」

「えと、あ、そうだ。プリカさん、そう言えば話ってなんですか？」
不穏な空気を察したトーマが口を開く。

「……ああ、うちのギルドについて説明しようと思つてな。風呂と食堂は自由に使ってもらつて良い。寮に門限はないが、お前らは新人なんだ。あまり調子に乗るなよ。特にお前だ」

「農民、調子に乗って食べ過ぎるなよ。腹を壊して寝込むなどバーンハイトの臣下としては酷く笑えん」

「僕はバーンハイトじゃないってば」

「お前に言ってるんだデカブツ。……突風同盟で活動する以上は、お前たちにも班に入ってもらふ」

プリカは水を一口飲んでから、麵に手を付けようかどうか迷つてやめた。

「班、ですか？」

「そうだ。うちはこれでも人数が多いんでな、ある程度の人数を纏めておきたいんだ。そこで、班だ。一つの班は主に班長が一人。四、五人の班員で構成している」

「くだらん。群れて動くなど俺の性には合わんし、俺は誰の指図も受けん。俺を命令出来るのは俺だけだ」

「嫌だつて言うならギルドをやめてもらふ。団体行動の出来ない人

間は他のメンバーを危険に晒すからね」

レオは低く唸り、ナイフを置いた。

「……それに、いつも班で行動しろとは言わない。有事の際に固まって動いて欲しいだけなんだよ。基本的には皆ばらばらだ。ほら、私だって今は一人で動いているだろう？」

「そういう事は早く言え。で、俺はこの班になる？ 勿論、この農民と同じ班だろうな？」

「えっ、嫌だよ。だって部屋まで一緒なんだし」

「貴様は黙って俺に仕えていれば良い」

部屋が一緒。班も一緒では気の安らぐ時がない。トーマは淡い期待を込めてプリカを見つめる。

「……ああ、その、残念だけど」

トーマはテーブルの上に突っ伏した。

「はっはっは！ そうかそうか、俺と一緒に嬉しいか農民！」

レオがトーマの肩をばんばん叩く。叩く叩く。

「他の班員とは挨拶したのか？ 部屋は同じだった筈だけど」

「あ、それが、僕らが起きた時にはもう部屋にいないくて」

「……まあ、もうお昼を回っているからな。今晚顔を合わせれば済む話だろう」

プリカはフォークをくるくると回して、天井を見上げた。

「お前らの班長についてだが」

「あ、もしかしてプリカさんが班長さんなんですか？」

「またもや期待のこもった瞳に見つめられてしまう。」

「……ああ、いや、残念だけど。だけど、そっちの班長は多分、ギルドでも一番甘い。と言うか、お人好しと言うか」

「要領を得ない人物評だな。女、話す時はしっかりと考えて話すが良い」

お前には言われたくない。プリカは目だけで訴えるが、レオはそんな視線などどこ吹く風で肉を平らげていた。

「まあ良い。明日になって会えば分かるだろう」

それきりプリカは黙ってしまふ。が、トーマには聞きたい事があったのだ。ちらちらと彼女の様子を窺っては、スープをちびちびと飲むのを繰り返す。

「……言いたい事があるなら言ってしまうのが良いぞ」

プリカに見据え付けられたトーマは固まってしまふが、やがて、意を決して口を開いた。

「あの、僕たちは何をすれば良いんですか？」

「何、を？」

「突風同盟って何をやっているギルドなのか、その、分からないんです」

「……好きにやれば良い」

トーマは目を丸くさせる。

「このギルドの人数は本当、もう嫌ってぐらいに揃っているからな。誰かを誘って好きな事をやれば良い。ダンジョンに潜り、モンスターを倒して腕を磨くのも良い。金を稼ぐ為に商売を始めても良い。基本的に私たちは、ただ、集まったただけなんだ。集まった奴がそれぞれ好きな事をやってるだけなのさ」

「料理を、作っても良いんですか？」

「……料理？」

「はい。料理を作って、その、お金を貯めて露店を開いたり！あと、頑張って自分のお店を持ったりしても良いんですか！？」

「ははっ、ああ、良いね、そういうの。その時は私も力になるよ」

プリカは堪えきれずに嘔き出し、それから、少しだけ罰の悪い表情を浮かべた。

「……あれ？ とすると何か、本当はトーマ、突風同盟に入らなくても良かったのか？ 料理やりたいなら、専門のギルドもあるしなあ……」

「む？ おい農民、今更他のギルドに行きたいと抜かしてみろ。その時は、俺が剣を抜く時だぞ」

レオがフォークを持ってトーマを睨む。

「……そいつが本当にやりたい事をやるべきで、行きたいところに行くべきだ。デカブツ、トーマの邪魔をするってんなら私が相手になるぞ」

プリカがフォークを掴んで麺を啜る。

トーマは少しだけ迷って、少しだけ考えた。確かに料理の専門ギルドに行くのが一番なのかもしれない。しかし、彼は何も金銭を得る為だけに街へ来たのではない。トーマはここで、もっと別の大事な何かも手に入れたかったのだ。

「僕は、ここで良いです。ここが良いんです」

「……本当に良いのか？ 推薦したのは私だし、今から取り消してやっても」

「プリカさんもいるから、大丈夫です！」

「……………うつ」

「うおおっ！？ 貴様さっきから何をふざけておるのだ！？」

レオたちの喧騒をよそに、トーマはぼんやりとスープの表面を眺めた。こんな美味しそうな料理を、自分も作れるようになるのだろ
うか、と。

再会は少し早くて

食事を終えたトーマたちは食堂を出て中庭のベンチに腰掛けていた。

「……料理をやってる奴らか。悪いが、私はそういう者とは無縁だな」

トーマはがつくりと肩を落とす。プリカは申し訳なさそうな表情を浮かべていた。が、レオは二人に事など気にせず口を開いた。
「おい、女。このギルドの頂点に立つにはどうすれば良いのだ？」

プリカは半眼でレオを見つめた後、寮の屋根を指差す。

「あそこに上ると良いんじゃないか」

「貴様あ！ 俺の質問には真面目に答えろっ、それが臣下としての務めだろうが！」

「誰が臣下だ」とプリカは反論して腕を組んだ。

「……良く分からないが、頂点と言えばやはりギルドマスターの事だろうか」

レオはベンチから立ち上がり、辺りを見回す。多分、ギルドマスターとやらを探しているのだろう。中庭にいた周囲の者たちからの視線を感じて、恥ずかしくなったトーマは俯いた。

「決まりだ！ 俺はギルドマスターに会うぞ。そしてその地位を退いてもらう」

「無理だろうな」

「無理ではない！ 良いか女っ、やる前から無理だと言っているな……」

「そうではなく、ギルドマスターに会うのが無理だと言っているんだ」

プリカは黒い屋根の建物を示して、皮肉っぽい笑みを浮かべる。

「突風同盟は街が作られてから、初期に出来たギルドだ。所属する者の人数も多い。だが、ギルドマスターの正体を知る者は少ない。会ったと言っ話など聞いた事もない」

「え、そうなんですか？」

「……うん。ただ、うちのギルドは特別に何かをやっている訳ではないし、ギルドマスターも陰から手を貸しているとは聞いたが、手を貸すほどの事があるかどうか。正直に言えば、班長クラスの私ですらそうなのだから、末端の者たちはギルドマスターなんて、いてもいなくてもどっちでも良いと思っているのが殆どだろう」

レオはベンチに座り込み、難しい顔で何かを考えていた。

「それでは俺がギルドマスターになれん。何か策を講じるのだから」

者どもは中庭にいる人々の流れを眺めてぼんやりとしている。

「プリカさん、あの人って狼人族ウルフマンなんですか？」

「……ああ、うちには他にも色々な種族の奴らが所属しているぞ。

バードマン、リザードマン、ドラゴニック、キャットペーパー、鳥人族、蜥蜴人、竜人、猫。どうだ、退屈しないだろう」

「貴様ら俺を無視するとは良い度胸だ！」

「……だから、ギルドマスターとは会えないと言ったらう」

「じゃあどうしたら良いのだーっ！ ……ん。そうだ、一番上がないならその次を当たっっていけば良い」

また良からぬ事を考えているらしい。トーマはレオが何を言っても驚いてやらないと決めた。

「力だ。何はともかく強くなければ下々は付いてこないだろう。女、このギルドで強い者の名を挙げろ」

「……強い、ねえ」

プリカは迷う。今ここで名前を言ってしまえば、この少年はすぐにも走り出してそいつのところまで行くのだろう。しかし、会ったところで彼がそいつらをどうにか出来るとは思わなかった。逆に、どうにか出来るのなら見てみたい。見て、思い切り笑ってやるのだ。「私の知る限りハイゴブリンを単独で、しかも苦戦しないで倒せる

のは……まずはコビヤクだ」

「ほう、あの試験官か。なるほど。しかし、まずは言ったな。他にも強者がいるのか？」

「それから、ザッパか。巨大なハンマーを使う男だ。奴なら、強化魔法なしでもハイゴブリンと素手で戦えそうだな」

それは果たして人間なのだろうか、トーマは想像を膨らませた。
「逆巻く炎も外せないだろう。彼は突風同盟の中でも、いや、街でもトップクラスの魔法使いだからな」

「……リベルファイアとはそいつの名前なのか？」

「いや、言わば二つ名だな。奴が好んで使うのが火属性の魔法だから、そこから、いつの間にかリベルファイアと呼ばれるようになっていた」

レオは掌を開いたり、閉じたりするのを繰り返す。

「魔法か。使えれば便利なのだが」

「使えないのか？」

「簡単に言ってくれる。アレは剣術とは全く次元が違うのだ。持つて生まれた才能、素養がものを言う。……俺には無理なのだ」

レオが後ろ向きな事を言ったのが珍しくて、トーマは少し驚いた。

「あの、魔法って僕にも使えるんですか？」

「……その前に、トーマは魔法についてどれくらい知っているんだ？」

「あー、いえ、あんまり」

「だから貴様は農民なのだ。良いか、魔法とは……魔法とは、だな。あー、魔法とは！」

「もう良い」と、プリカはレオを黙らせる。

「……私は魔法使いじゃないけど魔法を使える。トーマ、魔法を使うにはね、まずは魔法を知るのが大事なんだ」

師匠からの受け売りだがなと付け足して、プリカは指を一本立てた。

「地、水、火、風、光、闇。魔法ってのはこの六つの属性に分けら

れる。どんな魔法もこの六つのいずれかに属するんだ」

「へえ、じゃあプリカさんの魔法は？」

「……光。身体強化も回復魔法も光の属性だ」

レオは魔法について知っているのか、それとも興味がないのか、ベンチに寝そべりそっぽを向いていた。

「六つの属性から、更に二つに分けられる。低位魔法と高位魔法だ」「こーい……？ その二つはどう違うんですか？」

「……単純にレベルが違う。低位魔法は魔法陣と呼ばれる特殊な図形を描かなくても発生するし、早い」

トーマには良く分からないが、それは良い事ずくめではないだろうかと思ってしまう。

「ただし威力が低いんだ。魔法の効果も弱く、短い。高位魔法はその逆だな」

つまり、高位魔法は魔法陣が必要で魔法の発生は遅いが、威力がある。効果は強く、時間も長い。

トーマは頭の中で魔法についての情報を組み立てていた。

「どちらが良いかと聞かれたら難しいが。一長一短だな、その場に依じて使う魔法を選択していかないと駄目だ」

「プリカさんは二つしかないから、簡単ですね」

「……う、まあ、そうだな。そして、そこが私が魔法使いではない証明になる」

プリカは傷付いていた様子だったが、気を取り直して話を続けた。「魔法使いと呼ばれるには数種類の低位魔法を習得するのは勿論、高位魔法も習得しないと駄目なんだ。魔法を使える者は街にもたくさんいるが、魔法使いとなれば話は別だ」

「えーと、プリカさんは他の魔法や高位魔法を覚えなかったんですか？」

「……また嫌な事を聞く。魔法を習得するには、基本的に二つの方法がある」

プリカは指を二本立てる。

「一つは魔法使いに師事する。魔法使いを師匠と仰ぎ、魔法の勉強を教わるんだ」

「プリカさんはお師匠さんに教わったんですね」

「ああ」と頷き、プリカはそのまま俯いた。その師との間にはあまり良い思い出はなかったのか、彼女は渋い顔をしている。

「……もう一つは魔法について書かれた本、魔導書を読んで覚える方法だ。こっちはおすすめしない。完全に独学だからな、失敗も多い」

「僕には向いてなさそう……」

「まあ、結局どちらも難しい事には変わりはない。そもそも師事すべき魔法使いの数自体が少ないんだ。魔導書もかなり希少な本でな、どんなにつまらない魔導書でも、金貨百枚はくだらないだろう」

「僕、別に魔法が使えなくても良いです」

「あははっ、そうだね、うん。魔法が使えなくても美味しい料理は作れるもんな」

トーマは嬉しそうに頷く。

「……ううん、あと教えておくべきなのは……ああ、でも明日になればトーマたちの班長が嫌でも教えてくれるだろうし」

「話は済んだのか？　ならば俺たちは部屋に戻るぞ」

「……ああ、忘れてた。街へ買い物に行ったらどうだ？」

「必要ない」とレオは言うが、彼が今着ているシャツはトーマの私物なのだ。

「デカブツ。お前の荷物はあの鎧だけだったらしいな。生活に必要なものは買っておけ」

「そうしようよ。ついでに街を見て回れば楽しそうじゃないか」

「……なるほどな。まあ、良いだろう。では農民、今から行くぞ。金はしっかり持っているだろうな？」

部屋に戻ればお金はある。だが、何かが引つ掛かった。

「ねえ、もしかして君、お金持っていないでしょ」

「当然だ。バーンハイトの長子たる俺が金貨をぶら下げて歩ける訳

なかつた。農民、俺の買物物の代金は貴様が払え」

予想が当たったせいか、トーマは怒る気にもならなかった。

「……私もそうだとは思っていた。ほら、これを使え」

そう言つてプリカが差し出したのは金貨が二枚。

「む、二枚か。少ないが何かの足しにはなろう」

「二人で分ける。一人一枚ずつだからな。良く考えて使つんだぞ」

レオは文句を言いながら受け取ったが、トーマの手は出ないままである。

「……どうした？」

「き、金貨ですよ？ 銀貨十枚分ですよ？」

「何を言っているのだ貴様は。どこからどう見ても金貨ではないか」

「遠慮するな。ほら、受け取れ。手が痺れてきたからな」

プリカは大袈裟に手を振つてみせる。

「で、でも……」

「トーマは優しい子だな。頼むからもらつてくれ、それはギナ遺跡での借りだ。いや、餞別、お祝いかな。とにかく、受け取ってくれ。るまで私の腕はこのままだぞ」

トーマは迷いに迷つて、金貨を受け取る。

「……ありがとうございます」

プリカは彼の髪の毛を撫でた。

「……私の腕を助けてくれてありがとう。ほら、早く買い物に行つてこい」

「貴様に言われるまでもない。行くぞ農民！」

「あ、ちょ、ちょっと待つてよ！」

中庭に残つたプリカは懷を探っていた。と言うより懷具合を確認していたのである。トーマたちに渡した金貨二枚は彼女にとって、かなりの痛手であった。

「……………依頼、受けなきゃな」

正直に言ってしまったえば、プリカが金貨を渡したのは罪の意識からである。勿論、ギルドの新人の面倒を見ると言うのも年長者の仕事だが、何も金銭を渡す事はない。明らかにやり過ぎだ。幾らなんでも渡し過ぎた。見栄を張り過ぎた。

溜め息を繰り返すプリカに影が差す。彼女の傍に立ったのは背の高い男だ。彼はにやにやとした笑みを浮かべてプリカに話し掛ける。「よう、随分と気前が良くなったじゃねえか」

「……黙れ。お人好し」

「いつからお人好しが悪口になったんだよ。そもそもだ、俺はお人好しじゃねえっつーの」

「忙しくなったから戻ってきてくれ。これだけの理由で本当に戻ってくる奴がいるか」

「かもな」と男は笑い、プリカの隣に座った。彼女は立ち上がる。彼は何か言いたげだったが、結局何も言わなかった。

「しかし珍しいな、えこひいきのプリカ様があまで肩入れしてやるところは初めて見たぜ。どうせなら、てめえの班の奴らに小遣いやれよ」

「……えこひいきではない。借りを返したただけだ」

「ハイゴ布林、か。いやしかし信じられねえぜ、あの坊主がここに来るつても含めてな。料理人になるとか言ってたのによ」

「知り合いだったのか？」

プリカは意外そうに男の顔を見遣った。

「知り合いどころかパーティー組んで旅した仲だ。けど、複雑な気分だよ」

「……お前はもっと自分の事だけを考えてみたらどうなんだ、ガラン？」

「さあ、根っからのお人好しだからな、俺はよ」

ガランはくつくつと笑い、ベンチに寝そべる。四つの建物に囲まれた中庭。ここから見上げる空は切り取られたみたいに狭く、それでいて懐かしくもあった。

買い物済ませて、街を見て回ったトーマとレオは自室のベッドで同じように寝転がっていた。

「しかし、金貨一枚では全く足りなかった。まともな物が買えたとは言いがたいな」

「……君、王様が何かだったの？」

「似たようなものだ」と言っただけ、レオは袋から購入した服を取り出す。

「それより農民、貴様どういう買い物をしているのだ。俺にはさっぱり分からん」

「だって、勿体ないんだもん」

トーマはプリカからもらった金貨を使わなかった。と言うより使えなかったのである。おつかいならまだしも、自分の買い物は今までしてこなかった彼にとって、金貨と言うのはあまりにも大きかった。

「折角だから大事に取っておくんだ」

「ふん、俺には見飽きたものだが、農民には手の届かないと言うのも事実。穴が開くまで眺めているのも良からう。しかし金とは使うものであって見て愛でるものではない……」

トーマは頭から毛布を被り、聞こえてくる声を遮断する。

「俺の話を最後まで聞くのが臣下たる者の務めだろう！」

「君もしつこいなあ。僕は僕だよ。臣下なんかになるもんか」

そうしていると、不意に瞼が重たくなってきた。歩き回ったし、頭も使った一日である。お風呂に入り、晩ご飯も食べた。つまり、あとは寝るだけである。気付いた時には、トーマの意識は鈍くなり、安らかな眠りへと、緩やかに落ちていくのだった。

目が覚めると朝だった。ちゃんと朝に起きられた。トーマは身を

起こして部屋を見回す。どうやら、同室の二人は朝早くからどこかへ行っているらしい。同じ場所で暮らす人なのだから、早く挨拶をしたいと思ったのだが、いない事には仕方がない。

トーマは着替えて、ゆっくりと体を伸ばした。

「ぐ、うう、おつ、俺が最強なのだ……」

寝起きの悪いレオは放っておいて朝食を食べに行きたいのだが、置いていけばあとで何を言われるか分からない。トーマは仕方なくベッドの上で彼の目覚めを待った。

すると、部屋の外、廊下から声が聞こえてくる。苛立たしげに何事かを叫ぶ女性の声だ。それと、その女性を諷めるような男の声である。喧嘩でもしているのだろうか。トーマはベッドから下りてドアの近くを行ったり来たりする。止めた方が良さのだろうか、巻き込まれて痛い目を見るのは嫌だったのだ。

『てめえ誰に触ってると思ってるんだ！ さっさと離せよクズ！』

『あー、分かったから少し黙ってる』

声は少しずつ大きくなる。こちらに近付きつつあるのだ。

「……ん、んん？ 誰かいるのか？」

「あ、起きた。うん、廊下で誰かが喧嘩しているみたいだよ」

「俺の眠りを妨げるとは……死にたいらしいな。剣を持てい！」

「持たないよ」

起き上がったレオはベッドから飛び降りて、トーマの傍に着地する。

「男と女の声か。くだらん、ただの痴話喧嘩だろう。そんなものはスコップドッグも食わんと相場が決まってる」

「でも、女の人はすごく嫌がってるみたいだよ」

「ぎゃあぎゃあ」と喚く声に、レオは顔をしかめた。

「やかましい女とは関わり合いになりたくない。農民、首を突っ込むなよ」

言われずとも、である。

しかし、向こうから首を突っ込まれてはどうしようもなかった。

勢い良く開け放たれたドア。少年と少女の首根っ子を捕まえている男。彼と目が合ったトーマは声を出せなかった。

「よう、久しぶりだな坊主」

そう言っただけ笑うのはトーマが良く知る人物、ガランだ。トーマは、どうして彼がここにいるのだろうと思うのだが、状況を理解出来ずに口を開くのみである。

「……貴様、どういふつもりだ？ 返答いかんによっては命はないと思え」

レオがガランに詰め寄るが、彼はへらへらとした薄ら笑いを浮かべたままだ。

「なんだよ、お前ら俺の事知らないのか？」

「が、ガランさん、ですよな？」

「ガラン？ 農民、貴様この男を知っているのか？」

「うん。ほら、僕と一緒に旅をしてたって人だよ」

馬車に揺られ、吐き気を堪え、それでも楽しかった七日間を思い出してトーマの意識はどこか遠くへ行ってしまう。

「農民の連れか。しかし、そいつらは何者なのだ？」

「えつらそうに指差してんじやねえぞノツポが。その指噛みちぎって気持ち良くさせてやろうか？」

ガランに動きを拘束されている赤毛の少女がレオに突っ掛かった。

「は、面白い。そのまま吠えている女。仮に動けたとして、俺に触れる事は叶わんだろうがな」

「舐めてんじやねえぞクズが！ おらオツサンいつまでオレに触ってんだ、とつとと離しやがれ！」

「今離れたら喧嘩になるだろうがよ。おい坊主、こいつらの顔に見覚えはねえのか？」

問われるが、トーマは首を傾げてううんと唸る。

「あ、テストの時に見たかもしれない」

「……この二人はお前らと同じ部屋で、同じ班の仲間だぞ。なんだよ、やっぱり挨拶してないじゃねえか。ジッポウさんに笑われちま

うぞ？」

トーマは目を丸くして、ガランに捕まっている二人を見遣る。

「こいつらが俺の部屋に！？ ふざけるなよ！」

「てめえの部屋な訳ねえだろ！ 馬鹿じゃねえのかノッポ！」

わがままなレオと、彼に負けず劣らず言い争いを繰り返す気性の荒い少女。そして先程から一言も発していないマントを羽織った少年。班長がガランだったのは嬉しいが、これからの生活に不安しか抱けない。トーマは窓へと視線を逃がして、諦めたように息を吐いた。

ゴブリン討伐

「親睦を深めるには食卓を囲むのが一番だ。そう思うよな、お前らも？」

南寮の食堂の隅、班員であるトーマたちを見回してガランは笑った。

トーマは愛想良く、そうですねと返すのだが、残りの三人は何も言わなかった。

「んじゃ、一人ずつ自己紹介していてもらおうか」

不平、不満を孕んだ視線がガランを突き刺す。が、彼はそんな視線を全て受け流してへらへらと笑っていた。

「まずは俺からな。……あー、んん、俺はお前らの班長、ガランだ。このギルドからは何年か離れてたけど、訳あって戻ってきた。ま、班長なんてやってるがよ、言っちゃえばお前らと同じ新人だ」

ガランは一度言葉を区切ってから、もう一度四人を見回す。

「……若いつてのは気難しいな。ま、よろしく頼む。んじゃ、次は坊主、お前から右回りな」

「ぼっ、僕から、ですか？」

トーマは自分を指差して、あたふたと視線をさ迷わせた。

「え、えと、と、トーマ、です。大陸の北部にある、シアンの村つてところから来ました。街にはまだ来たばかりで慣れていないけど、よろしく願います」

頭を下げて机にぶつける。一連の動作をつまらなさそうに見遣り、レオは口を開いた。

「農民らしい挨拶だな。良いか、貴様はこのレオ・バーンハイトの臣下なのだぞ。もっと堂々としている。良いか民草、この俺がレオ・バーンハイトだ！」

「……二回言いやがった」

ぼそりと、トーマの対面に座る少女が呟く。

「しかし馴れ合うつもりはない。貴様ら庶民は精々俺の邪魔にならんよう、隅でこそそと生きているのがお似合いだ。努々忘れるなよ、庶民ども」

「レオ、ね。ふうん、ま、口だけでつかくなるなよ」

「何を言う。俺がハイゴ布林を倒した実力者だというのは知らないのか貴様」

ガランは鼻で笑い、それから皮肉っぽく口の端をつり上げた。

「アレを倒したのはお前一人の力じゃねえだろ。んじゃ、次」

全員の目が黒いマントを羽織った男に向く。レオより身長は低いが、威圧感があった。長い黒髪をゴムで縛り、常に目を閉じている彼は先ほどから一言たりとも喋っていない。が、全員に注目されて観念したのか、

「……ウェッジ」

一言だけ、喋った。

恐らくは自分の名前なのだろう。それだけを告げて、ウェッジはだんまりを決め込んだ。

「服装からして根暗だな、てめえ」

少女がウェッジに突っ掛かるが、彼は微動だにしない。と言うか眠っているのかもしれない。

「最後はお前だよ、お嬢ちゃん」

「くっそつまんねえ。ガキのママゴトじゃねえっつーの」

「抵抗しないでさっさと見えよ。そっちのがガキっぽいぜ？」

へらへらと笑うガランが気に入らないのだろう。が、これ以上長引かせるよりは早く済ませた方が良くと判断したらしい。少女は唇を噛み締め、艶かしく息を吐いた。

「ジユリ。そっちの偉そうな奴に乗っかる訳じゃねえが、オレもてめえらにや興味ねえ。馴れ馴れしく名前を呼んでみる。その時は容赦なく切り刻んでやるからな」

吐き捨てるように言い放つと、ジユリと名乗った少女は席を立つ。

「おいおい、話はまだ済んじやいねえぞ？」

「済んだらうがよ。うぜえんだよ、ジジイ」

「……お前ら、飯はしっかり食ったな？」

「はあ？ てめえ何を……」

ガランはそれぞれの空になった食器を指差して、にやりと笑った。
「働かない者はご飯を食べちゃ駄目だと言っ素晴らしい言葉がある。ギルドに入っただけからには、ギルドの為に働かないとな。そうは思わねえか？」

「全く思わん。俺の為に誰かが働くのは当然で、俺の前に食事が出るのは当然なのだ。行くぞ農民、プリカとやらが言っていたが、基本的に班の者とは付き合わなくても良いのだから」

レオも席を立つが、トーマは席を動けない。ガランに気を遣った訳ではなく、彼も働かない者に食事は与えられないと、村で言い聞かせられていたのである。自分に出来る事があるなら、話だけでも聞くのが筋だと思ったのだ。

「基本的には、だ。必要な時は班の奴らで行動しなきゃならねえ。

それが今だ。お前ら喜べ、早速依頼を受けられるぞ」

「依頼、ですか？ ……依頼って、なんですか？」

「坊主、馬車乗ってる時に俺が言わなかったか？ うちのギルドはかなり適当にやってるが、やる事はやってんだよ。それが依頼だ。どこのギルドでも依頼ってのは必ず受けるもんだ。要はお金をもらって困った人たちを助けてあげようって話だな。突風同盟は規模が大きいから街でも名が知られてる。依頼の数もそこそこ多いんだ」
「へえ、金がもらえんのかよ？」

ジユリは席に座り直し、ガランを流し目で見る。

「いや、もらえない。依頼主はこの俺だからな」

ガランは自身を指差して、残念だったなと言わんばかりにジユリを見返した。

「……やってらんねえ」

「同感だな。バーンハイトの長子である俺にただ働きをさせようとは、貴様、叩き切られても文句は言えんぞ」

「ただ働きじゃねえぞ。お前ら、飯は食ったんだろ？ その食材はどうしてると思ってたんだ。ギルドの奴らが真面目に依頼をこなして金をもらって、その金で用意してるんだぞ。新人のくせにうだうだ言ってるじゃねえっつーの」

トーマは申し訳なさそうに厨房を見遣る。たまたまそこにいた者と目が合い、何度も頭を下げた。そして、ガランに顔を向ける。彼をまっすぐに見つめて口を開いた。

「分かりました。僕、その依頼つてのを受けます」

「いや、坊主だけじゃ駄目だ。今回はガラン班に依頼してるんだからな、お前ら四人で受けてもらう」

「金はおねえうぜえめんどくせえ。やるんならその田舎モンだけで良いじゃねえかよ、オレはやだね」

ジューリは腕を組んでトーマを見据える。彼はその視線が怖くなつて俯いた。

「四人でやらなきゃ意味がねえんだよ」

「何故だ？ 貴様の依頼とやらを達成出来るのなら誰が、何人で行っても構わないだろう」

「これが普通の依頼ならな。お前らがただのプレイヤーだったならそれでも構わなかっただろうが、舐めた事いつまでもぐだぐだ抜かしてんじゃねえぞ、ガキども」

ガランに射竦められたレオとジューリが黙り込む。鋭い眼光と重い圧をぶつけられて、トーマは口を開く気をなくした。

「お前らはそんじょそこの三流ギルドのプレイヤーじゃねえんだ。昨日今日入ったばかりの新人だつってもよ、突風同盟のプレイヤーなんだよ。これ以上俺の指示に従わねえって言っんなら、ここを辞めてもらっても良いんだぜ」

「……へえ？ 言う事聞かないと分かった瞬間脅しかよ。はっ、すげえぜ突風同盟。良いよう、別に？ オレをクビにしたいならしろ

よ、クズが」

「いいや、駄目だ。ジュリ、お前一人だけを辞めさせる訳にはいかないな。連帯責任って事で、四人共に辞めてもらうぞ」

「そつ、そんなあ!？」

最初は望んでいなかったとは言え、折角入れたギルドである。トーマは上擦った声を出して、縋るようにガランを見つめた。

「何？ それは困る。俺はこのギルドの頂点に立たねばならん。足踏みするどころか足を切られてたまるものか。ガランとやら、腹立たしいが仕方あるまい。俺は依頼を受けるぞ」

「は、勝手にやってろよ」

「……………その依頼、受けよう」

ウェッジが参加を表明した事によって、この場を去りかけたジュリが足を止める。彼女は今、自分が不利だと言う事に気付いたのだ。「ほう、これで依頼を受ける者は三人になったな。女、貴様はどうするのだ。ここで何も成さないままに俺たちを巻き込んで、ギルドを辞めるのか？」

辞めてしまっても構わないが、ジュリだって望んでギルドを辞めたいとは思っていない。何より、こちらを見透かしたようなガランの目が気に入らなかった。

「面白いじゃねえか、班長サマの依頼とやら、受けてやるぜ」

「成立だな。それじゃあ、仕事場に移動するとすつか」

ガランは席を立ち、何も言わずに歩き出した。

トーマたちが連れてこられたのはギナ遺跡の入り口だった。ギルドに入る為のテストを受けた場所だったので、彼らの記憶にも新しい。

「やる事は簡単だ。ギナ遺跡のゴブリンを退治する。以上。分かれ」
四人は顔を見合わせた。装備を整えてくるよう言われていたので、どんな難題を提示されるか不安だったのである。が、これでは肩透

かしを食うのも仕方ない。

「んなちよろいので良いのかよ？ オレらはそのゴブリンをぶっ倒してギルドに入っただけ。今更じゃねえかよ」

「やってみりゃ分かるさ」と、ガランは意味ありげに笑う。

「ふん、良いだろう。俺の力を今一度見せてくれるわ。庶民ども、このレオ・バーンハイトに続け！」

「ま、待つてよう！」

「うざってえのと同じ班になっちまったな……」

ガラン班はレオを先頭にダンジョンへと足を踏み入れた。彼の後ろにはトーマが続き、その近くにジュリが、最後尾にはウェッジという陣形である。

トーマが見る限り、ギナ遺跡は前回と何も変わっていないように思えた。ハイゴブリンを倒したとはいえ、彼は自分が実力者などとは思っていない。しかし、レオやジュリ、ウェッジはゴブリンには遅れを取らないだろうし、物足りなさそうだ。ガランの意図が掴めず、トーマはただただ歩く。

モンスターと遭遇しないまま通路を歩いていると、レオが突然立ち止まった。

「……つまらん。ゴブリンどこるかネズミすら見掛けんではないか。よもや、奴に担がれているのではないか？」

「担ぐ意味なんかないと思うけど」

トーマが答えるが、ジュリは彼の意見を気に入らなかったらしい。「田舎モン、てめえはあの班長と知り合いらしいけどよ、オレにとっちゃ奴はゴブリンと変わんねえんだぜ。つまり何考えてつか読めねえ。案外、マジに意味なんかねえかもな」

「そんな事しないと思うけどなあ」

「まあ良い、ここは農民の意見を尊重する。が、広間まで行って何もなければ、俺は戻るぞ。戻って奴を斬る」

物騒な事を言い放ち、レオは前進を再開する。
「けっ、どいつもこいつもくっだらねえ」

遺跡の入り口近くに座り込んでいたガランのところに、一人の男が近付いてきていた。コビヤクである。彼はガランの存在に気が付くと、僅かに笑んだ。それは小さな変化で、良く注意して見なければ気付かない程度の表情である。

「ようコビヤク。こんなところに何か用でもあんのか？」

「今からトバの森へ行くと所だ。が、新人がどうしているか気になつてな。……あの四人、使えそうなのか？」

「使えるなんて言い方は気に入らないけどよ、ま、似たようなもんだ」

コビヤクはガランの隣に腰を下ろし、遺跡の入り口を見つめる。

「付いていかなくて良かったのか？」

「俺がかあ？ まあ、一度目は様子見だよ。どうせ討伐なんて無理だろうからな」

「ああ、本来なら最低でも四班は費やさねばならないレベルだ。一つの班で、ましてや新人ばかりでは難しに決まっている」

通例、ハイゴ布林が死んだ後、残ったゴ布林たちの生態系には変化が現れる。一つは性欲の増加だ。ハイゴ布林を生む為に、群れ全体が交尾を行なう。もう一つはゴ布林の凶暴化だ。新たな長が生まれるまでの間、群れや仲間を守る為にオスのゴ布林の気性は荒くなる。戦闘能力が変わったりはしないのだが、やはり気迫が違うのだ。一度や二度のダメージでは怯まなくなる。敵だと見定めたモノに対しては、敵の、あるいは自らの息の根が止まるまで攻撃を仕掛け続ける。

ギナ遺跡で新たなギルドメンバーを獲得する為の試験を行なっているのは突風同盟だけではない。が、暗黙の了解として、ハイゴ布林を始末した後の、更なる後始末は彼らが行なっている。

「私やコーダ、それからガサキの班は仕事がなくなつたと喜んでい
たがな。本当に任せてしまつても良いのか？」

「ああ、良いぜ。ただし一日で終わるとは限らないからな」

「では何日を予定にしている？」

「三日ぐらい。ただ、今日の駄目具合によるな。本気であいつらが
馬鹿だったら俺が一人で終わらせるさ」

ガランは差していた鞘から、二振りの短い剣を抜いた。それを両
手に構えて、適当な動きで素振りをして見せる。

「……鈍つたな、ガラン」

「うるせえ」と毒づき、ガランはつまらなさそうに武器をしまった。

「何をやっているか貴様らっ！」

レオの怒声が大広間に響き渡つた。彼の声搔き消さんと、ゴブ
リンたちが奇声を上げる。

「もっ、戻ろうよ！ もう駄目だつてば！」

「敵を前にして背を向けられるか！ バーンハイトたるもの、命を
灰のひとつかけらまで燃やし尽くさぬ限りはっ！」

そう言っているが、レオの腰は引けている。彼はゴブリンの集団
を広間の中央で迎え撃っていたのだが、限界に近い。

最初こそ悪くはなかった。

トーマたちは広間で固まっているゴブリンを確認して、ばらばら
に飛び出したのである。作戦は一つもなし。強いて言うなら彼らの
狙いは各個にゴブリンを撃破していく事だったのだらう。

ジュリが一番に飛び込み、戦闘に入った。彼女の足は速く、レオ
ですら思わず感嘆の息を漏らしたぐらいである。加えて得物である
ナイフの使い方も悪くなかった。武器を手放してしまった後も、独
特の蹴術で敵を仕留めていったのである。

しかし、ここまで。動きの素早いジュリに混乱していたゴブリン
たちだったが、彼女を囲んで袋叩きの目に遭わせた。彼女は哀れ敵

陣のど真ん中で気絶したのである。

ウェッジは離れたところから弓矢でゴブリンを仕留めていたのだが、その狙いは的確ではなかった。モンスターの急所には百発百中なのだが、彼が狙うのは広間の隅や端、戦闘に参加していないゴブリンだけだったのである。前線にいるレオたちの援護をする気配がなかった。拳句、矢を使い切ってしまい、こそこそと逃げ回っている始末である。

レオは最初から最後まで広間の中央でゴブリンと戦っていた。何も考えず、周囲には目を向けなくてひたすら剣を振り続ける。

トーマはと言えば、モンスターを見て気が萎えてしまっていた。一番最後に広間へ突入して、中途半端に動くだけである。

ここまで全て、戦闘が始まって、五分ほどの出来事だった。

もはやこれ以上の戦闘の続行は不可能である。荒事に関して日の浅く、素人同然のトーマですらそう思ったのだ。

「無理だよ、この人気を失ってるんだよ!？」

ジュリを庇いながら、トーマはスコップでゴブリンを追い払う。

出入り口に向かって少しずつ後退しているが、レオが一向に中央から動かないのだ。

「名誉の……いや、不名誉の戦死だ! そいつは捨て置き農民、最後の最後まで戦い抜いてこそ!」

「そんなの出来る訳ないよ!」

トーマはウェッジに襲い掛かろうとしたゴブリンを弾き飛ばす。

「……ええと、こ、この人をお願い。先に逃げてても良いから」

ウェッジは頷いてジュリを背負おうとするが、膝立ちのままで起き上がれなかった。トーマの頭が真っ白になる。

「引きずっても良いからっ」

「農民っ! 何を逃げようとしているのだ!」

「逃げないと駄目だってば!」

レオはゴブリンに囲まれてまともに動けない。トーマはスコップを持ち直して広間の中央に向かった。

「来たか農民、よし、見せようではないかバーンハイトの……！」

「いつまでやってんのさ！」

トーマはゴブリンを薙ぎ払ってスペースを作る。唯一、装備をしていなくて剥き出しになっているレオの髪の毛を引っ掴み、後方へと下がっていった。

「貴様あ！ 農民の分際でバーンハイトの長子たる俺の髪を！？」

ゴブリンが追い縋るが、それはレオが剣を振り回す事で対処する。

「君だつて分かつてたろ、これ以上続けても皆殺されちゃうんだ」

「……しかし、俺は……」

ずるずると引きずられながら、レオは言いよどんだ。

「逃げるんじゃない。一度戻るだけだよ」

トーマは、それで良いだと呟き、レオは何も言わなかった。

出入り口付近まで行ったところでようやくレオの髪の毛から手を離し、トーマは息を切らしながらもジユリを背負う。まだゴブリンは彼らを追い掛けようとしていたが、その数はかなり減っていた。

「行こう」

逃げようとは言わなかった。トーマは後ろを振り返らずに駆け出す。ウェッジが続き、レオは最後まで何か言いたげだったが、やがて、広間に背を向けた。

地上に戻ってきたトーマたちを見て、ガランは咎めるような事を言わなかった。

「あーあ、やっぱり。しかし、ひっでえやられ様じゃねえか」

へらへらと笑い、トーマに代わってジユリを背負う。

全員が生きているのもやっと、と言ったような表情を浮かべており、何も話さない。口を開かない。

「依頼は失敗だな。ま、期限は特に決めてねえから気にすんなよ。明日もよろしくな」

ガランはトーマたちに背を向けるが、彼の背にレオが声を掛ける。

「何故、言わなかったのだ」

「あ、何をだよ？」

「ゴブリンの事に決まっているだろう！ 奴ら、前とは違っていた……！ あんな事になると知っていたのなら、何故教えなかった！？」

レオは、ゴ布林相手に撤退した事への憤りをガランにぶつけていた。

「あー……」

ガランは冷たい目でレオを見遣る。くだらないとでも言われるのかと思つて、トーマは身震いした。

「聞かれなかったからな」

それだけ言つと、ガランはもう何も答えない。

残されたトーマたちは、暫くの間その場を動けないでいた。

ゴブリン討伐・2

トーマが街に来てから四日目。ハイゴブリンを倒して突風同盟に入ってから四日目。今日は、ゴブリンの群れから逃げ出した翌日。

昨日よりも遅くに目が覚めると、部屋を出て行こうとするウェッジと目が合った。彼は黒いマントを羽織っており、得物である弓矢をも持ち出そうとしている。

「えと、おはよう。どこかへ行くの？」

頷くと、ウェッジは部屋を出て行ってしまった。しかし、トーマは彼と挨拶が出来た事に感動している。無口で、ついでに非力ではあるが、決して悪い人ではないのだと、一つ前進したと少しだけ嬉しくなっていた。

「……ぐ、おお、うるさいぞ、農民」

「今日も悪いね、寝起き」

「おつ、俺に悪いところなど、ない！」

レオは未だ覚醒していない意識を無理矢理に引っ張り起こして、ベッドの上に立ち上がる。彼の足取りはふらふらとしていて、今にもそこから落ちてしまいそうだった。

「朝からうるさいなあ」

「腹が減った。農民、食堂に行くぞ」

「僕は、良いよ。お腹減ってないし」

「俺は減っている！」

「……もしかして、一人で行くのが怖いのか？」

「は、馬鹿な。俺が折角食事に誘ってやったと言っのに。もう良い、貴様は俺の鎧を磨いておけ！ 壊したら弁償だからな！」

何気なく言ったトーマの言葉に、レオは気分を害したようである。

トーマは頭を掻いて、袋から雑巾を取り出した。

昨日は散々だった。

突風同盟と言えば街でも一番大きなギルドだ。そこに入れば儲け話なんか幾らでも転がっているだろうし、金になりそうであったり、使えそうな人間なんてのも嫌と言うほど転がっていると思ったのである。だからこそ、ここに入った。

が、テストをクリアしていざギルドに入ってみれば、班などくだらないものには入れられてしまう。その班長はあちこちを無理矢理引っ張り回していい好き嫌い。ウマが合いそうにない、同じ班の人間とは部屋も同じときている。おまけに、そいつらは使えそうになかった。根暗な男は話をするどころか、口を開く事すらない。無駄に体格の良い男は偉そうだが、頭が悪い。そんな奴らに囲まれて嫌々ギナ遺跡に行けば、ゴブリンに囲まれて失神するまで攻撃を喰らってしまう始末である。突風同盟に入ってから、良い事など一つもない。

「……ちっ」

寝返りを打ったジュリは髪の毛を掻きながら起き上がる。瞬間、めんどくさい事になりそうだと思った。

「う、え、あ、お、おはよう………ごさいます」

頭を下げるのは向かいのベッドで鎧を磨くトーマである。

ジュリは班員の中でも彼が一番嫌いだった。金の匂いなど一切しない。使えそうなどころなんて一つも見当たらない。街で生まれて、街で暮らしてきた彼女にとって、田舎出身のトーマは見下すべき対象なのである。生まれてきて、生きてきて幸せです。なんて顔を常に浮かべている彼を見ているだけでも腹が立ってしまうのだ。

挨拶を返す事もなく、ジュリはぼんやりとした意識に身を任せて、再びベッドへ横になる。睡魔はどこかへ去ってしまったらしいが、こうしているのは気持ち良い。が、金属を布で擦る音が気になって仕方がなかった。平たく言えば耳障りで、とっとと止めろと思う。

「それ、お前のじゃねえだろ」

「え？ あ、うん。そう、だけど」

話し掛けられた事が意外だったのか、トーマは戸惑っていた。

「お前、あのデカブツの召し使いなワケ？」

「……違ふよ」

ムツとして答えるトーマに、ジュリの気分はささくれ立った。

「へえ？ あー、そう。そういう口利くんだお前？」

「そんなの、どういう口を利いたって良いじゃないか」

「アハハハ！ 良くねえに決まってんじゃない。敬語使えや、敬語」

「……やだ」

ジュリは段々と腹が立つてくる。使えないし、金にもならない。なのにトーマは齒向かってくる。

「僕は絶対、君に敬語を使わない」

ふいとそっぽを向くと、トーマは鎧を磨くのに集中し始めた。ジュリはと言うと、無視された事と、生意気な事を言われたので頭に血が上っている。目の前の男をどうやって痛め付けてやろうかと、危険な思考を始めていた。

「あーあー言うてくれるじゃねえかよ。良いの？ オレを怒らせたらどうなるか分かってんだろうなあ、おい」

「ゴブリンにボコボコにされてたくせに」

「……てめ、今、なんつった？」

トーマはベッドにゴルゲットを置いて、ジュリを強く見据え付ける。

「されてたじゃないか」

ジュリはベッドから飛び起きた。トーマが瞬きを終える前に彼のベッドに飛び乗って、

「そんで？ 次は何を言うつもりだよ？」

トーマの喉を強く締め上げる。

「いつ、た……！」

ジュリは力を込めてトーマを無理矢理押し倒し、彼の上で馬乗り

になった。

「ヒヒ、いい声で鳴いてくれるじゃん。オラ、もっぺん言ってみる。誰がボコボコだつて？　されてんのはお前だろうが」

「……は、なして、よ……」

「泣いて謝ったら考えてやんよ」

舌なめずりして、ジュリは口の端をつり上げる。

トーマは諦めたかのように目を瞑っていたが、体に入力してジュリを押し退けた。

「つの、クソ野郎が」

ジュリは床に着地して、忌々しげにトーマを睨む。彼は苦しそうに咳き込んだ後、喉に手を当てた。

「あんだよその目？　やんのかオラ、あ？　悔しかったら一発でも入れてみるよ」

トーマは何も言わず、部屋を出る。残されたジュリはつまらなさそうに舌打ちして、強く壁を蹴った。

友達が欲しいと、仲間が欲しいと思っていた自分は甘かったらしい。上手くいかない事ばかりが続き、トーマの気分は酷く落ち込んでいる。

部屋を出たトーマは食堂に行ったが、レオの姿は見当たらなかった。そう言えばと彼は思い出す。いつの間にか、あのわがままな少年と一緒にいるのが当たり前のような気がしていたのだ。

「……はあ」

喉はまだ、痛い。

ジュリはかなり怒っていたが、果たして自分が全面的に悪かったのだろうか、そう問われれば答えには窮してしまう。誰が正しくて誰が悪いのか、トーマにはまるで見当がつかなかった。

トーマは騒がしい街の中へ出る気にもならず、中庭へと向かっていた。彼は誰もいないベンチを見つけて、そこに腰掛ける。

目を瞑れば、村での生活を思い出してしまった。何も気にしなくて良かった。毎日がゆつくりと、穏やかに過ぎていく。そんな日々がずっと続くのだと思っていた。が、いつまでもあの生活を懐かしんでいては前に進めない。今、自分はここに、街に暮らしているのだ。そう思い直して、目の端の涙を袖で拭う。

「……泣いていたのか？」

「え？」

顔を上げると、鋭い目でこちらを射抜いているプリカがいた。彼女はギナ遺跡で見た時と同じ格好をしている。そのせいか、昨日よりも雰囲気刺々しいものに感じられた。

「……泣いていたのかと聞いている。どうした、あのでかいのと喧嘩でもしたのか？」

「そんなんじゃないです。えと、プリカさんこそ、どうしたんですか？」

「……ふ、話を逸らす気か？」

プリカはトーマの隣に座り、ダガーを抜く。それをくるくると回して、再び鞘に収めた。

「依頼を終えてきたんでな、その帰りだ」

「依頼……。一人で、ですか？」

「私はいつも一人だ。……あ、勘違いするなよ。一人で充分だから、と言う意味だからな」

「え？ あ、はい」

「それよりも」と、プリカは呟いてトーマを指差す。

「……次はそっちが答える番だ。気にするな、私は今、時間を持て余している」

それは言外に、トーマが話をするまでは解放しないという意味が含まれていた。彼はどうするか迷ったが、プリカになら話しても良いだろうと思い、口を開く。

「……なるほどな」

トーマの話を聞き終わったプリカは呟き、何を言ったものかと困ってしまう。

「どうしたら、良いんでしょうか」

おまけに意見を求められてしまった。

レオが気分を悪くしたのも、トーマがジュリと喧嘩したのも、原因は一つである。ガランの依頼したゴブリンの討伐をクリア出来なかったせいだ。彼の話を聞く限り、ガラン班の四名は凶暴化したモンスターに手酷くやられてしまっている。本来ならトーマたち、テストをクリアしたばかりの新人には荷が重い仕事なのだから、仕方がないとも言えた。

「どうして、こうなったんだと思う？」

「分かりません……考えたけど、僕には、その、全然……」

「……駄目だ。もっと考えろ」

突き放すような言い方をしてしまったが、自分が答えを与えても良い問題ではないのだとプリカは分かっている。それでも、ヒントぐらいは出してやろうと思った。

「ガランから何か言われただろう？」

「明日もよろしくって」

「……違う。違う違う。そう言う事じゃない」

ガランは、甘い。自分とは違って班員を見捨てるような真似はしない筈である。新人には無謀とも思えるゴブリン討伐を依頼したのも、何か考えがあつての事だろう。

「何か、次に繋がるような事を言っていなかったか？」

「次、に……」

トーマは目を瞑って、祈るように両手を組んだ。

「あの、関係ない事かもしれませんが」

「構わない。言ってみろ」

「その、ダンジョンから地上に戻ってきた時、レオが、ガランさんに言ったんです。ゴブリンが凶暴になつてゐる事とか、失敗するって

分かってるなら何か教えてくれても良かったらうつて」

傲慢だが、レオの気持ちは分からないでもない。プリカは続きを促し、トーマは口を開く。

「ガランさん、聞かれなかったからって。それだけ言って、帰っちゃったんです」

「……それだ、トーマ」

「え、つと？」

やはり、甘い。ガランはヒントになるようなものを提示していたのだ。

「……だから、話だよ。話を聞くんだ」

「話、ですか」

トーマは上手く理解していない様子だったが、これ以上口を出してはガランに何を言われるか分からない。これはあくまで、ガランがトーマたちに与えた本当のテストなのだから。

「……私に言えるのはここまでだ。後は自分で考えろ」

縋るような目を向けられたらどうしよう。などと思っていたプリカだったが、トーマは真剣な表情で頷く。

——少し残念か。

プリカは頷いて返し、その場を立ち去った。

太陽が真上に上り、トーマたちが昼食を食べた後、

「んじゃま、頑張つて来い」

ガラン班は再びギナ遺跡の入り口前に集まっていた。昨日と同じく、ガランの依頼を達成する為に、である。

しかし、昨日よりも班の雰囲気は悪かった。誰も、誰と目を合わせようともしない。声を掛けようともしない。ただ黙り込み、入り口を睨み付けるだけだ。

レオを先頭に、ジユリとウェッジが遺跡に潜っていく。トーマは最後まで残っていたが、覚悟を決めて階段を下りた。

遺跡一階の大広間。

侵入者に気付いたゴブリンが駆け出した事で、戦闘が始まった。向かってくるゴブリンをナイフで切り裂きながらジュリは走る。彼女は類稀なスピードを活かして、誰よりも早く敵陣に突入した。その後ろをレオが続く。

広間中央ではレオとジュリがゴブリンの集団と戦闘になだれ込み、ウェッジが広間の端にいるゴブリンを撃つ。トーマは何もしない訳にはいかないだろうと思い、彼らを援護する形で走り回り、ゴブリンを撃破していった。

ゴブリンの数は減っていき、終始ガラン班に有利な状況が続く。が、昨日と同じくジュリがゴブリンに囲まれてしまった。彼女は自分の力だけでここを脱しようと思ったのだろう、何も言わず、助けを求める事もせず、四方から飛び掛かるモンスターを睨み付ける。ジュリが囲まれていた事にトーマが気付いたが、既に手遅れだった。彼女は腹部に一撃をもらい、まともや失神する。

「助けなきゃっ！」

トーマが叫ぶが、レオは反応しない。仕方なく、ジュリから離れているところにいたトーマが走る。彼女の救援に向かうが、ゴブリンが立ち塞がって近付けない。

一方で、ウェッジは動き回るゴブリンに狙いをずらされる。矢を放った瞬間、彼の顔から血の気が引いた。広間の中央にいたレオの背中に当たってしまったのだ。幸い、鎧を貫く事はなかったが、レオは振り返り、ウェッジを強く睨み付ける。

「貴様あ！ 俺を殺す気か！？」

ウェッジは首を横に振るが、レオは尚も収まらない。剣を振り上げてゴブリンから背を向ける。

「そこに跪け！ その首、叩き落してくれろ！」

レオがウェッジを目掛けて走り出した。背中にはゴブリンがくっ

付いたままだが、彼の目には入らない。レオの目には広間を逃げ回るウェッジしか見えていないのである。

「何やってんのさ！」

トーマはスコップでゴブリンを吹き飛ばしながら叫んだ。このままではジュリだけでなく、自分たちも危険だと言っのに、あの二人は何をやっているのだろうか、と。

結局、この日もゴブリンの討伐には失敗した。それどころか、ジュリとウェッジが気絶する有様である。

「ええい、重い！」

レオが背負っていたウェッジを地面に投げ捨てた。

ちなみに、ウェッジが気絶したのはレオの攻撃を受けたからではなく、走って逃げている最中に、柱に頭をぶつけたからである。

「昨日より駄目ってのはどういう事なのかねえ」

ガランは頭を掻いて呟いた。トーマは申し訳なさそうに俯く。

「坊主、ウェッジは俺が運ぶ。ジュリは任せたぞ」

「えっと、僕、ですか？」

「レオに任せたら途中でどこかに捨てちまいそうだからな。ほら、今日は帰るぞ。……おい、レオ、とっとと剣をしまえ！　しま……しまえってば！」

トーマは気を失ったジュリを見遣った。今朝の事が頭を過ぎるが、倒れた者を捨て置く訳にはいかない。

「……っ！　何故だ！　何故、上手くいかないのだ！？」

「行くぞ」

レオは地面に剣を突き刺す。彼に掛けてやる言葉など、トーマは持ち合わせていなかった。ガランなら何か言えるのだろうが、彼が口を開く事はなかった。

その日の夜、トーマは食堂に一人でいた。彼は夕飯を食べ終わった後、何もする気が起きずにこうして座り続けていたのである。

そして、思うのだ。自分はここで何をしているのだろうか。村を出たのは、こんな風に過ごす為ではない。ましてや、ダンジョンに潜ってモンスターを倒す為なんかでは、絶対にない。

厨房で談笑するコックたちを眺め、トーマは強く嫉妬した。現状に憤った。本当は自分だってあそこに立っていたい。なのに、何をやっているのだろうか。

これ以上ここには駄目だと思い、トーマは席を立つ。食堂を出たところで、失敗したと顔をしかめた。

「……何見てやがんだよ？」

今まさに食堂に入ろうとしていたジユリと出くわしてしまったのである。

「見て、ない」

何を言えば良いのか分からない。何を言ったところで沸点の低い彼女は怒るだろう。そう思い、トーマは短く答えて歩き出した。

「見てたじゃねえか」

しかし、ジユリはトーマの前に回り込む。

「見てないってば」

「お前さ、何調子に乗ってんの？ オレには大人しく頭下げとけば良いんだよ」

「……どう、して……」

言い掛けて、トーマは口を噤んだ。

「ああん？ 言いたい事があんなら言いなよ、溜めてばっかじゃ気持ち良くなれねえぜ？」

下卑た笑みを張り付かせて、ジユリはトーマを流し目で見る。彼はこの場にいる事に耐えられなかった。

部屋に戻ったトーマは毛布に包まり、拳を強く固めた。

話を聞かないレオ。口を開けば文句と悪口しか言わないジユリ。そもそも口さえ開かないウェッジ。我を通す彼らに遠慮する事なんてない。自分は、料理を作りたい。お金を稼いで村の皆の手助けをしたいんだ。このままでは、いつまで経っても前に進めないじゃないか。そう思い、トーマは強く目を瞑る。その晩、彼は中々眠りに就けなかった。

ゴブリン討伐・3

「ギイイイイッ！」

終わりが見えない。ゴブリンの数は昨日とまるで変わっていないように思えた。倒しても倒しても、どこからでも湧いてくる。

ギナ遺跡の広間を縦横無尽に駆け回るゴブリンに、ガラン班は苦戦を強いられていた。前回、前々回の失敗を恐れたのか、ジュリは無理に突っ込もうとはしない。レオですらモンスターの密集しているところは避けているらしかった。ウエツジはと言えば、矢を無駄に消費するのを嫌って中々動かないでいた。

しかし、それが良くなかったのである。

戦闘が始まった直後からモンスターの勢いに押されてしまっていた。致命的なミスこそないが、じりじりと体力を削られていく。手が出せない。打つ手がない。

結局、焦れたレオとジュリがモンスターの群れに突っ込んだ。ウエツジは彼らの動きに触発されて矢を放つ。

そうして時間が経っていく内、ジュリがゴブリンに囲まれていた。「うっぜえんだよ！」

ジュリはナイフを取り落としてしまい、ゴブリンを蹴りだけで対処していく。レオは中央のモンスターに切り掛かり、無茶苦茶に剣を振り回していた。……何も変わらない。昨日、一昨日と同じ結果がすぐ傍に迫っている。

泥臭い乱戦の模様を呈する大広間に、

「いい加減にしなよっ！」

ゴブリンすら黙らせる大声が轟いた。先までモンスターの奇声や、レオたちの声でうるさかった広間がしんと静まり返る。

黙らせたのはトーマだ。彼は肩で息をして、スコップで床を殴り

付ける。

「ぎ、ギイ……？」

「僕はっ、こんな事してる場合じゃないんだ！」

「の、農民……？ 貴様、何を……」

いつもはトーマに対して強気なレオも、彼の剣幕にたじろいでいた。ジュリは動きの止まったゴブリンの間をすり抜けて、今よりは安全な場所へと避難する。

「は、おいおい、トチ狂っちゃったってか？」

「君のせいなんだから！」

「……な、ああ？」

静かになった広間では、ジュリの呟きも良く通った。トーマは彼女をスコップで示し、声を荒らげる。

「それから、君も！ 君もだよっ！」

トーマはウェッジとレオにも視線を向けた。

「どうして話を聞いてくれないんだよ！ どうして勝手な事ばかりするんだよ！ もっと人の事を考えてくれても良いじゃないかっ！？」

ゴブリンたちはトーマの出した大声に怯え、広間からこそこそと逃げ出していく。だが、モンスターを追う者はいない。彼の悲痛な叫びによつて、ここに縫い付けられたかのように動けなかった。

「自分の事ばかり考えてさ！ そんなんじゃ無理だよ、ずっとこのままだ！ 僕は嫌だっ、もう嫌なんだ！」

トーマ以外の三人は何も言えない。何を言つて良いのか、何を言えはこの場が収まるのか、彼の気が静まるのか分からないのである。「だから」と呟き、トーマは頭を下げた。

「ごめんなさい。僕も、自分の事しか考えてなかった。だから、ごめん」

勝手に喚き散らして、独りで盛り上がって。

そんな事、トーマは自分でも分かっていた。しかし、堪え切れなかったのである。もやもやとした気持ちを抱えたままでは何も出来

ないと思ったのだ。

「……………すまなかった」

だが、ウェッジは答える。彼はトーマに頭を下げて、それから周りを見た。

「ふ、まさか農民にこんな事を言われてしまうとはな」

レオは穏やかな笑みを浮かべる。一種、諦めたかのような、儂げなそれにも見えたが。

「この俺に向かって吠えたのだ。どうやら覚悟は出来ているらしい。農民、面を上げよ」

トーマはゆっくりと顔を上げていく。瞬間、彼の目が驚愕の色に染まった。見開いた瞳が、幻を捉えたのだと錯覚する。

レオが、自分に向かって頭を下げていた。

出会った時からわがままで、誰に対しても尊大で、他者を見くびり見下し続けていた彼が、頭を下げている。トーマは自分の目が信じられなくて、何度も瞬きを繰り返した。

「この状況を脱したいと思っているのは、農民、貴様だけではない」
レオは頭を上げて、全てを吹っ切ったかのような、爽やかな笑みを見せる。

「……………君は……………」

「何も言つな農民。……………ゴブリンを見るのもそろそろ飽いた。なあ、農民。何か策があるのだろうか？」

策なんか、ない。これっぽっちも考えていない。それでも、トーマにはやりたい事がある。プリカに教えられたから、と言うのもあったが、これから長い時間を共にする仲間になれるかもしれないのだ。だから――。

「僕は、皆と話がしたいんだ」

「話、か？」

レオが低く唸り、腕を組む。

「しかし、何を話すと言うのだ」

「何でも良いんだ。今は、何でも、どんな事でも話したい」

トーマはじつとレオを見つめた。彼の視線に負けたのか、レオはぼりぼりと頭を掻く。

「何を話して良いか分からぬのなら、どれくらい時間が掛かるかも分からぬだろう。生憎と、俺の舌は乾いていてな。話をすると言うのなら、茶が欲しい」

「……………同感だ」

ウェッジが頷き、マントを翻した。

「よし、一度寮に戻ろう」

トーマたち三人は出口を目指して歩き出す。が、

「……………オイ、オイ、オイオイオイ。ざっけんなよ。オレはまだ話すとも、戻るとも言つてねえんだぜ」

ジュリは獰猛な笑みを彼らに向けていた。

「一緒にお茶でも飲んで仲良しこよしってか？ 冗談きついっつの」

「ではそこで大人しくしている」

「ああ!？」

トーマはふうと溜め息を一つ。

「……………嘘でも良いんだ」

彼は悲しそうに俯き、それからジュリを見つめた。

「嘘でも良いから、心の中で僕を馬鹿にしたままでも良いから、だから、話だけでもして欲しいんだ。そうしなきゃ、ずっとこんな事をしなきゃならないと思うんだ」

トーマも、レオも。ここにいる四人ともが程度の差はあれど、頑固で、捻くれていて、子供なのである。それでも、彼らにはここで同じ事を繰り返す理由はない。前に向かって、先に進まなければならない理由がある。

「話するだけでゴブリンを気持ち良くぶっ殺せるってんなら、してやっても良い」

ガランは地上に戻ってきた四人を見て、へらへらと笑った。

「よう、どうだったよ？」

「一度、戻ります」

トーマはそれだけ言うと、ガランに背を向けて歩き出してしまう。どうやら、彼らは何かに気付いたらしい。ガランはそうかとだけ返して、その場に座り込んだ。

ガランは、トーマたちがゴブリンの討伐に成功するとは思っていない。成功しなくとも良いと思っていた。彼の目的は別にある。

「……ま、頑張ってくれや」

自己紹介をするのはこれで二度目なのだが、トーマには今回が初めてに思える。寮の部屋、それぞれのベッドに陣取った四人はお互いの顔を見回した。

「名乗り合ったところで、本題に入ろうではないか。いや、それとも問題と言うべきか」

レオが言っているのはゴブリンについて、だろう。彼らは頷き、それから、困ったように唸った。

「……『僕はシアン村のトーマです』ってか。んで、どうすんだよ。何を話したら良いってんだよ？」

「どうして僕の真似すんのさ。……ゴブリンに勝つ方法は思いつかないよ。けど、どうして負けたのかは思いつく」

トーマはまず、ジュリに視線を送る。彼女は反射的に睨んで返した。

「君は、一人で前に出過ぎだよ。すっごく速いけど、二回も囲まれて気絶してる」

「てめえらがオレの援護しねえからだよ。そのデカブツや根暗がしっかりしてりゃ面白いじゃん」

「知るか。何故俺が貴様を助けねばならないのだ」

レオは鼻で笑った。彼の態度が気に入らないジュリは思わず、ベ

ツドの上で立ち上がる。

「大体よう、その根暗だってひでえじゃん。こそこそ逃げ回って、ろくな援護もしやがらねえ。虫かっつーのてめえはよ」

指を差されたウェッジは何も言わず、弓をそつと撫でた。

「む、確かにそうだ。貴様、腕は良いらしいがそれでは弓を持つ意味がなかるうに」

「……………少し前、バリスタにいた」

聞き慣れない単語に、トーマは首を傾げた。

「ああ、お前あのギルドにいたのか。へえ？　読めたぜ。んで、何かやらかして追い出されたってとこだろ？」

ジュリは愉快そうに笑う。

「おい、バリスタとはどういうギルドなのだ」

「……………後方支援ギルドだ。アーチャーや回復、補助魔法を使える者が多く所属している」

ウェッジがレオに答えた。口数の少ない彼がすらすらと、淀みなく説明をした事から、ジュリは自分の読みが大きく外れてはいないのだと判断する。

「……………彼女の言う通り、俺はバリスタを追い出された」

「ほう、何故だ？」

ウェッジは言い辛そうにして、目を強く瞑った。

「その、言いたくなかったら……………」

「……………いや、問題ない。……………ある依頼でトバの森に潜った時、俺は味方を射った。幸い、命に別状はなかった。間違いであつたのは確かだ。そう思う。しかし、俺の矢が味方に当たったのもまた事実」

「それで」と、レオは意地悪く口の端をつり上げる。

「まさか、そのせいで消極的な矢を放っていたのではないだろうな。貴様、俺にも当てただろうが」

レオは自分の背中を擦り、ウェッジを睨み付けた。

「……………すまない」

「ふん、半端な真似は止めておけ。良いか射手、矢など、どこにいても当たる時は当たるものだ。それを避けようと逃げていては何も勤まらん。狙え、射手。貴様ほどの腕があれば援護するのも容易い筈だ。俺を助けようとして放った矢になら、俺は当たっても文句を言わん」

「……………レオ・バーンハイト」

レオは満足そうに頷いた。

「貴様らも文句はないな？」

「僕を狙った矢じゃないなら、文句と言うか、僕は諦めるよ。だって、しょうがないもん」

「オレは言うからな。つか文句だけじゃすまさねえ。ま、どっかの誰かと違って、んなものに当たる訳ねえけど？」

と言いつつ、ジユリは明らかにレオを見て笑っていた。

「貴様あ！何を笑っているか！？」

「うつせえなあ、お前の声聞いているとイライラしてくんだよ」

「切るっ」

「切っちゃ駄目だよ！」

飛び出しそうになったレオをトーマが押さえる。それを見てジユリはまた、品のない風に笑うのだ。

お互いの事を分かり、親睦を深めるといふ名目の話し合いは、遅くまでこのようなペースで進んでいったのである。

陽はとうに暮れ、月明かりが長い影を四つ、浮かび上がらせた。

彼らが戻るのをずっと待っていたガランは、片手を軽く上げる。

「早かったじゃねえか。俺はてつきり、明日の朝までこのままだと思ってたよ」

「へえ？ ずっとここで待っとくつもりだったのかよ。大した犬っぷりだな、オイ」

「班長だからな。…………さて、どうやら自信がある様子だと見えるが。

やるのか？」

レオが鞘から剣を抜いて答える。

「無論だ。今日、俺たちが全てのゴブリンを退治してみせよう。貴様はここで吉報を待っていれば良い」

ガランは、昨日までの表情とは違う四人を見て納得した。彼らには自信がある。たった四人でこのゴブリンどころか、全てのモンスターを倒すのも可能だ。そう言わんばかりの雰囲気飲まれた。久しく感じていなかった、有り余る若い熱に自分まで浮かされている。

「やり過ぎるなよ」

歯を見せて笑み、ガランは四人を送り出した。

「こつち見なあ！ ゴブリンよう！」

広間の中央、そこに集まるゴブリンへ向かってジュリが駆け出した。彼女は右手のナイフを振り上げ、飛び掛かってきたモンスターの喉を裂く。ダメージを受けて、空中で動きが止まったゴブリンを回し蹴りで床に叩きつけた。

ジュリに群がるゴブリンたち四匹が、彼女へ同時に襲い掛かる。

「アハハハっ！」

哄笑を上げてジュリが身を低くした。同時に、無防備なゴブリンたちの腹を、円を描くように切り裂いている。彼女はそこから脱し、大きく後ろに跳ねた。

囲みを抜けたジュリを追うのは三匹のゴブリン。だが、

「させんっ」

その全てが剣の錆となる。

レオがジュリの作った隙を埋める形で前に出た。彼は、奇声を上げてこちらに敵意を向け続けるゴブリンを見て、満足気に頷く。

「戦いとはこうでなくてはな。少し煩わしいが、気持ちの良い勝利とやらを得るには仕方あるまい」

「馬鹿っ、来てるってば！」

レオは飛び掛かるゴブリンを殴り飛ばす。

「馬鹿ではない。しっかり見えているわ。俺を誰だと思っている。

俺はレオ・バーンハイト！ 全ての頂点に立ち、有象無象を高みから見下ろす男だぞ」

「オイ、あいつを射て」

ウェッジが首を横に振り、すぐに弓を構えた。レオの背に回り込んだゴブリンの頭を狙って、矢を放つ。

「む？ はっは、良くやった射手。褒めてつかわすぞ」

ゴブリンの断末魔を背に、レオは笑った。それから、広間の中央に切り込んでいく。彼が剣を振るう度、モンスターが、ぎいいと鳴いて倒れていった。

「危ないと思ったら戻ってきてよ！」

レオは片手を上げて答える。トーマは一つ息を吐き、こちらに迫ってくるゴブリンを強く見据えた。

「ウェッジはレオの援護を。僕とジュリで近付いてくるのを、やる」
「……………了解だ」

頷き、ウェッジは弓をしならせる。

「あいよ」と、ジュリはけだるそうに答えてナイフを投げた。彼女は間を開けずに、間を縮める。ゴブリンの目に刺さった得物を引き抜いて、手近なモンスターの喉を裂いた。

トーマは、ウェッジが矢を放ち、再びつがえたのを確認してからジュリのもとに向かう。彼は立ちふさがる小さなモンスターをスコップで吹き飛ばした。

「皆っ、危なくなったら声を出してよ！ 僕が行くからっ」

「てめえの助けは、いらねえ」

頭と腹を確かめるように蹴り、くるりと回って踵を落とす。逆手に構えたナイフはゴブリンの体液で濡れていた。ジュリはトーマの背中にぶつかり、布を渡すように告げる。

「自分のを使いなよ」

「汚くなるからやだ」

「……洗って返してよ」

差し出された手拭いで刃を綺麗にすると、ジユリは意地悪そうな笑みを見せた。

「しっかり洗つといたぜ。ゴブリンの血で、だけどな」

トーマは床を走るゴブリンをスコップの先端で突き刺す。振つても中々取れなかったので、遠心力を使い、モンスターの群れを狙って放った。仲間の死骸に混乱するゴ布林たちに風が吹く。一陣の風が通り抜けた後、そこにはナイフを鞘に収めるジユリしか立っていないかった。

ここまでは上手くいっている。

トーマは他の三人を見遣り、深く息を吐いた。

ゴブリンを倒す為の方法は思いつかない。だが、どうして負けたのかは分かっていた。突出したジユリが退かないまま、誰も助けにいけないまま彼女が戦闘不能に陥る。ウェッジは役に立たない矢を放ち、レオは中央で剣を振るい続けていた。自分と言えば何も出来ないでおろおろとしている。

ならば、止めれば良い。

陣形を考え、作戦を考え、そうしないように動けば良い。討伐出来るかどうかは分からないが、今までと同じように撤退はしないで済む。

トーマたちが考えたのは単純だが、皆で話し合う事で連帯感のよいうなものが生まれ始めていた。上手くいくんじゃないか、次に繋がる何かを得られるのではないか。少なくとも、トーマはそう思っている。

ジユリを先頭に、彼女がそのスピードでゴブリンを掻き回す。危ないと判断したら下がる。

レオは基本的にジユリの援護を。

ウェッジが一番後ろで、レオたちの死角の敵を狙う。

トーマが真ん中で全員の援護と、必要になれば指示を飛ばす。

それだけで、まるで違っていた。

「レオっ！」

が、レオが少しずつ中央から後退していく。プライドの高い彼は何も言わないが、疲れているらしかった。どうやら作戦を次の段階に移さなければならぬらしい。トーマはそう判断して、ウェッジに視線を送る。

ジューリはウェッジと一緒に出入り口へ繋がる通路へ。トーマはレオを後退させる為にゴブリンの注意を引き付けていた。

「勘違いするなよ農民っ、俺はまだ疲れていないからな！」

「……はいはい」

今までで最も上手くいっている。こちらに目立った怪我をした者もおらず、ゴブリンの数は順調に減っていた。

三人が狭い通路に入り、その前方にトーマが立つ。彼はスコップを床に突き刺して、ゴブリンたちを睨んだ。

ゴブリン討伐・4

レオは、通路に隠しておいた袋から水筒を取り出して頭から水を被った。火照った肌に冷たい水が気持ち良い。彼は髪の毛をくしゃくしゃと掻き、息を吐く。

「げっ、温いよこれ。おいデカブツ、氷ぐらい入れとけよな」
「俺に言うな馬鹿者が」

本当は鎧も脱ぎたかったのだが、戦闘中なのだから仕方ない。レオは壁に背を預け、座り込まないように耐える。

レオは広間の方に顔を向けた。そこでは、トーマが一人でゴブリンを相手にしているのが見える。こうして自分たちが体を休めていられるのは、彼のお陰なのだ。そう思っても、決して礼は言うまい。固く誓って、すぐその戦闘に意識を集中させる。

自分が退く訳にはいかない。

自分から言い出した事なのだから、もったぎりぎりまで、限界まで耐えなければ嘘だ。

トーマは歯を食い縛り、ゴブリンたちをスコープで弾いていく。彼は少しずつ後退して、通路の中でモンスターを迎え撃つ。ここから背後を気にしなくても良い。前方の敵にだけ集中出来る。それでも、間断なくゴブリンは飛び掛かり、床を走り、トーマに襲い掛かっていた。

負い目があった。

最前線で剣を振れない。あんなに早くは走れない。弓を引けない。トーマは、何も出来ない。自分は何も出来ないのだ、と。大見得を切ったのは良いが、本来なら話を聞いてくれなくても当然である。

期待に応えなければならぬ。嘘を吐き続けねばならぬ。

だから、

「わあああつ！」

戦い続ける。

口だけの人間にはならないように。嘘でも良い。表面上の仲間でも構わない。今日が終われば、明日無視されるのも仕方ない。

それでも、だからこそ、今だけは。

仲間が欲しかった。

裏切られても恨まない。憎まれても呪わない。傷付けても許してくれる。好きだと言えば答えてくれる。そんな友達が欲しかった。今でも覚えている。放った矢の行く先は、今もこの目に焼き付いている。罵声も怨嗟も、今もこの耳から離れない。

だから目を瞑り、口を開かず、寡黙であり続けた。自分は誰かに迷惑を掛けるしか出来ない。認められず、拾われず、しかしそれで良いのだと思っていた。

それでも、知らぬ間に求めてしまう。加入可能なギルドを探して、これは生活の為なのだと思魔化した。

きつと誰かに許されたかった。ずっと誰かと出会いたかった。

協調性のないジユリに、傲岸不遜なレオ。彼に従うままで気弱だったトーマ。

でも、認められた。

弓の腕を褒められた。

『今だけでも、一緒に頑張って欲しいんだ』

真摯な瞳の前では頷くしかない。

寄せては返す波のようなゴブリンの群れを睨み付け、ぎりりと歯を食い縛る彼を見て、ウェッジは決意する。

仲間じゃない。友達じゃない。まだ出会って数日しか経っていない。裏切られるほどの絆はなく、傷付けるほど近くもない。しかし

期待には応えよう。恩には報いよう。

そう思ったウェッジは弓を構え、ゴブリンを片目で捉える。はち切れんばかりにしまった得物は今か今かと、矢を解き放つ瞬間を待ち望んでいるかのようだった。

——俺はここで。

空気を切り裂きながら飛んでいく。矢は標的の額に突き刺さり、ゴブリンの体は緩やかに崩れ落ちていった。

「休んでなくて良いの？」

振り返ったトーマの顔色からは疲労が感じられる。辛いなら言えば良いと思うのと同じく、彼もまた先へ進むのに必死なのだろうと気付いた。

「……………問題ない」

自分がそうしたいと思うのと同じく、トーマもまた、体を張って何か伝えたいのかもしれない。ウェッジはそれ以上は何も言わずに、矢をつがえて、再度放った。

トーマたちがギナ遺跡に入ってから二時間経つ。ガランの視線はちらちらとどこかを向いていて、落ち着きがなかった。時間、である。

「……………ふう」

そろそろコビヤクたちがやってくるのだ。凶暴化したゴブリンを野放しにはしておけず、トーマたちが成功しようがしまいが、夜明け前に突風同盟の討伐組がこちらに来る手筈になっている。

自分たちだけで解決したいという気持ちもあったが、モンスターを放置しておけないという声も理解は出来る。班としてどのように動くか、個人ではなく、組織の一部となった場合どう戦うのか。今後に向けて、そういった意識も高めておきたかったのだが仕方ない。ガランが顔を上げると、前方から十数人の影が見えた。コビヤク班四名。ガサキ班五名。サークルード班五名。計十四名のプレイヤ

ーがガランを取り囲む形で立ち止まる。

「約束の時間だ、ガラン」

「ああ。……よう、もう少しだけ待ってくれねえか？」

コビヤクは目を瞑り、静かに息を吐いた。彼が口を開き掛けた瞬間、別の人物が割り込んでくる。

「ざっけんなよ！ こっちや三日も前から待ってんだぜ。この仕事終わらせねえと別の依頼だって受けられやしねえ。分かってんのかよ！」

怒鳴りつけるのはガサキと呼ばれる男だ。彼は短い茶髪に狂暴そうな顔と、喧嘩っ早い事で恐れられている。耳に付けた大量のアクセサリーが揺れた。

ガランは動じる事もなく、ゆっくりと立ち上がる。

「陽が昇るまでで良い」

「意見してんじやねえぞコラ。てめえ俺らに指図出来るような立場じゃねえだろうが」

「僕たちも子供の遣いで来た訳じゃあないんです。第一、新人だけでこの時期のゴブリンを討伐するなんて無謀なんですよ」

ガサキに乗じて細身の若い男が口を開く。彼の名はサークルード。ガランよりも後に突風同盟に来たサークルードだが、彼の能力は素晴らしく、数年足らずでギルドでも重用される存在になっていた。

ガサキとサークルードも、コビヤク、ガランと同じく自らの班を率いてここに来ている。突風同盟の幹部として、譲れないプライドがあるのだろう。

それでもガランはその場から退かなかった。彼は何も言わず、遺跡の入り口前に座り込む。

「退けよガラン。この人数相手に逆らおうって言うつもりじゃねえよな？ なあ！？」

「やめるガサキ。ギルド内での揉め事はご法度だ。……塔での事、忘れた訳ではないだろう」

コビヤクに窘められてガサキは口を閉ざした。まだ言い足りない

様子ではあったが、ここで争う事は本意ではないらしい。

「悪いな」

「夜明けまで、だ。それ以上は俺たちも待てない」

「ああ、充分だ」と、ガランは月を見上げた。

腕が上がらなくなってきた。トーマは動かなくなったゴブリンを蹴飛ばして、スコップを持ち直す。

自分でも不思議だった。疲労感はある。確かに神経は磨り減っているのだろう。だが、既に一時間以上も動きっぱなしだと言うのに、まだまだ戦える。村にいた頃では味わえなかったであろう異常な高揚感に後押しされて足を踏み出す。

「わ、ああああっ！」

大広間に流れる血も、立ち込める臭いも、転がる死骸も、とつくに慣れた。

どうして、戦うのか。

どうして、倒すのか。

どうして、殺すのか。

意味を求めないまま、理由を考えないまま、ただ、得物を振るう。彼らの行動に意図はなく、意思はない。半ば無意識の内にゴブリンの命を踏み碎き、ゴブリンの巢を踏み荒らし続ける。

「このままでは埒が明かん、俺たちが前に出る！　良いな女！」

「オレに命令すんじゃねえ」

「……………矢の後を追って切り込め」

「命令すんなつつてんだろうがよ！」

運が悪いと一言で済ますのは簡単だ。今日、ゴブリンたちはこのような目に遭っている。トーマたちがこのような目に遭わせている。しかし、トーマたちに明確な悪意はなかったのだ。殺意も、敵意もない。辛うじて、戦意だけを持ち合わせていた。だから、誰が悪いと非難して、それが悪いと断言するのは何者の手にも余る行為な

のだろう。

——前に。

前に行く。前に進む。

狭い通路を出て、地の利を捨てて、広い空間に足を進める。

トーマも、レオも、ジュリも、ウェッジも。四人ともが前を見つめる。敵を見据える。生き延びる為ならばまだしも、無闇にモンスターを殺したいとは誰も思わない。それでも、それぞれに前へ行かなければならないという気持ちがある。ここで立ち止まるつもりなど、もうなかった。

良くやったと思う。自分が思っていたよりも、彼らは上手く考えて、立ち回っていたらしい。通路にへばっている四人を見遣り、ガランは安堵の息を吐いた。

「はっ、こりゃあ……全員息があるな」

「良く見てくださいよガサキさん。この子たち、大した怪我もしていない。討伐はやはり無理だったみたいですけど、悪くない働きですよ」

サークルードが壁にもたれかかったジュリの顔に手を伸ばそうとする。その手をコビヤクが阻んだ。

「……何もしませんよ」と、サークルードは柔和な笑みを浮かべる。「欲しければ仕事を終えてからにしろ。尤も、彼女がお前を相手にするかどうかまでは知らないがな」

「厳しいなあ、コビヤクさんは」

「おーいつ、広間にゃあ死体しかねえぞ！ どーすんだコビヤク、別れて進むのか！？」

先に広間に出ていたガサキが大声を上げる。その声に顔をしかめながら、コビヤクは頷いてみせた。

「おっしや、俺らは右っから回ってくわ！ おらあつ、何やってんだてめえらさっさと付いて来い！」

ガサキ班の班員が弾かれるように飛び出していく。彼らの後姿を見届けた後、サークルードは班員を連れて、当たり前のように左の通路へと向かって歩いていった。

「俺たちにチームワークと呼べるようなものがあつたら、か？」

「……さあな」

「その間、暗に認めるって証拠だぜ。ま、仕方ねえっちゃ仕方ねえ。何せ俺たちはこの街で最大のギルドなんだからよ」

「無駄口を叩いている暇があつたら、自分の班員を看てやれ」

「あいよ」と、気のこもっていない返事をしてから、ガランはコビヤクを見送った。

目を開けなくても分かった。ギナ遺跡の臭いとは違う。月明かりが瞼の上に注ぎ、柔らかな土がいつもよりも温かく感じられる。何よりも、ここには風が吹いていたから、だから、トーマは自分が地上に戻ってきたのだと気付いた。

「よう、お目覚めかい」

「……おはよう、ございます？」

「はっは、ま、朝っちゃん朝だ」

体を起こしたトーマに話し掛けるのはガランである。

「しかし意外だな。最初に起きてくるのはレオかと思ったが、どうやら、一番元気があるのは坊主らしい」

「畑仕事で体力はありますから」

それしかないとも言ひ換えられるが、とは言わない。トーマは遺跡の入り口に目を向けて息を吐いた。

「失敗、したんですね。僕たち」

「ゴブリンの討伐には別の班があたっている。まあ、気にすんなよ。お前らのやってきた事は無駄にならねえ、後の奴らは楽になるし、何よりもな、お前ら自身が楽になった筈だ」

「……僕たちが？」

「そうだ」と頷き、ガランは口の端をつり上げる。トーマには彼の言いたい事が分からなかったが、とにかく、生きて戻ってこれた事に今一度安心した。

まだ眠り続けるレオたちを見回した後、トーマはぼりぼりと頭を掻く。喉が渴いた。空腹も覚えている。戦っている時は感じていなかったものが、緊張から解放された事によって次々に溢れてきていた。

「上手くいくと思ってたか？」

問い掛けられて、トーマは迷う。やがて、時間を掛けて、ガランの顔色を窺うように頷いた。遺跡での戦闘は実際に上手くやれていた気がしたのである。

「ああ、俺もだ。絶対上手くいくと思ってた。事実、お前らは上手くやったぜ」

「え、でも、僕たちは……」

「これで、明日からは自由の身だ。良かったな」

相好を崩すガランだが、トーマにはまだ良く分かっていない。

「心配するな、俺が依頼したのはゴブリンの討伐だけじゃねえ。全部は言わないが、ガラン班は無事、何事もなく依頼を達成した」

「……ええと、じゃあ、もうモンスターと戦わなくても？」

「ま、班単位で依頼が来たら仕方ねえけど。それまでは好きにやってくれや」

頭がきちんと回らない。明日から料理人になる為に、村の皆の為に働ける。トーマは口をぱくぱくと動かしていたが、その事実を認識して、拳を握り込んだ。

「今言つたの、そいつらにも伝えといてくれ。俺は帰って寝る」

「……………え、と。じゃあ僕一人で？」

トーマは躊躇いがちに、眠ったままの三人を指差す。

「起きるまでそこにいてやれ。もしくは、三人背負って帰れ」

「そんなあ…………」

「はっはっは、んじゃな。お疲れさん」

ガランが背を向ける。彼の後ろ姿を何とはなしに見上げて、

「ガランさん」

トーマが口を開いた。

「何だか、馬車の時と街に着いてからとで、雰囲気違いますね。優しくなったと言うか」

「あー……そりゃあ、な」と、言いにくそうに髪の毛を掻き耨り、ガランは振り向かず告げる。

「気分が悪かったんだ。俺も馬車には弱い。あの揺れは反則、拷問だ。つーか乗り物が駄目なんだよ。あん時お前が吐いてたら、俺も釣られて吐いてたぞ」

ガランが言っていたもう一つの依頼とはなんだろう。トーマは空になった水筒を恨めしい目付きで見ながら考える。

「……このギルドで一番甘い人、か」

プリカが語ったガランの人となりが事実なら。自分が思った彼の性格、性質が間違っていなかったら。きっと、答えは一つだ。トーマはガランの歩き去っていった道を目で追い掛ける。

「……う、ぐう、ごぶりん風情が俺にい……」

相変わらず、寝ていてもうるさいレオに苦笑して、トーマは立ち上がった。

——きっと。

きっと、ガランはこう言いたかったのだろう。本当は優しいのに、不器用な彼はこういった形で伝えようとしたのだ。『仲良くしろよ、お前ら』と。

赤毛のジユリ

ゴブリン討伐の依頼が終わってから、三日が経っていた。

ガラン班の全員が目に見えて前に進んだ訳ではなければ、明確に変わった訳でもない。しかし、彼らの纏う雰囲気は少し、柔らかくなっていた。

目が合えば挨拶をする。食事を一緒に食べる。街へ連れ立って出掛ける。当たり前前の事が嬉しくて仕方がない。やっと出来た新天地での絆に、トーマの心は浮き足立っていた。何せ、料理人になる事に関しても目処が立ったのである。プリカの紹介で厨房のメンバーと仲良くなり、少しずつではあるが料理に関しての知識を吸収していく日々。毎日が楽しくて仕方がなかった。

「おい」

だから、油断していたのだろう。彼女を、忘れようとしていたのだろう。

予想していなかった人物から話し掛けられて、トーマの思考は暫くの間止まった。

自由だと、そう聞かされてから三日が経っていた。

ジユリの知る限り、他の班員はその自由とやらを謳歌しているように見える。トーマは料理人になろうとしているし、レオはギルドマスターになるのだと毎日ダンジョンに出掛け、他のギルドメンバーに喧嘩を売ったり、売られたり。ウェッジだけは何をしているか分からないが、この間、彼が誰かと街で話しているのを見た（という話を盗み聞いていた）。武器を持っていたから、きっと依頼を受けてどこかへ出掛けていたのだろう。

さてと。

では、自分は何をしているのだろうか、ジユリは己に問い掛ける。答えは単純だった。と言うかそこに転がっている。日がな一日、ベッドに転がっている。これが答えであった。

食事を得る為に、部屋から一步も出ないという日はなかったが、明日はどうなるか分からない。自由とは、惰眠を貪る事ではない。が、そもそもこの至れり尽くせりの環境が悪い。そうに決まっていると、ジユリは自分に言い聞かせている。

このままではいけないと思ったのは、何気なく手鏡の中の自分を覗いた時だった。

目付きが、良くなっている。ぬるま湯に浸かった生活のせい、陰しさと、鋭さが薄れかかっているように感じたのだ。同室の人間の雰囲気にあてられたのかもしれない。

とにかく、ジユリは三日目にして、ようやく食事以外の用事で部屋を出た。ギルドの敷地内に設置された掲示板、そこに貼り出された依頼を確認する為である。

どうせなら厳しい依頼が良い。凶悪なモンスターの退治であったり、凶暴な人間を追い掛け回すような。危険であればあるほど元の自分を取り戻せる筈だと、そう思いながらジユリは依頼を確認していく。

しかし、危険な任務であればあるほど多くの人員を募集していた。一人きりで受けられるような依頼は宿屋のお使いであったりゴブリンの残党狩りであったりと、ジユリの望むようなものは見つからなかった。第一、彼女は突風同盟に知り合いがないのである。パーティを組む者を探すところから始めねばならない。

「……めんどくせえな」

ふと、掲示板の一番右端の依頼が目に残った。依頼の内容が書かれた紙を留めているピンを抜き取り、字を目で追っていく。

ジユリが確認した限り、依頼は単純なもので、早い話がモンスターIの死体を持って来いという内容だった。彼女は掲示板の前で一頻

り悩んだ後、その紙を持ち去っていった。

「おい」

「……えと、何か用？」

トーマに話しかけてきたのはジュリだった。彼はおどおどしながら口を開く。

「たりめえじゃん。用がなけりやお前みたいな田舎もんに話し掛けるかよ」

はつと鼻で笑い、ジュリは嫌らしく笑んだ。トーマは、彼女の他人を馬鹿にした素振りが苦手である。

トーマはジュリが苦手である。

目が合えば挨拶はする。しかし目はなるだけ合わせないようにしていた。だから、レオやウェッジとは違って、ジュリに対してだけは食事に誘う事も街へ出掛けようと、余計な口を利かないよう、声を掛けないようにしていたのである。それは、トーマが彼女を毛嫌いしているからではない。むしろ逆だ。ジュリが自分を嫌っている。そう思っ、自分からは何もしないように心掛けていたのだ。

「用事って何さ？」

「暇だろ？　ちつと付き合えや」

「うつん、ごめん。僕、今から野菜の皮むきを教えてもら……」

「暇だろ？」

「う……」と、トーマは何も言えなくなる。

「良いじゃねえか、皮あ剥くぐらいオレが教えてやんよ。だから、つべこべ言わねえで来いってば」

珍しい事もあるものだ、トーマは腕を組んで目を瞑った。ジュリがこうして外に出ている事といい、自分に話し掛ける事といい、珍しくて、やっぱり嫌な予感がする。

「どこに付いてけば良いの？」

しかし、頼み事を無下に断るのは躊躇われた。それに、今日のジ

ユリは少しだけ機嫌が良さそうに見える。

「トバの森」と短く答え、ジュリは依頼の書かれた紙をひらひらと弄んだ。

「あ、そっか。依頼を受けるんだね。それで、レオとウェッジはどうしたの？」

「あ？ 誘ってねえよ、この紙にや二人までって書いてたからな」
「え、あ、そ、そうなんだ」

トーマはその場に倒れこみそうになるのを堪える。が、彼の顔は引きつっていた。依頼を受けると聞いたのだから、てっきり班全員で行動すると思っていたのだが、まさかジュリと二人きりになるとは、この状況はトーマにとって完全に埒外である。

「じゃあ、ちよつと待ってて。今から謝りに行ってくるよ」

「はあ？ 誰に？」

「僕に野菜の皮むきを教えてくれるって言ってた人にだよ」

「別にかまわねえじゃんよ」

「君だって何もなしに約束を破られたら嫌だろ」

「少しだけ考えて、ジュリはつまらなさそうにトーマを見た。

「んじゃ、入り口で待ってるからよ。さつさと済ませて来いよな」

「分かった。ちよつと時間掛かつちゃうかもしれないけど」

出来るなら、あまり行きたくはないのだけれど。とは、流石に言い出せなかった。

トバの森は高木が立ち連なる巨大なダンジョンである。森は棲息するモンスターの危険度によって一区、二区、三区と三つのエリアに分けられており、丸一日探索に費やしても、そのフィールド全ては踏破出来ない。

「依頼って、何をすれば良いの？」

「あー……」と間を置きながら、ジュリが胸元に手をつ込む。トーマはぎゃあと悲鳴を上げて彼女から距離を取った。

「へっ、変態だ！」

「てめえ良いもん見させてもらっという何言っただよ」

「母さんが言っただ。そんなところにもものを入れるなんて、変態じゃないか」

ひらひらと、依頼内容について書かれた紙を見せびらかしながら、ジユリは意地悪そうな笑みを浮かべた。

「ヒヒっ、だっせえなあお前。胸ぐらいでガタガタ抜かすなよ。お、何なら全部見せてやろうか？」

「いつ、知らないよっ」

トーマはそっぽを向いて、森に向かって歩き出す。

「アハハハっ、顔真っ赤じゃん。心配すんな、冗談だからよ。お前みたいな田舎もんには勿体なさ過ぎるぜ」

「……じゃあ、僕みたいな田舎者を連れ出さないでよ。依頼なら、レオやウェッジの方が頼りになるだろ」

「まあな」と、ジユリはあっさりと頷く。トーマのプライドにほんの少しのひびが入った。

「けどよう、うるせえのと根暗、極端過ぎんだよ。オレとあいつらのどっちかと二人きりなんて、五分で限界。切り掛かっちゃうぜ」

「僕は平気なの？」

「消去法って知ってつか田舎もん」

知っていたからトーマは黙る。

「ま、お前が一番やりやすいかな。荷物持ちにも使えるし、盾代わりにもなるしよ。ああ、それに、いざって時は……」

「言わなくても良いよ！ 酷いや、もう帰りたい」

やっぱりジユリの頼み、もとい脅しなどに屈しなければ良かった。これから依頼が終わるまで彼女と二人きりなのである。トーマは溜め息を吐いて、木の幹に背を預けた。

「依頼って、どんなの？」

「あー、トバの森一区。ここに棲息するマッドボアの牙を持ち帰ってくれ、だよ」

「……マッドボア？」

「でけえイノシシだよ」と、ジュリは事もなげに言い放つが、詳しい依頼内容について初耳だったトーマの気は萎えてしまった。

「またモンスターと戦うのか……」

「しっかりスコップ持って来てんじゃん。期待はしてねえけど、足は引つ張るなよ」

「ねえ、僕たちだけで大丈夫なの？」

「あーっ、もう一々鬱陶しいなお前。ビビってんじゃねえよ」

ジュリはトーマの尻を蹴り飛ばして、森に入っていく。一切の躊躇すら見受けられない足取りを見て、仕方なく彼も後に続いた。

トバの森で危険だと言われているのは三区だ。一区と二区は街のプレイヤーが有志を募り、開拓を進めている。森へ入る為の入り口を作り、歩きやすいように木を伐り、道を作った。先人の恩恵に与りながら、トーマたちは森の奥を目指して歩く。

「わ、クマだ」

「目えついてんのかお前。牙もねえし、大体これがイノシシに見えるのか？」

トーマが掴んでいるのはハグベアの子供だ。灰色の体毛に、彼が片手で掴めるほどの大きさ。森に入っただけに出てすぐに出くわしたのだが、ハグベアはつぶらな瞳を潤ませたまま動かなかったので、トーマは何となく掴み上げてしまったのである。

「見えないよ。だから、クマだって言っただじゃないか。……親とはぐれちゃったのかな」

「探してんのはイノシシだろうがよ。おら、そいつよこせ」

「……？ どうして？」

「あ？ 殺すに決まってるじゃん」

ジュリが何を言っているのが理解出来ず、トーマはハグベアに視線を送った。モンスターはきゅうつ、と鳴き声を漏らす。

「ハグベア、知らねえのかよ？　でかくなったら人だって喰っちまう奴だぜ。今の内に殺しとくのが為になるってもんだろ」

「そつ、そんなの可哀想じゃないか。だってまだ、子供だよ」

「見りや分かるよバーカ」

早く渡せと急かされるが、渡せばハグベアの子供は殺されてしまっただろう。トーマは首を横に振り、ジュリから離れた。

「僕たちが探してるのはマッドボアだろ。何も殺さなくたって良いじゃないか」

「じゃあ、でかくなったらそいつに食い殺されても文句はねえんだな？」

「ないよ」

殺した。殺している。自分は既にギナ遺跡でモンスターを殺しているのだ。だから、偽善でも良い。これからは戦いを出来るだけ避けたいと、トーマはそう思っている。

「……クソが。ちっ、白けちまったぜ。あーあー、いーよもう、逃がせば？」

ジュリはその場にしゃがみ込み、小石を拾って、森の奥に投げ飛ばした。

マッドボアは水のある場所にいる。

小川の間所を知っていると云ったジュリを先頭に森の中を歩き回っていたのだが、

「ねえ、もしかしてさ」

「話し掛けんなよ」

一向に辿り着かなかった。それどころか、先のハグベアの一件でジュリは気を悪くしたらしく、二人の間に漂う空気は険悪で、ぴんと張り詰めてしまっている。

「道に迷ったんじゃないの？」

「話し掛けんなって言うてんだろ！」

ジュリは立ち止まり、手近な木にナイフを突き立てた。ぐりぐりと柄を動かして樹皮を抉り取っていく。

「……止めなよ」

「オレに指図すんじゃない。木の一本や二本でガタガタ……」

「木じゃない。そうやって何も言わずに荒れるの、良くないと思うんだ」

「……へえ？」

トーマに向き直ったジュリは口の端をつり上げて、彼を流し目で見た。

「言いたい事があるなら言いなよ。僕が何かしたんなら、謝る。けど、何も分からないままって良くないと思うんだ」

「アハッ、何？ 何だよお前、何様のつもりだ」

ジュリはナイフを逆手に構えて、一步踏み出す。

「勘違いしてんじゃないやねえぞ。オレにとつてお前は何でもない。ただそこにいるだけの、木と変わらない奴なんだぜ」

「そんな、君は……」

「説教垂れようとしてんじゃないやねえよ。お前にオレは分からねえ、オレもお前を分かるつもりないしな。……は、何その目。泣かされたいの？」

道に迷って苛々していた。意見がぶつかって思い通りにいかなかった。そう言えば済む話なのにと、トーマは俯く。彼にはジュリのような人間が理解出来ない。一方で、今の状況は自分が蒔いた種が原因なのかもしれないと思った。

「ごめん」

分からない。しかし、自分はジュリを分かつと、仲良くなるうとしなかった。彼女に何か言われるからと怯えて、避け続けていた。「ふうん、都合悪くなったら謝って逃げようっての？」

「ごめん。僕、君を避けてた」

ジュリは目を細める。トーマが何を言おうとしているのか、計りかねたのだ。

「ご飯を食べる時、君だけは誘わなかった」

「……………あ？」

「買い物に行く時も、レオとウェッジにだけ声を掛けてた」

「あ、な、いや、ちょっと待てよお前」

トーマが何を言っているのかジュリには分からない。そも、彼女だって同じなのだ。田舎の村から来た、それだけの理由で彼を馬鹿にしていたのである。故に、トーマを分かつとはしなかった。仲良くなるうなどとは考えにすら及ばなかったのである。

「あの時、遺跡で他の人の事を考えて、なんて言っただけ、ごめん。自分の事だけ考えてたのは僕なんだ。……………そんなので、僕は君に……」

「そういう意味じゃねえんだけど」

鼻を鳴らすトーマを見て、ジュリの怒りは急速に萎んでいく。毒気を抜かれたような気がして、彼女はぽりぽりと頭を掻いた。

「もう、良いわ。お前って本当有り得ねえよ。……………あー、そうだよ。苛々してたんだっつーの。道にや迷うし、お前はモンスターを庇うしな。おら、これで良いんだろ？ 満足したかよ、なあ？」

諦めよう。どうやら、自分と彼とでは見ているものが違い過ぎるのだ。そう判断したジュリは溜め息を吐いて、鞘にナイフを戻す。

「……………み、道に迷ってたの？」

「悪いかな」と、悪怯れる素振りすら見せずジュリは言う。

「じゃあ、僕が水場を探すね。こういう場所は慣れてるんだ」

「先に言えよグズ」

「だって、恐かったんだもん。君が先に行くって言うてるのに僕が出しゃばったら……………」

さっきから気になっていたのだが、自分は相当恐がられていたらしい。ジュリは今まで無視されていたのを思い出して、不機嫌そうに眉根を寄せる。

「飯だとか買い物とかよ、端っからオレは付き合う気いねえよボケ。けどな、後で言われてもムカつくから、声だけは掛けるよな」

「う、うん、分かった。あ、それとついでだから言っとくね」

トーマはにこにこ、笑みを浮かべながら口を開いた。

「僕、やっぱり君が苦手なんだと思う。挨拶するのも、目を合わせるのがだって嫌だなあ、って……」

トーマはトバの森に来るのは初めてだが、村の近くにはこういった場所しかなかった。その為か、彼には何となく、と言った程度にはこの歩き方が分かる。空気の湿り具合、水がせせらぐ僅かな音を確認しながら少しずつ歩を進めていく。

「何も殴る事はなかったんじゃないのかな……」

「オレを馬鹿にするからだろ。良かったな、殺されなくて」

ジユリを馬鹿にしたつもりは毛頭ないのだが、彼女を怒らせてしまったのは事実なのだ。トーマは深く反省して、やっぱり街で住む人の、しかも女性の心など理解出来る筈はないのだと諦める。

「あ、道がなくなっちゃった」

切り開かれていた道がなくなり、トーマは一度立ち止まった。彼は、小川があるのは草木に閉ざされた向こうだと踏んでいる。

「モンスターと遭っちゃうかもしれないね」

「望むところだったっーの。出てこなきゃ話になんねえだろう」

「……嫌だなあ。僕、もう戦いたくないのに」

「ウツジウジしてんなや、それでも男かよ。オレはよう、お前のそーゆーところが気に入らないんだよね」

性格、と言うか性質なので仕方ない。直したくても直せない。第一、トーマは自分の性質を直したいとは思っていなかった。

「男のくせにとか、そういう言い方は好きじゃないんだけど。君だって、もつと女の子らしくした方が良いんじゃないのかな」

「……は、アハ。スカートでも穿けてか？」

「見た目じゃなくて中身だよ。ちよっと、あ、いや、あまりにも……」

……」

「アハハハっ、お前殺すよ？」

「笑いながら言わないでよ。怖いから」

マッドボアと出くわすのは嫌だが、見つからなければジユリと二人のままだ。どっちに転んでもトーマにとっては地獄のような展開が続く。彼は深く溜め息を吐き、草むらの先が村に繋がっていれば良いのにと夢想した。

赤毛のジュリ・2

マッドボアはトバの森に生息する、イノシシ型のモンスターである。このモンスターは体温調節や、外部の寄生虫を体から落とす為に泥浴、水浴を好むのだ。その為に水辺の近くに巣を作る。

トーマたちはマッドボアの牙を得る為、ジュリが見たと言う小川を探して森の中を歩き回っていた。

「そろそろ見えてくるんじゃないかな」

「あ？ どうして分かるんだよ」

トーマは草木を掻き分けながら、まっすぐに指を差した。

「臭いがする。水の臭い。それから、音も聞こえてこない？」

ジュリは疑い深そうに目を細めた後、つまらなさそうに首の骨を鳴らす。

「しない。何お前、豚か何かなの？」

「……違うよ」

「あつそ。まあ良いや、とつととモンスターぶつ殺しに行くとしようぜ」

「あつ、ちょ、ちよつと」

すぐそこに目的地があると言われて、ジュリはやる気を取り戻した。彼女はトーマよりも前に出て、雑な手つきで草を退かしていく。やがて、彼女らは開けた空間に辿り着いた。

「……へえ」

トーマの言った通り、そこには小さな川が流れている。切り開かれた道を通らなかつた為か、人の手が付いていない場所に見えた。

「ほら、言っただでしょ」

「偉そうに吠えてんじゃねえぞ。川を見つけても、マッドボアを見つけないや話にならねえんだからな」

ジュリは周囲を見回す。あるものを見つけて、彼女の表情は愉悦に染まった。

「見るよ」と、トーマはジュリに示された場所を見て不思議そうに瞬きを繰り返す。が、何かに気付いたのか得心したように頷いた。

「そっか、ここで泥を浴びてったのか」

「ヒヒっ、まだ乾いてねえぜこの跡。ツイてやがる、豚野郎は近いぜ」

「どうするの、ここで待ち伏せするの？」

「めんどくせえ、オレたちから会いに行こうぜ。ま、出会ったら出会ったらでモンスターは即、死んじまうだろうけどよ」

その自信はどこから来るのか。トーマはジュリを羨ましく思いながら、溜め息を吐く。

「じゃ、こっちから行くか」と、ジュリが草むらを指差した瞬間、がさりと物音が聞こえた。二人は息を飲み、立ち尽くす。

草むらから現れたのは、トーマとジュリを合わせたよりも大きく重そうなイノシシだった。茶色い毛は泥に塗れて、しかし牙はざらりと鈍い色を帯びている。縄張りに侵入したモノを見て、モンスターの鼻息は荒くなっていた。このモンスターこそ、トーマたちの求めていたマッドボア、である。

「あ、う……」

動揺するトーマをよそに、ジュリは川下に向かって逃げ出していた。

「そっ、そんなあ!？」

置いていかれた事よりも、これから自分はどうなってしまうのだろう。トーマはスコップを構えたが、

「――!」

「なっ、ざけんなよおい!」

マッドボアはジュリを追い掛け始めた。どうやら、動いたモノに闘争本能を刺激されたらしい。

水音を立てながら逃げ続けるジュリに、彼女を追い掛けるマッド

ボア。今なら自分だけは安全に帰られる。と、一度はそう考えたトーマだが、今にも殺されてしまいそうな人間を見捨てる訳にはいかない。同じ班の者なら尚更だろう。

尤も、走り出したのは良いのだが、足の速いジュリと、彼女を追い掛けるマッドボアには中々追い付かなかった。それどころか、背中を完全に見送ってしまう有様である。

「……と、途中で曲がれば良いのに」

トーマは息を切らしながら川を下っていく。恐慌の極みにあるジュリの叫びや水音は聞こえているので、まっすぐ進めば間違いはない。しかし、いつまで走り続ければ気が済むのか。

突風同盟の敷地内にある中庭、ここに設置された掲示板を睨み付けている者がいた。レオである。彼は鎧を着込んでおり、いつでも依頼を受けられるような状態であった。

「……ない」

しかし、レオが受けようとしていた依頼の紙はなくなっていたのである。彼よりも先に、誰かがその依頼を受けてしまったのだろう。「くうっ、このレオ・バーンハイトが先を越されるなど……っ！

……む？」

怒りに震えているレオの肩が叩かれる。彼が振り返ると、そこには同じ班のメンバーであるウェッジが立っていた。

「おお、射手ではないか」

ウェッジは自分が射手と呼ばれる事に慣れていないのか、少しだけ戸惑っているような素振りを見せる。

「どうした？　む。ところで射手、弓を持ち出してきているようだが、貴様どこかへ行っていたのか？」

ウェッジは首を横に振る。

「ふむ、つまり、今から出るところか。依頼を受けているのか？」

またもや首を横に振られた。レオはううむと唸り、

「ああ、そうか。今から依頼を受けるところだったのだな」

正解を引き当てた。ウェッジは首肯し、掲示板に視線を向ける。

「貴様も目当ての依頼がないらしいな。どうだ射手、俺と組みぬか？ このレオ・バーンハイトと組める機会など滅多にないぞ」

「……………構わない」

「ならば決まりだ。手近なところでバルボロ火山のドラゴンを狩りに行くでしょう」

ウェッジは急いで首を振る。手近どころか、二人で行っても道中で力尽きてしまうだろう。

「二人では心許ないか。では別の者にも声を掛けるとしよう。……………おお、都合が良い奴らがいたぞ」

レオが指差すのは、黒い屋根の寮に向かって歩いていくガラんたちである。彼だけではなく、自分たちの入団試験の際に試験官を務めたコビヤク、プリカもいた。見た事のない男が二人いるが、あの集団にいると言う事は彼らも腕に覚えがあり、認められた者なのだろう。

「……………班長たちを？」

「うむ、奴らなら腕に問題はあるまい？」

問題は別のところにある。どうやって言い聞かせようかウェッジは悩んでいたのだが、レオはとくに走り出していた。

「おい貴様ら！ 光栄に思うのだな！」

遅かった。ウェッジはうなだれて、事態の推移を見守る事にする。「おう、レオじゃねえか。どうしたんだよ」

「喜べガラん、今から俺たちは依頼を受ける。ふふん、貴様らを俺たちのパーティ、その末席に加えてやろうと言っているのだ」

レオの言葉を聞いたプリカは露骨に嫌そうな顔をして、彼に背を向けた。コビヤクたちは顔を見合わせて苦笑する。まるで相手にされていなかった。

「依頼ねえ。ま、頑張っているようで何よりだ」

「……………放っておけガラん、そいつの話を聞いていると苛々してくる」

「何だと女あ！ 俺の好意を無下にするつもりなのか！」

プリカは目を細めて、周囲に視線を向ける。

「……ん、トーマはいないのか？」

「ふん、今頃農民は野菜の皮を剥いているだろう。奴にはお似合いだな」

「……なら、私はこれ以上お前とは関わらない。御者のいない暴れ馬などモンスターと変わらんからな」

それだけ言うとプリカはさっさと寮に戻ってしまう。

「馬などどこにもいないではないか。良く分らない女だな」

「あー、レオ……」と、ガランは頭に手を遣りながら口を開く。

「依頼を受けるのは良い。まあ、俺も手伝ってやっても良い。で、何をするつもりなんだ？」

「ドラゴン退治だ」

ふざけるなとか、舐めてんのかためえなんて怒号が飛び交う中、ウェッジはその場をひっそりと立ち去った。

声が途絶えた。マッドボアのものらしき足音も聞こえなくなった。

トーマは辺りに気を配りながら、慎重に歩を進めていく。

「……おい、こっちだ」

振り返っても誰もいない。上を見ると、木の枝に腰掛けたジユリがいた。彼女は疲れた様子でトーマを見下ろしている。

「良かった、生きてたんだね」

「オレを勝手に殺すんじゃないよ」

ジユリはそこから飛び降りて、息を吐いてしゃがみ込んだ。トーマが見たところ、彼女は疲れているだけで怪我らしい怪我もしていない。

「急に逃げるから、モンスターもびっくりして追い掛けていったんだよ」

「チクシヨウあの野郎、次見つけたら切り刻んでやらあ」

「大口叩いてたけど、僕を置いて逃げ出したじゃないか」

「お前の足がおっせえんだよ。ちっ、あーあーめんどくせえなあ。もう帰っちまうか」

その意見には賛成だ。しかしと、トーマはモンスターの去っていった方に目を向ける。

「また戻ってくるんじゃないの？」

「その前に森から出りや良いじゃん。頭使えよお前」

ジュリは両腕を伸ばしてだるそうに歩き始めた。

「帰るんならそれで良いけどね。僕も恐かったし」

ぴくりと、ジュリは足を止める。トーマの言葉に反応したらしかった。

「『も』、じゃねえよ。恐がってたのはお前一人だろ」

「そっちだって恐がってたじゃないか。真っ先に逃げ出したくせに」

「……へえ、やろうつての？」

トーマは詰め寄ってくるジュリから距離を取る。

「やっ、やらないよ！とにかく早く帰ろうつてば」

睨み合い、やがて二人して歩き出した。ここで争っている事の無駄さに気付いたのである。

が、背後から近付いてくる狂暴な足音にトーマたちの体が固まった。

「じゃあな、生きてたらまた会おうぜ」

言って、ジュリは走り出す。トーマも後を追いつけるが、先に捕まるのは自分なのだ。ならばと、彼は立ち止まってスコップを構える。

「はああ！？ お前イカレちまったのか！？」

「違うよっ、僕は逃げ切れない。だから……！」

ジュリは立ち止まり、ナイフに手を遣って思考を巡らせた。足音は迫ってきて、泥塗れのマッドボアが見えてくる。トーマは覚悟を決めたらしく、前方を強く見据えていた。

「……っ、うつぜえ！ 逃げりや良いだろうが！」

「依頼を受けたんだろ。依頼は、約束なんだ。顔も見えないし、知らない人の頼みでも、でも叶えてあげなくちゃ！」

「きつ、た……！」

マッドボアがトーマを完全に捉えた。標的を見つけたモンスターは勢いを増して小川の水を跳ね上げる。

「う、わあああっ！」

スコップの腹にマッドボアの頭が激突した。衝撃に押し切られたトーマは弾き飛ばされて、小川に体を浸す。彼は必死に起き上がって、モンスターの追撃を躲した。

勢い余ったマッドボアは川底の石に足を取られてバランスを崩す。その隙を見逃さず、トーマがスコップを叩きつけた。

「——ッ！」

苦悶の叫びを上げ、マッドボアは体を揺さ振る。

「こんのお……！」

トーマが再度スコップを振り上げた。だが、がら空きになった腹にマッドボアの頭突きが入ってしまう。彼は短く呻き、体をくの字に曲げた。そこに迫るのは、モンスターの牙である。

「……うう」

眼前にある牙を見てしまい、トーマは目を瞑った。

「何やってんだよ！」

「ジュリっ」

マッドボアの腹に、ナイフの刃先が突き刺さっている。ジュリは柄を握る手に力を込めて、傷口を抉るように回した。モンスターは頭を上げて苦しそうに呻く。

「鈍くせえんだよお前」

「ごめん」と、トーマはジュリの隣に並んだ。

ダメージを負ったマッドボアは体を揺さぶるのを繰り返す。怒りに震え、敵であるトーマたちを睨んだ。

「どうするの？」

「決まってるだろ、殺すだけじゃねえか！」

ジュリは、向かってくるマッドボアの鼻先に足を当てて飛び上がる。

「ヒャッハウ！」

モンスターの背にナイフを突き入れ、腕を下ろしたまま駆けた。真一文字に肉を裂き、ジュリはマッドボアから飛び降りる。僅かに上がる血飛沫が、小川を朱に染めていた。

トーマはマッドボアをスコップの腹で押さえ付けて叫ぶ。その声に応えたジュリが再びモンスターの背に乗り、

「アハハハっ、じゃあなー」

マッドボアの頭部にナイフを振り下ろした。モンスターは死に物狂いの抵抗を見せるが、トーマは一步も引かない。

「まだ足りないよおっ！」

ジュリはベルトに提げていた鞘から二本目のナイフを引き抜いた。それを一本目の近くに深く突き立てる。マッドボアは痙攣を繰り返していたが、まだ息がある。

「ジュリい！」

顔面に返り血を浴びながらで、彼女は咆哮を上げた。モンスターの体の上だと言うのに足を天に向けて、ナイフの柄に踵を落とす。より強い力が加わって、肉を貫く鈍い音がした。

息絶えたマッドボアから牙を削り取ると、そこでようやく人心地がついたらしい。ジュリは小川の水で顔に付いた返り血を洗い流す。

「くそ、取れねえ」

「僕はもう諦めたよ。……それよりさ、これ持って帰っても良いのかな？」

トーマが指差すのはマッドボアの死体である。

「食べるのか、それ」

「うん、食材の足しになるかなあって。あ、大丈夫だよ、袋を持ってきてるから」

「……勝手にすれば？」

あんな重いものを一人で持って帰ろうなんてどうかしている。ジュリは呆れた風に溜め息を吐いて、足に違和を感じた。どうやら、先刻の戦闘で痛めてしまったらしい。

「依頼も終わらせたし、何だかんだで、何とかなったね」

トーマはモンスターを袋に詰め込み、それを両手に抱いた。

「それじゃあ帰ろうよ」

「……先に帰ってて良いぜ」

「えっ、と。どうして？ 同じ場所なんだから、一緒に帰れば良いじゃないか」

「ごちゃごちゃうるせえんだよ鳥かよお前。オレが帰ってんだから……」

ふと、トーマの視線がジュリの足元に向く。彼は不思議そうに小首を傾げた。

「足、何だか庇ってるように見えるけどさ、怪我したの？」

「誰かさんのケツを拭かされたせいだな」

「じゃあ、おぶっていいこうか？」

「はあ？」

トーマはマッドボアの入った袋を地面に下ろした。

「別に気にしないで良いよ。ほら、ギナ遺跡でも気絶した君を運んだんだし」

「嫌に決まってるんだろ。くっそだせえ事させんなっつーの」

「でも、放っておけないよ」

「良いから行けよ」と、ジュリは面倒臭そうに手を振る。

「もしかして、気を遣ってくれてるの？」

「んな訳ねえだろ。頭どつかおかしいんじゃないか？ 良いか、オレはお前に背負われるぐらいなら片足だけで帰る」

トーマは困った。陽の落ちてきた森の中で、ジュリを一人にする訳にはいかない。かと言って無理に背負うのは不可能に思われた。

「……じゃあ、やっぱり僕は君と帰るよ」

「はあ？ 付いてくるつもりかよ」

「だってほら、そうだよ。依頼の報酬、僕にだって分け前があっても良いじゃないか。独り占めはするいよ」

別に分け前は欲しくなかったが、捻くれ者の彼女にはこう言うのが一番だと、トーマは内心でびくびくしている。

「それとも、やっぱりおぶろうか？」

ジュリはトーマと自分の足を何度か見比べ、

「……………だせえから、やだ」

そっぽを向いて、ゆつくりと歩き出した。

トーマもジュリと同じ歩幅を保って、ゆつくりと歩く。

「疲れたら言ってね」

「何をだよ？」

「『オレを背負え』って」

「死んでも言わないから」

「遠慮しなくて良いのに。コレより重いって事はないだろ？」

「…………怪我治ったら刻んでやんよ」

「何を…………？」

踊る料理人

突風同盟の北寮にある食堂で、深刻そうに顔を伏せる者たちがいた。彼らの表情は一樣に青褪めている。

「……どうするつもりだ？」

震える声が、深夜の食堂に響いた。

「どうするつもりって……」

「どうもないだろ！ どうにも出来ないじゃないか！」

一人の男が椅子を倒さんばかりに立ち上がる。彼は顔を真っ赤にして、この場にいる全員の顔を見回した。

「このままでは我々の責任問題に発展しかねん。そうなれば終わらだぞ。腹を空かせた狼たちの前では、我々などただ食われるが為の羊ではない」

「しかし打開策は望めん。ただでさえ人手が足りないギルドの現状で、こちらにまで割いてくれるような人員がいるかどうか……」

「かと言って、外部から全くの部外者を呼ぶ訳にもいくまい。やれやれ、巨大な城を築くのは構わんが、動きが鈍重になってはかなわんなあ」

「私たちだけで状況を打破出来ないの？ 他の戦場に比べれば、私たちが相手をするのはまだマシじゃないかしら」

「……数だけで見ればの話だ。我々の相手は歴戦を生き抜いた古強者だぞ。彼らを相手取るなら、新兵百人に囲まれた方がまだ生きた心地がする」

「まあ待て、少しは楽観的に考えるべきだ。幸い、材料だけは揃っている。明日一日を耐え切れれば、援軍もやってくるだろうさ」

「全員が休みなしでか？ 馬鹿を言え、まともなローションも組まずに奴らと一戦交えようなどと、貴様は今までに何を学んでき

た。息の抜き方だけを小賢しく身に付けおつて……！」

殺伐としてきた空気に、皆が押し黙る。が、ここで最も若い男が口を開いた。

「あ、あの、要するに問題なのは人が足りないって事なんですよね？」

「……ああ、どう見積もっても五、いや、四人は足りない」

「僕が連れてきます。何とかしてみせます」

場が俄かにざわめいた。

「君にそれが可能だと？ 失礼ながら、一番若い君に信頼を置いている者は少ない。この苦況から逃げ出したいが為の一時凌ぎ、世迷言にしか聞こえないのだよ」

「そう思われるのは承知の上です。けど、ううん、だからこそ、僕は何とかしなきゃいけないんです。皆さんに信じてもらう為に、何よりも、僕自身が今をどうにかしたいから……」

「しかしだな」と、一人の男は食い下がる。が、他の者は若い意見に賛同したらしい。

「私は賛成よ。彼以外に案を持ち出す者もいないんだし、これ以上時間を使つても、明日に悪い影響が出るだけだと思うわ」

「俺もだ。いつまでも会議を踊らせていても仕方あるまい。何、若者に己の命運を託すのも分の悪い賭けじゃあないと思うがね。いつまでも年長者が出張つていては後進が育たない。はっは、早いところ安心したいんだよ、俺は」

「……むう、君たちがそこまで言うのなら。他の者も、彼に賛成するという事でよろしいか？」

男が尋ねると、ささやかな拍手が返ってくる。彼は頷き、全員を見回した。その後で、若い男に顔を向ける。

「正直なところ、若い君に全てを委ねるのは心苦しい。しかし、今の我々は君に頼らざるを得ないんだ。……情けない大人たちだと蔑んでくれても良い。だが……っ！」

「気にしないでください。僕がやりたいからやっているだけなんで

す。それに、皆さんにはいつも助けられていますから」
「うむ、ありがとう。それでは解散っ、明日の朝は早い。皆、遅刻しないでくれたまえ」

ガラン班に宛がわれた部屋には、いつもと同じような時間が流れていた。トーマを除いた三人はポーカーをしており、

「ぬあああっ！？ 何故俺が負けるのだっ！」

「お前向きのゲームじゃねえって。あーあ、カモがいちゃあスリルつてもんがないよなあ」

「……………同感だ」

レオが最下位になり、翌日以降雑用を命じられるのはもはや彼の日課とも言える。

「貴様ら、よもやグルか？ イカサマを使っているのではないだろうな？」

「アハハっ、てめえなんかにサマあ使うのは勿体ねえっつーの。なあ、顔隠してやればちったあマシな勝負になるんじゃないの？」

「黙れっ、くそっ、このレオ・バーンハイトに辛酸を舐めさせるとはあ！」

レオはベッドの上のトランプをぐちゃぐちゃに引っ掻き回して毛布を被った。

「オレのベッド使ってんじゃないよ！」

「農民には使わせておったではないか！」

「ぐ、う……………気のせいだから早く退けっ、マジでぶっ殺すぞ」

ウェッジは散らかったトランプを片付けながら、小さく息を吐く。
「ええい、煩わしい駆け引きなど俺には最初から不要なのだ。ナイフを抜け女、このレオ・バーンハイトがその剣ごと粉碎してくれるわ！」

「あー、うつせえなあ。一人でやってろよ単細胞」

「……………ただいま……………」

その時、何も知らないトーマが部屋に入ってきた。彼はレオとジユリがいがみ合っているのを見て、肩を落とす。

「少しは仲良くしなよ……」

「遅いぞ農民っ！ 見ておけ、今からこの生意気な女が俺に跪いて許しを乞う様を！」

「ヒヒっ、よう、田舎モン。お前も混ざろうぜポーカー」

「僕は……あ、いや、やろうかな」

「へえ？ 珍しいな、いつもは乗り気じゃねえのによ」

トーマはベッドの縁に座り、ウェッジが手慰みにシャッフルしているランプを見遣った。

「……………何か賭けるのか？」

「うっん」と、トーマは頭に手を当てた。何か考えているような素振りである。

「金だよ金、金賭けようぜ」

「その、お願いがあるんだけど」

目を伏せながらで、トーマはおずおずと口を開いた。

「明日、皆暇かな？ 付き合って、と言うか手伝って欲しい事があるんだ」

「却下だ。俺は自分を研ぐのに忙しい」

「オレはだからだらすんのに忙しい。パース、一人でやってろよ」

「そ、そんなあ」

「……………明日、何がある？」

見兼ねたウェッジがトーマに声を掛ける。

「う、その、実は人手を集めてて。ほら、黒い屋根の寮の食堂、明日忙しいんだよ」

「む。そう言えば、農民は料理人の真似事をしていたな。下っ端らしく使い走りをさせられている訳だ」

「厨房で風邪が流行ったらしくて、人が足りないんだ。お願いっ、明日だけで良いから手伝ってください！」

「……………良いだろう」と、ウェッジは躊躇わずに頷く。トーマは

ぱあつと瞳を輝かせた。

「あつ、ありがとうウェッジ！」

「……………俺は何をすれば良い？」

「うっん、仕込みかな。野菜を切ったり、後は洗い物とか」

「容易い事だ」

「本当に助かるよ！」

トーマとウェッジが二人だけで話しているのを見て、レオはつまらなさそうに彼らを見遣った。

「貴様ら、俺を無視するか。ふん、良い度胸ではないか」

「え？ あ、だって、来れない人に話したって……………」

「このレオ・バーンハイトを蔑ろにい！ その罪、万死に値すると知れっ」

「じゃあ、折角だから君も手伝ってくれないかな」

レオはぐぬぬと唸り、髪の毛を掻き毟った。

「農民の……………しかも下働きのような仕事、バーンハイトのやるような仕事では……………」

「皿洗いが嫌なら、あ、に、荷物運びとか。重いものを持つんだから鍛えられると思うよ」

「む、そんなのもあったのか。……………良からう、感謝するのだな農民。この俺が手伝う事など……………」

トーマは耳を塞いでお礼を口にする。少しぞんざいかもしれないかったが、お礼を言われた当の本人は気持ち良さそうにぺらぺらと喋り続けていた。

「良かったあ、これでどうにかなるよ。じゃ、明日は早いからもう寝ようかな」

「ちょ、ちよつと待てやコラ」

「……………」

立ち上がったジュリに、トーマは『どうしたの？ 何かあったの？』とでも言いたそうな視線を向ける。

「あー、アレだ。もう必要ねえのかよ？」

「必要って？」

「……………明日の手伝いの事を言っているのだろう」
ウェッジに教えられたトーマは、ああと手を打つ。

「だって、明日は忙しいんでしょ。良いよ、二人が手伝ってくれるんだし」

「……………へ、へえ？ 馬鹿にされてるみてえだな、オレは」

ジュリはこめかみをひくつかせながら、ウェッジの持っていたトランプを奪い取った。

「賭けだ」

「いや、僕は別に」

「賭けろってんだよ田舎もんが！ この際だかまわねえ青天井だろうがなんだろうがっ！」

「……………な、何起こってんのさ」

「む、またポーカーク。良いだろう、俺も数に入れろ」

「あつたりまえだろクソが。おら、四人でやんぞ。ルールは単一回勝負、一位の命令を全員が聞く事。良いな！」

熱くなるジュリを理解出来ずに、トーマはただただ首を縦に振る。

「……………リフルシャッフルはカードを傷めるぞ」

ジュリが山をシャッフルし、カードを配っていく。

「女、チェンジは？」

「一回切りだ。コールはなし。役のつええ奴が勝ちだからな」

「……………ポーカークでなくても良かったのではないか？ 三枚変える」

「気分だよ気分。オレも三枚」

「ふははっ、ならば俺はオールチェンジだ！」

トーマはレオが高笑いしたのを申し訳なさそうに見つめた。

「……………田舎もん、お前は何枚変えんだよ」

「あ、と、僕は変えない、かな」

「貴様っ勝負を舐めているのか？」

「そんなつもりはないよ」と、トーマは五枚のトランプを裏にした

ままで、ベッドの上に並べる。

「ほう、他者に配られた運命に頼るか。自らの手で、新たな道を切り開けるかもしれんと言うのに」

「あとはオープンするだけだ。オラ、全員見せな」

四人が手札を表にした。瞬間、ウェッジは絶句し、レオは喚く。

「へえ、珍しいもんが見れたぜ。……文句なしにお前の勝ちだな」

文句が出る筈がない。トーマが示した役は、ロイヤルストレートフラッシュだった。

「……………初めて見たな」

「あ？」

レオの喧しいいびきと、トーマの規則正しい寝息が聞こえる明かりの落ちた部屋で、ウェッジは呟いた。先の結果が未だに信じられないのだろう。……否、信じていないのである。

「ま、出る時や出んだろ。確率はゼロじゃないんだからさ」

ウェッジは体を起こして首を横に振った。

「……………ゼロだ。ジュリ、君がカードを配ったのだからな」

「どういう意味だよ」

「……………君ほどの者があのような役を許す筈がない」

ジュリは口の端をつり上げて、ウェッジを流し見る。

「アハ、その言い方だと、オレがイカサマしてるみたいじゃん」

ウェッジは意味ありげに笑った。

「……………不器用だな」

「ああ？」

「混ざりたいのなら、素直に言えば良い」

「お前、頭沸いてんじゃないの。意味が分かんないよ」

「……………君はイカサマを使った。トーマにな。彼が勝てるようにカードを配ったのだろう」

「はっ、くだんね。決め付けてんじゃないよ」

ジュリは寝返りを打ち、ウェッジから顔を背ける。

「……………俺も人の事は言えないか」

「ああ？ 何か言ったか？」

「何もない」と呟き、ウェッジは瞼を閉じた。

朝、ガラン班の四人は瞼を擦りながら北寮に向かっていた。

「……………農民、やはり、俺は、無理、だ」

「クソがふらふら歩いてんじゃねえぞ。邪魔だ、邪魔」

「では、お言葉に、甘えて、俺は帰る」

「か、帰らないでよ。ジュリ、そういう事言わないでよ」

「うるせエ馬鹿」

特に、朝に弱いレオは悲惨である。平生の彼からは想像の出来ない状態になっていた。髪の毛は跳ね放題で、足取りはどこか覚束ない。まだ夢から覚めていないのか、ぶつぶつと、何事かを呟いている。

「……………危険だぞ」

「うつん、まあ、そろそろ起きると思う。それに、起きたら起きたでうるさいと思うよ」

「ヒヒッ、同感だな。いつそどっかに沈めちまおうぜ」

寮の入り口近くにはコックコートを着た痩身の男が立っていた。

「あつ、イジーさん！」

「おおつ、トーマ君」

イジーと呼ばれた男が手を振って答える。

「……………トーマ、彼は？」

「うん、突風同盟の料理人さんたちを仕切ってる人、なんだってさ」
「コック仕切ってるぐらいで偉そうにしてんじゃねえっつーの」

「……………ジュリ、そんな事を言ってられるのも今の内だけだよ」

真剣な表情でトーマが言うので、ジュリは少しだけたじろいだ。

「どういう意味だよ。お前、まさかあんなガリガリ野郎にオレが負

けるとでも……」

「トーマ君つ、と、他の皆さんも駆け足だ!」

「は、はいっ、今すぐに!」

トーマが慌てた様子で走り出し、三人も後に続く。

三人とも、この時はまだ気付いていなかった。突風同盟の食堂を任される者たちの事を。そしてまだ知らない。入団試験よりも、ゴブリン討伐よりも、何よりも恐ろしいモノの正体を。

「……………思い出したくない」

彼は顔を背けて、その場を立ち去った。

厨房は戦場と化していた。

と言つても、決して激しくはない。誰も彼もが押し黙り、目の前の仕事に埋没し切っている。一触即発、触れれば破裂してしまいそうな、ぴりぴりとした空気がここを満たしていた。

「……………あちいな」

「火を使っているからね。それじゃあ、着替えてきてくれ」

コックたちは厨房に入ってきたトーマたちを一瞥すると、すぐに作業へ戻った。

「着替え、だど?」

レオがイジーを睨む。睨まれたイジーは肩をすくめ、トーマを見つめた。

「トーマ君、大丈夫なんだろうね?」

「え、ええと、多分、大丈夫、です」

「屈辱だ。このレオ・バーンハイトが、あのような……………っ!」

彼は立ち上がり、声を荒らげた。

「それじゃあ、トーマ君はいつも通りに。えーと、ジュリ君は野菜の皮むきを、ウェッジ君は料理が出来るんだったね？　すまないが、遅れている者の援護に回ってくれないか」

トーマとウェッジは頷き、ここまで来ては逆らう気もなくしてしまったのだろう、ジュリも仕方なさそうに頷き、持ち場に入った。

「……ふう、これで何とかかな」

「おい、貴様……」

「ん？」

イジーが振り向くと、こめかみをひくつかせ、握った拳を震わせているレオがいた。

「俺は、何をすれば良いのだ。わざわざ来てやったと言うのに、この……っ」

「あー、えーと、そうだねえ」

正直、イジーは困っている。トーマから聞く限り、レオと言う少年は料理はおろか、家事ですらもとにやった事のないどこかの国のお貴族様らしいのだ。厨房の仕事を任せる訳にはいかない。かと言って連れてきてくれたトーマの手前、レオに何もやらせない訳にもいかない。

「貴様口が利けないのか！？　俺はっ、何を、すれば良いのだっ」

「あ、あのー」

その時、一人の料理人がイジーの傍に近寄る。

「どうしたんだ？」

「いや、実は、食材が少し足りないらしくて……」

「何が足りないんだ？」

「肉が……」

料理人はコック帽を被り直しながら、申し訳なさそうに言った。

「肉が？　困ったな……あ、そうだ」

イジーはレオを見遣り、人の良さそうな笑みを浮かべる。

「レオ君にはお使いを頼もう」

「なっ、こ、この俺が、使いを、だと……？」

「お使いも立派な仕事だよ。君がやらなければ、全ての作業が滞ってしまうからね。そう、言わば君がリーダーだ」

レオは眉根を寄せて、リーダー、と口の中で繰り返した。

「そう、君がリーダーだ。レオ・バーンハイト君」

「ふ、ふふ、ふはは」

低く笑い、やがてレオの笑い声は大きくなる。

「ふははははっ、そうか！俺がリーダーか。良いだろう、遣いぐらい容易くこなしてやろうではないか。ドラゴンの肉だろうが何だろうがこのレオ・バーンハイトが見事持って来てやろう」

「助かるよ。それじゃあ、はい。これがお金で、このメモに書いてある場所へ行つて、書いてあるものを買ってきてくれるかい」

「無論だ。では、行ってくる」

厨房を出て行つてからも、彼の笑い声は止まなかった。

「アホだなあいつ」

野菜の皮を剥いていたジュリが呟く。彼女の隣で同じ作業をしていたトーマは頷き掛けた。

「起きたばかりで頭が動いてないんだと思うよ」

「起きてる時と変わらねえだろ」

「そうかなあ」

「そうじゃねえか」と、ジュリはナイフをくるくると弄ぶ。

自分よりも上手いと、トーマは彼女の手捌きに感心した。そして少し嫉妬もする。

「……何だか、慣れてる感じがする」

「ああ？」

「料理とか、するの？」

ジュリは皮を剥いた野菜をかごに投げ入れて、トーマを睨んだ。

「悪いかよ」

「うっん、全然。良いなあ、僕、あんまり器用じゃないから」

「見りや分かる。お前アレだな、絶望的にグズだもん」

まだ厨房に入っただけりだと言うのに、ジユリはかなりの仕事量をこなしている。彼女のかごに積み上げられた野菜を見ると反論出来ないで、トーマは口をつぐんだ。

「こんなもん早く出来たって大した意味はねえよ。こういうのはな、テキトーにやってんのが一番良いんだ」

「良くない考えだと思うけどなあ。一生懸命やった方が後で役立つよ」

「立たねえから言っただけバーカ。つか、何？ お前さ、働いた事とかねえの？」

「あつ、あるよ」

ジユリは口の端をつり上げて、愉しそうな笑みを作る。

「へえ？ 何、森の中で動物追っ掛け回してたワケ？」

「それもあるけど。色々やってたもん、僕だって働いた事ぐらいはあるさ」

「じゃあ才能がねえんだな。諦めれば？」

「……料理だけは、母さんが手を出すなって」

「『うん、分かったよママ』」

「そんな事言っただけよ、と言うか僕の真似しないでよ！」

トーマが怒ったので、ジユリはげらげらと声に出して笑った。

「母さんの趣味、みたいなものだったからだよ」

「あつそ。聞いてねえし」

悔しいが、騒がしくしているのを他の者に見られたのでトーマは耐えようと決意する。

「……どっか行けば良いのに」

「あ？」

「何でもないよ」

踊る料理人・2

「うつせえボケが黙ってる。……何、その目、鳴かされたいの？」
彼女は獰猛な笑みを見せたが、その姿を認めるとナイフを持った腕を力なく下ろした。

時間が経つに連れて、食堂が騒がしくなり始めた。誰が来ているのだろうと、トーマは顔を上げる。が、彼の位置からでは食堂の様子が確認出来ない。

「何か、騒がしくなってきましたね」

「今日は団体さんがお見えでいらっしやいますからねっと。ほら、よそ見しないで仕事、仕事」

通り掛かったコックにぽんと頭を叩かれ、トーマは申し訳なさそうな笑みを浮かべる。

「良い身分じゃねえかよ。オレらが汗みずくになって働いてるってのにさあ」

「……サボってるの、言いつけるよ」

ジュリは他の者から死角になっているところにしてしがみ込んでいた。

「べつつにい？ 勝手にすりゃあ良いじゃん。つーかオレはお前より働いてんだからさ、文句言われる筋合いねえだろ」

言い返せず、トーマは野菜に目を落とす。

「誰だよあいつら、うつせえなあ」

「ザッパさんって人の班らしいよ」

「あ？ 多過ぎねえ？」

ジュリはそつと顔を出し、食堂の様子を覗いた。ザッパ班の人数

は三十を超えている。若い男が多く、酒も入っているらしく、迷惑を気にせずに騒いでいた。

「ザッパってのは、あのハゲか」

一人、黙々と料理に手をつける壮年の男がいる。禿頭の巨漢、シヤツを着ているが、はちきれんばかりの筋肉が見て取れた。ジュリは彼を見て喉を鳴らす。

「風格あるじゃねえか。ウチのデカブツよりもでけえ」

「ハイゴ布林を一人で倒せるくらい強いって聞いたよ」

ザッパ班は突風同盟の中で最も人数が多い。通常、一斑は四、五名で形成されるが、ザッパ班だけは別である。ザッパの人柄、武勇に惹かれ、慕う者がそれだけ多いのだ。彼は自らを慕う者たちを引き入れて面倒を見てやっている。それでも、全員を班に入れる事は叶わなかった。

「……………選りすぐりと言っただけだ」

「わ、ウェッジ。……………君もサボリ？」

ウェッジは首を横に振る。

「……………ザッパ班には強者が揃っていると聞いた。だから、ああやって好きに騒げるのだろう」

トーマは思わず頷いた。今日、厨房が追われているのはザッパ班のせいなのである。彼らはダンジョンから戻り、食堂で宴を開いている次第だ。が、料理人たちにとっては厄介なメンバーである。

「すっごい良く食べて、飲んで、騒いで帰るんだって。夜中まで」

ジュリは露骨に嫌そうな顔をした。彼女はナイフを手で弄び、食堂で喚く男へと投げる振りをする。

「冗談でもやめときなよ」

「ヒヒっ、じゃあマジでやっちゃまうか」

「……………しかし、これが夜中まで続くのかと思うと、な」

感情を表に出さないウェッジにすら疲労の色が見えていた。

「あいつら、どこまで行ってやがったんだ？」

「セイテン海岸って言うてたかな」

「三つ目じゃん。大した事ねえなあ、そんであんなえばってんのかよ」

トーマは溜め息を吐いた。この二人、そろそろ仕事に戻ってはいくれないだろうか、と。しかし、ジユリたちにその気はなさそうである。

「あ、こら何サボってんだ新入り！ バレない内に作業場に戻れって」

カウンターへと料理を運ぶ為、通り掛かった者がトーマたちを見て焦ったように言う。ウェッジは仕方なさそうに元いたところに戻っていったが、ジユリは気だるそうに、嫌そうにしゃがみ続けている。

「ちょ、ちよつとジユリ」

「あーあーあー、ヤメヤメ。かつたりいったらねえぜ。くっだらねえ、いつまで皮剥きや良いんだよ」

「じゃあ、次はこいつを切ってもらおうか」

話を聞いていた別の者が、ジユリの作業場にかごを置く。皮剥きの終わった野菜が山積みになっていた。

「ザッパさんところの人たちだから、適当に切つといてくれてオツケーね。あ、終わったらあそこにもまだまだあるから」

ザッパ班の面々には酒と肉が行き渡り、宴の熱も上がっていくばかりだった。無論、突風同盟の食堂である。彼らだけの貸し切りは出来ない。食事をする為に、他の者も席を埋めていく。昼時、忙しい時間だった。

「給仕、ですか？」

トーマは作業の手を止めないまま聞き返す。

「ほら、酒が大分回ってきてるから、ここまで取りに来られないんだよ」

「や、あの、でも……」

厨房にまで聞こえてくる荒々しい声に、トーマはすっかり萎縮していた。

「だったら、君はどうかかな？」

「……あ？」

指差されたジューリはぶつきら棒に対応した。

「一応女の子だしさ、トーマ君が行くよりもあちらさんは喜ぶと思うし」

まずいと、トーマは息を呑む。有り余った力、切られた野菜が床に落ちた。案の定、ジューリの機嫌は悪くなっている。

「てめえ、オレにウエイトレスやれって言ってるのかよ。ハッ、おもしれえ、良いぜ。そんなし、食堂がすこし汚れっちまうかもな。ああ？」

「……あはは、火に油を注ぐつもりはなかったり。代わりを探すよ」
「ちっ、胸糞わりい」

落ちた野菜の欠けらを蹴飛ばすと、ジューリは包丁をまな板に突き刺した。

「……そんなに給仕さんが嫌なの？」

「愛想振りまくなんざ性に合ってないっつーの」

確かにそうだ。笑顔を振りまくジューリが想像出来なくて、トーマは小さく頷く。

「人には向き不向きあるもんね」

「したり顔で抜かしてんじゃねえぞ」

「戻ったぞ！」

厨房の裏口、その扉が勢い良く開かれた。

「レオ・バーンハイトが戻ったぞ、者ども俺に礼を述べよ！俺を讃えよ！」

ブロック状に切り分けられた肉を掲げ、レオは大音声上げる。殆どの者たちは無視していた。

「野郎、初めてのお使いかよ。どれだけ時間掛けてやがるんだ」
ジューリは毒づき、トーマは何も言わなかった。

食材が届いた事により、厨房が慌ただしくなる。トーマは野菜の皮を剥く傍ら、出来上がった料理をカウンターに運んでいた。

「ん」

「あ」トーマはその人物を思わず見つめてしまう。

カウンターへ料理を取りにきていたのはプリカだった。彼女はシヤツとズボンだけの、飾り気のない格好である。尤も、休日のプリカは大概、こうだった。

「そうか、厨房に入っていたんだな。どうだ、もう慣れたのか？」

「はい。けど、えーと、今日は……」

トーマの視線を追い、プリカは納得したように苦笑する。

「ザッパたちが帰った次の日はこんな感じだよ。特に、今日はいつもましてうるさいけどね」

「そうなんですか？ ……弱ったなあ」

「これくらいで音を上げてちゃ店なんか持てないぞ」

「あ、そうじゃなくて、その、料理をあそこまで持っていくのが……皆恐がっちゃって」

プリカは首を傾げる。そも、食堂には最初から給仕がないのだから、ザッパ班のメイティを確認して頷く。

「なるほど、そういえば、前にも誰かが運んでるのを見た事があるよ。今日はそいつ、いないのか？」

「間が悪くて、今日は他の人もお休みらしいんです」

「ふうん」呟き、プリカは厨房の中を覗く。誰も彼もが忙しそうに駆け回り、必死の形相で料理を作っていた。その中に、どうしようもない奴を見つける。彼女が捉えたのは、偉そうに仁王立ちしているレオだ。

「役立たずが立ってるじゃないか」

「レオはさっきまで買い出しに行ってくれてたから、もう良いんです」

プリカは考える。朝食だけは食べに来たが、今日は別段予定はな

い。街を冷やかに回ろうかとも思っていたが、

「プリカさん、どうかしました？ あ、忙しくても手は抜いてませんよ。絶対においしいですから！」

「なあトーマ、イジーはいるかい？」

たまには、変わった事をするのも良いだろうと、そう思った。

「いや、やっぱりこうなるのになって思っていました。……あの、いつも怒らない人が怒ったら、それだけで、あのう」

彼は声を震わせて、これ以上は何も語らなかった。

トーマはちらちらと食堂を見ていた。そのせいで作業は中々進まず、隣にいたジュリに睨まれてしまう。

「てめえ、オレにはああだこうだって言ってるのにさ、やってくれるじゃん。何だよ、そんなにあのアマが気になんのかよ」

ジュリが指すのはプリカだ。彼女は給仕役を買って出て、先程の服装の上にエプロンを着ている。笑顔こそ見せないが、仕事はきちりとこなしている様子だった。ザッパ班の連中も、相手がプリカという事もあって調子には乗れないようである。

「大丈夫かなって、そう思ったただだよ」

「馬子にも衣裳ではないか。あの女も、ああしていればらしく見える」

レオは仕事をせずに邪魔ばかりしていたので、出ていかないのならせめて、と、トーマたちの傍にいますよう命じられていた。彼は食堂の椅子を持ってきて、今はそこに座っている。

「しかし愛想が足りんな。バーンハイトの家ならその場で打ち首にされてもおかしくない。教育の必要がある。そう思うだろう、農民」

「え？ いや、でもプリカさんは君んちのメイドさんじゃないよ」

「はっはっはっ、いずれそうなるかもしれん」

「さつきから口しか動いてねえぞてめえら。芋の代わりに切られたくなけりや黙ってるよ」

ちなみに、ウェッジは昼を越えた辺りで倒れてしまった。彼は今、控え室で寝かされている。

「つーか、あいつらいつまで飲み食いしてやがんだ。こっちは何も口に入れてねえってのによ」

「うむ、その通りだ赤毛。バーンハイトの長子たる俺にこのような仕打ち！ 報いは必ず受けてもらおうではないか」

「二人はさつきから摘み食いしてるじゃないか。ばれても知らないよ」

「うるせえぞ田舎もんが」

言いつつ、ジュリはずかずかと歩き、カウンターに置かれた皿から焼いた熊肉を摘む。

「おっ上品な味付けだぜ。もつと甘っ辛くしても良いんじゃないの」
「俺は薄口が好みだ」

トーマは溜め息を漏らし、食堂から視線を外す。瞬間、何かが割れるような音が聞こえた。厨房内にいる者たちはその音を聞いていたが、わざわざ確認しに行くほど暇ではない。

「うーわ勿体ねえ」

「あ……」

ザッパ班の男が皿をテーブルから落としてしまっていた。プリカは何か言いたげだったが、わざとではないので口は出さない。

「……誰か、ちりとりと箸を」

厨房からウェッジが姿を見せる。彼は状況を理解して、掃除用具を取ってくる為、再び控え室へと戻った。

「ぎゃっはっはっ、おいおいもう酔っちまったのかよ!？」

「酔ってねえーようるせえぞデブが!」

「ああ!？」

「やんのかてめえ!」

立ち上がった男たちへ野次が飛ぶ。が、一言も発していなかった

ザッパが彼らを睨んだ。それだけで、班員は決まり悪そうに黙り込んでしまう。

「……喧嘩するなら外でやれ。食堂内での戦闘行為はご法度だろう」
低く、深い声に諭されて、立っていた二人は席に戻った。

「……盛り下げてしまったか。しかし、ルールはルールだ。お前ら、守れるな？」

野太い声が揃う。宴は再開された。その様子を見ていたジュリは舌打ちする。

「解散すんのかと思ったぜ」

「あの、仕事しようよ……」

「るっせえボケが」

発端は思わぬところからだった。ザッパ班も当分は大人しくなるだろうと、誰もが思っていた。それは、班の者たちも同様である。

「おい姉ちゃん、ちよつと酌してくれよ。おら、ザッパさんに注い
つて言ってたんだ」

ちり取りが見つからなかったので、代わりにバケツを持ってきた。
ウェッジは食堂に戻ると、目を擦って厨房に戻る。

「……………何があった」

と、トーマに尋ねるが、彼は一心不乱に野菜の皮を剥いていた。
カウンター越しに食堂を覗けば、やはり先ほどと変わらない。プ
リカがザッパ班の男を殴り飛ばし、レオとジュリもそこに入り混じ
って乱闘に加わっていた。椅子と怒号と罵声と野次が飛び交い、料
理人たちが逸れた者を袋叩きになっている。関係のない者も殴り合い
に参加していた。

思うところがあったのだろう。溜まりに溜まったものが爆発した
のだろう。ザッパ班の鈍ちゃん騒ぎに腹を据えかねたのだろう。ウ
エッジは巻き込まれないように身を縮める。厨房の中に皿が飛んで
きた。

「このレオ・バーンハイトを恐れぬならば掛かって来い愚民ども！」
「おいあのでかいのを引き摺り下ろせ！」

「ザッパ班を食堂から追い出せー！」

「やれっ、囲め囲め！ あっ、おいそつちにチビが行ったぞ！」

「アハハハハっ、追いつけるもんなら追いついてみるよウスノ口！」

「逃がすなオラア！ まとめて相手してやるってんだよ！」

阿鼻叫喚、地獄絵図。その中で、一人の男が椅子を引く。ザッパだ。彼はプリカを瞥見した後、すうと息を吸い込み、雄叫びのような声を放った。しんと場が静まり、全員が耳を押さえる。

「ふん、声と図体は相変わらずだな」

プリカに冷たく言われるも、ザッパは済まなさそうに黙すだけだ。彼は班員を見回した後、解散、と、一言だけ告げる。

「ざっ、ザッパさん！？」

「ちよつと待つてくださいよ！」

ザッパ班が引き上げ始めた。残されたのは厨房のメンバーと、荒れ果てた食堂。

「……………ん」

ウェッジは振り返る。底冷えするような、極上の殺意が彼の背後に立ったのだ。ウェッジはその姿を認めて、ごくりと唾を飲む。終末が来たのだと、心のどこかで思った。

「お、おしまいだ……………」

トーマは震えている。彼は、その存在を知っていたのだろう。だから、耳を塞ぐ。

食堂での戦闘行為を禁じたのは、料理長のイジーではない。イジー以外の、全員だ。突風同盟の暗黙のルールとしていたのである。理由は、彼がそれを許さないだろうから。そして、怒らせてはならない存在だったからだ。

誰かが悲鳴を上げる。次いで、料理人たちが一斉に謝罪の言葉を叫んだ。乱闘に参加していたガラン班の二人は顔を見合わせ、ジュリはへらへらと、おかしそうに笑う。

「ああー？ コツク如きが調子に乗ってんじゃ……って、おい。やめっ、てめえこらなんてもん持ってやがる！」

「うっ、おおおお！？ 貴様本当に人間かつ、こちらに来るな！こっ、この俺が！ レオ・バーンハイトがああ！？」

ウェッジは目を伏せた。とてもじゃないが見ていられない。彼はトーマの肩を叩き、首を横に振った。

「イジーさん、イジーさん、駄目です！ それを使ったら死んじゃいますって！」

「殺されるかと思った」

彼女はエプロンの裾を握り締めて、それきり口を開かなかった。

後日、ガラン班、プリカ班、ザッパ班の面々は食堂の五日間の利用禁止を言い渡された。誰一人、抵抗しなかった。

赤い海岸線

黒い雲が風に散らされていく。太陽が顔を出し、地表には日光が降り注ぐ。

「おお、絶好の日和ではないか」

不規則に揺れる馬車の出入り口から、レオが顔を覗かせた。眩しそうに目を細め、快活な笑みを見せる。彼は馬車内を見、頭から毛布を被る者を揺さぶった。

「起きろ農民、いつまで眠っているつもりだ！顔を出してみる、潮風が香っている！」

「だから何だつてんだよ。畜生、くせえし髪がべたつくぜえ、おい」
ジュリは気だるそうにあくびを一つ。彼女はうるさくなったレオを見遣り、目を瞑った。

「ガラン、貴様もだ。班長であるなら率先して嬉しそうにしたらどうだ！」

何も見ず、何も感じず、この時間をやり過ごそうとしている者はトーマ以外にも一人いる。ガランだ。彼も馬車には弱く、不機嫌そうにレオを睨んでから再び毛布を被ってしまう。

「軟弱な。男子たるもの馬車の一つや二つ乗りこなさないで如何とするつもりなのだ」

ウェッジは黙々と本の世界に没頭していた。彼も、馬車はあまり好きではなかったのだが、トーマとガランを見て、不思議と落ち着いていた。自分よりも死にそうになっている者を見たせいだろうか。ウェッジは頭に手を遣り、ページを捲る。

「腹が減った！昼餉を持てい！」

ガラン班が向かっているのは、セイテン海岸と呼ばれる場所だ。そこまでは街から馬車で数時間掛かる。白浜と青海が広がる、景観の美しい海岸だ。

だが、トーマたちは物見遊山で訪れた訳ではない。れっきとした依頼を受けて、セイテン海岸にやって来たのである。

依頼主は、突風同盟のザツパだ。先日、食堂でガラン班といざこざを起こした、くだんの男である。彼が同じギルドの者に依頼をしたのには理由があった。外部の者、別のギルドの人間に知られたくない内容のものだから、である。

セイテン海岸にはある時期にモンスターが大量発生する。その時は、白い浜も、青い海も真っ赤に染め上げられる。そのモンスターを駆除しに行ったのがザツパ班だった。しかし、彼らでは手が足りないらしく暇を持て余していたガラン班が援軍として呼ばれたのである。

「出来ねえもんを引き受けんじゃねえっつーの」
あくびをして、ジュリは目を擦った。

「受けたものは仕方ねえよ。……一応、ウチは大手だからな。よそのギルドに醜態晒す訳にはいかないって、ザツパは判断したんだろう」

「……………誇りか」

「誇りで飯が食えりや良いんだけどな」

ガランが寝返りを打つ。彼の顔色は悪いが、話をして気を紛らわそうとしているのだろう。

「誇りを持つのは男として当然であろう。しかし、実力の伴わない誇りとは厄介なものだな」

「金がもらえるんなら何でもするけどよ」

馬車の速度が落ちる。馬が嘶き、車内が強く揺れた。毛布が剥がれ、トーマが頭を抱える。彼は今にも泣き出しそうだった。トーマの顔色を見て、レオは鼻を鳴らす。

「情けないぞ農民っ、今から戦闘を行うと言うのになんだその意気

は！」

憤ったレオはさすがと歩き、トーマに近付いた。

「……………よせ、辛そうだ」

「ええいうるさいぞ射手！ こいつは俺の臣下なのだ、下の者がこうでは上に立つ俺の器も測られるというものよ！ さあ立てっ」

ウェッジは溜め息を吐き、本に栞を挟む。トーマには可哀想だが、モンスターとの戦闘が始まるのは確かだ。いつまでも寝ている訳にはいけないのである。

御者である、ザッパ班の男が指を指した。その方向に目を遣るまでもなく、ガラン班にはセイテン海岸の状況が見えている。海岸線は赤く染まり、砂浜が僅かにその色を覗かせているだけだ。

その光景を見たトーマは蹲る。

「……………何か、いつぱい動いてる……………」

「む？ そうか？ 俺には良く見えん」

馬車から降りたガランは辛そうにして頭に手を当てた。御者に話し掛け、状況を確認しているらしい。彼らを横目に見ながら、他のメンバーは赤い海岸を物珍しそうに眺めていた。

「……………カニ、か」

「カニだあ？ 何だよ、あの赤いの、全部カニなのかよ」

「俺には何も見えんぞ。あれはカニなのか？」

「目がぐるぐる回って……………」

コウグンガニ。それが、セイテン海岸に大量発生しているモンスターだ。体長はばらばらで、三十センチから、一メートルを超えるものもいる。どこからともなく出現し、ひたすらに移動するのがこのモンスターの特徴だ。行軍、その名の由来はここから来ている。が、コウグンガニに目的地はない。ただ、進むだけなのだ。

「なあ、アレって食えんのかよ？」

ジユリが言うと、ガランは嫌そうな顔をする。彼は手を振って、

否定の意を示した。

「食えたもんじゃねえよ、まずい。アレを食うなら海水飲んで腹膨らました方がマシだ」

食用にならないのもあって、コウゲンガニは人間にとって厄介なのである。尤も、コウゲンガニは共食いをする。彼らは仲間の骸を喰らいながら移動を続けるのだ。進路上の者に集団で襲い掛かる習性も持っていて、放っておけば町までやってくるかもしれない。

「ザッパからも話を聞きたいところだな。あいつは今どこにいるんだ？」

「恐らく、最前線に」

御者が答える。ザッパは班の長として、モンスターの進軍を阻むべく前線に立っていた。彼から詳しい話を聞き出すなら、海岸まで足を運ぶ必要がある。ガランはそう判断して、装備の確認を始めた。「馬がびびつちまうから、こっからは歩きで行くぞ。全員、必要なもの馬車から降ろしとけ」

「馬車で突撃すれば良いではないか。甲殻類など一網打尽に粉碎してやれば良い」

「途中で足が止まっちゃうっつーの。それに、俺とトーマを殺す気か」

トーマは頷き掛けるも、口元を手で押さえてしゃがみ込む。

「情けないぞ農民！」

「さっきからうるせえんだよデカブツが！ でけえのは声と図体だけじゃねえか、ガタガタ抜かしてんならさっさとイってこいや」

「喧嘩すんならあっちでやれ。ついでに力二を潰してくれると助かるんだけどな」

ガランはだらだらとした所作で歩き出した。その足取りはやはり頼りない。トーマとウェッジが彼に続き、レオとジユリが先を競うように早足で海岸へと向かった。

海岸が近づくにつれ、ザッパ班とモンスターとの戦闘風景が明らかになってくる。

「おーおー、やってるやってる」

ガランは気楽そうに言つてのけた。そも、コウゲンガニは好戦的だが決して恐ろしい相手ではない。数が多いだけで、戦いは終始有利に進められる。移動が素早くもなければ、基本的には地を這うモンスターなのだ。備わった鋏に捕まる事も皆無であり、こちらの攻撃も当てやすい。ただ、中身を覆っている殻が少しばかり硬く、大量に相手をしているといつの間にか疲労が溜まっている。注意すべき点はそれぐらいのものだ。

やってきたガランたちに気付くと、禿頭の大男が得物である巨大なハンマーを下ろす。その際、コウゲンガニが下敷きになった。

「調子はどうだ？」

「旗色は良くない」

正直に告げて、ザッパはのしのと浜に足跡をつけていく。彼が傍まで近づくと、決して小さくはないガランの体が影に包まれてしまった。

「手が足りんな。今回は数が違い過ぎる」

「はっ、言い訳かよ」

ジュリが悪態を吐き、レオが彼女に乗っかる。ただでさえ余計な口を叩く二人だ、先日の食堂でのいざこざが尾を引いているのだから。

「重ね重ね済まないと思っている。どうか、協力してはもらえないだろうか」

「ジュリー、レオー、男が頭下げてるんだ。四の五の言わずに依頼を受けるよな？」

ガランに睨まれ、二人はつまらなさそうに舌打ちした。

「よし良い子だ。で、ザッパ、俺たちは何をどうすりゃ良い？」

「とにかくモンスターの数を減らして欲しい。交代で休みを取らせていたんだが、そろそろ限界だな。ここらで俺の班員には大休止を

取らせてやりたい」

「つまり、俺たちは休みなしでモンスターと戦えって訳だな」

ザッパは済まなさそうに頭を掻き、低く唸る。

「その通りだ。依頼を受けてくれるか、ガラン」

「ああ、最近はモンスターとも戦ってなかったしな、鈍ってた体を解すには丁度良い相手だろ」

班員にも同意を求めるが、誰一人して頷かなかった。トーマに至っては、話を聞いているのかどうかですら、定かではない。

「おーい、話聞いてんのかお前ら」

「ふん、無論だ。戦うのはやぶさかではない。良かろう、この俺、レオ・バーンハイトの力を庶民どもに見せ付けてやるとしよう」

レオが得物を担ぎ、コウグンガニに向かって歩いていく。

「おいっこらレオ！ 畜生あの馬鹿、何も聞かずに行きやがった。

…… 良いか、コウグンガニの甲羅は硬い。ウェッジとジュリは奴らの目を狙え。動けなくなったモンスターには別のモンスターが共食い仕掛けてくれる。先頭歩いてる奴から順に始末していくぞ」

「指図すんなボケが」ジュリは呟き、鞘からナイフを取り出し、くるくると回した。

ウェッジは無言で頷き、心配そうにトーマを見遣る。

「馬車に酔ったからって甘えんなよ。トーマ、お前はレオと同じだ。力があるんだから、思い切り甲羅をぶっ叩け。その二人が先に仕掛けるだろう、動きの止まった奴から仕留めていけよ」

「…… 分かりました。ガランさんは、どうするんですか？」

ガランは海岸の戦闘をじっと眺め、両手に剣を構えた。

「俺はザッパ班の援護だ。崩れそうなところを優先的に回っていく。正直、戦闘が始まったら指示は出せねえ。お前からでしっかりやるんだぞ」

「掛かってこいモンスター！ バーンハイトが長子っ、レオ・バーンハイトが貴様らの相手だ！」

「…… マジで、頼んだぞ」

ザッパ班の内、数人がコウグンガニとの戦闘から離脱していく。彼らの穴を埋めるかのように、ガラン班がそこに入った。

まずはレオが切り掛かる。が、彼は不思議そうに顔をしかめた。モンスターの甲羅を断ち割るのには成功している。しかし、思っていたよりもその感触は重かった。レオは人の話を聞かず、我意を押し通す。しかし、決して頭が悪い訳ではない。彼なりに物事を考えているのだ。

「なるほど、硬いぞ！」

「馬鹿がいやがる」

ジュリがモンスターの目玉を貫く。傷つき、動きが止まったコウグンガニに別のコウグンガニが襲い掛かり始めた。彼女はその光景を背に、別のモンスターの視界を的確に奪っていく。

コウグンガニの群れ、その先頭の動きが鈍くなり始めた。ウェッジとジュリがモンスターの目を潰しているからだろう。そこを、トーマが一体一体、着実に叩いていく。

「う……」

スコップから伝わる手ごたえと飛び散る体液。真っ赤に熟れた果実のような肉が見え、トーマは吐き気を催した。まだ始まったばかりで吐いてもいられない。彼は堪え、天を仰ぐ。真っ青な空は、今のトーマには清涼剤となり得た。

数は目に見えては減っていない。赤い絨毯が押し寄せてくる。足元にはモンスターの死体が転がっていた。

「キリがないな。俺の臣下は無事か!？」

返事はないが、同じ班の三人を確認してレオは満足気に頷く。ウェッジが矢をつがえ、その隙をトーマがフォローした。トーマの顔色は少しずつ良くなり始めている。彼は周囲に気を配れるようになって、ガランの姿を見た。

ガランはザッパ班に混じり、両腕に一本ずつ剣を持ち、巧みに使

いこなしている。彼の得物を振る速度は凄まじく、トーマではその動きに追いつけない。ガランは周りの者に指示を飛ばしながらも、モンスターを仕留めていく。

「ぼさつとしてんなよ田舎もん。カニなんかに殺されたくないやしっかりやつてるクズ」

「わ、分かつてるよ」

「……………ザッパ班には指示を出す者がいないのか」

言われて、トーマは改めてザッパ班の戦いぶりを確認した。それぞれがばらばらになってコウグンガニを相手にしている。班員同士の連係などはなく、個人の力量にのみ頼っていた。

「ハッ、力馬鹿は嫌いだぜ。あいつらがあんなだからオレまで駆り出されちまう」

「……………班長が入った事に期待するでしょう」

ウェッジはレオの死角に回っていたモンスターを射る。

「ジユリ、レオが囲まれそうだよ」

「知るか。あいつを呼び戻せば良いだろ」

だが、モンスターの群れ、その先頭集団と交戦しているのはレオなのだ。彼が退けばコウグンガニを止められない。レオ本人は知ってか知らずか、最も負担を強いられているのだ。

「ジユリが一番足が速いんだ。ここを片付けたら僕たちもそっちに行くから」

「……………お前の使い走りじゃねえんだぞ」

ナイフを鞘に納め、ジユリは孤軍のレオに向かう。彼女はコウグンガニの間を擦り抜けながら、別の得物を鞘から抜いた。

「ウェッジ、僕たちも上がってこっ。ガランさんたちに他は任せといてさ」

頷き、ウェッジは矢を放つ。彼は少しずつ後退りし始めた。トーマは進路上の敵だけを潰していく。追ってくるモンスターの相手をしながら、赤い絨毯、その突端を目指した。一番先まで行けば前方にのみ集中出来る。中程から上がってくるガランを含めたザッパ班

との挟み撃ちを狙っていた。

「遅いぞ貴様ら！ レオ・バーンハイトを放置して何をやってた！」

ジュリは片耳を手で塞ぎ、コウグンガニを足で引っくり返す。露出したのは柔らかな腹だ。レオはそこに剣を突き立てる。

「ほう、面白い。こういうやり方もあったのだな。でかしたぞ赤毛、さあ、どんどんひっくり返せ！」

ジュリはレオを無視して、コウグンガニの眼球をナイフで突き刺した。

仕方ないので、レオはしゃがみ込み、こつこつとモンスターをひっくり返していく。そこに、トーマとウェッジが合流した。

「……何をやっている」

「見て分らぬか射手。こいつらの腹は柔らかい。甲羅の上から叩くよりも効率的だ」

「お前さ、オレが考えたんだから我が物顔で言ってんじゃねえぞ」

「ならば使用料を払おう！ 農民、金貨を出せ！」

金貨を出すつもりはないが、良い方法に変わりはない。砂浜の上は、ギナ遺跡のようにしっかりとした床とは違う。ただ歩くだけでも億劫なのだ。戦闘となれば、疲労の溜まり具合は段違いである。無駄に体力を使うよりよっぽど良いと、トーマは判断した。

「何だか間抜けだけど」

ウェッジは無言で頷く。

「あ、そっちに行っただよ」

「俺に任せろ」レオはしゃがんだまま、ひょこひょことモンスターを追いかけた。

「……………しかし、先が見えないな」

トーマたちがセイテン海岸に到着してから、まだ一時間も経っていない。コウグンガニの数は減っているのだろうが、その成果は分かりづらかった。

「何を言うか射手、ゴブリンどもよりはマシだろう。こいつらは走

らないし跳びもせん。ただ地べたを這いずり回るのみ。我らに叩き潰されるのを待つだけの身だ！」

大仰な事を大声で言い放ち、レオはカニをひっくり返す。彼の台詞と言動が合致していないので、トーマは人知れず苦笑した。

正直、余裕はある。レオの言った通り、ギナ遺跡でのゴブリンたちの方が手強かった。それを考えれば、今は戦闘でもないのだろう。「皆、頑張ろう！」

「うるせえボケが勝手に言ってる」

辛辣な声が返ってきたので、トーマは黙った。

赤い海岸線・2

太陽は徐々に天頂を下り始めていた。

ザッパ班、ガラン班との共同で行われたセイテン海岸におけるコウグンガニの討伐も、既に三時間が経過している。トーマたちは小休止すらしで、モンスターの群れ、その先頭集団の移動を妨げ続けていた。

「……………限界だ」

一番に音を上げたのはウェッジである。彼はガラン班の中でも体力的に頼りなく、その上、恰好がまずかった。何せ日光の下で黒ずくめなのである。体温は上昇し、汗も止まらない。じわじわと体力は削られていく。

「だったら脱ぎなよそれ、暑くない？」

トーマは心配そうに声を掛けるが、ウェッジは首を縦に振らなかつた。ポリシーなのか、他に理由があるのか、それとも意地を張っているだけなのか、彼はマントを脱ごうとしない。

「足引つ張られるぐらいならよ、無理やり剥ごうぜ」

ジュリの言葉に、ウェッジはぶんぶんと首を振った。否定の意を示した後、きつちりと行動でも示す。彼の放つ矢はコウグンガニの目玉を貫いていた。

「本人が脱ぎたくないと言っているのだ。射手ならば、動けなくなるうとも攻撃は可能。そうして力を示している内は気にせずにいると良い」

レオはモンスターをひっくり返す地味な作業に飽きていて、力任せに甲羅を叩き切っている。その代わりに、自分たちをすり抜けていこうとするコウグンガニを、トーマが逃がさないようにしていた。彼はスコップで叩くより、こっちの方が性に合っているらしい。

「誰か水を持ってきてるんじゃないの？」

「オレは知らねえし、あったとしてもお前らに分けてやんない」

「水筒なら馬車で見たぞ」

ウェッジも首を横に振る。どうやら、全員が武器しか持ってきていないようだ。

「ジユリ、取ってきてくれないかな」

トーマの発言を無視して、ジユリは黙々とモンスターの目を潰していく。

「ジユリー、お願いだよ」

「水ならそこに腐るほどあるじゃねえか。頭だけじゃなくて目えまで腐ってんのかお前」

仕方ないと諦め、トーマは立ち上がった。

「ごめん、ちよつとの間だけ抜けちゃうけど」

「ハアア？ お前ふっざけんよ、水なんて甘えだ甘え。誰がお前のケツ拭くと思ってやがんだ」

「ならば赤毛、貴様が行け。農民よりも貴様の方が足が速い。はっは、使い走りにはうってつけだな」

「ぜってえいかねえから」

「何を！？ 水だ水だと言うから、俺の喉は乾いてしまったぞ。誰か水を持てい！」

「叫んでたら余計に喉が乾いちゃうよ」

言い争いをするトーマたちのもとへガランが走り寄ってくる。

「遊んでんじゃねえぞ。何をがたがた言ってるんだお前ら」

「水だ」

「……何？ 言っただろうが、必要なもんは用意しろってよ」

レオは苛立ち紛れにコウグングニを切り払った。

「ガランっ、貴様はいつも一言が足りないのだ！ 何故！ 水を持って来いと言わなかった！？」

八つ当たりを受け、ガランは困ったような顔を作る。

「誰かが取りに行けば良いだろ。向こうが落ち着いてきたから、そ

の間は俺が穴を埋める」

「おっしゃ、行つてこいよ根暗」

「……………何故俺が」

「いや、行くのはどう考えてもお前だろ、ジユリ」

指差され、ジユリは砂を踏みつけた。

「なんでだよ、お前らよつてたかつてどうしようもねえな！」

「お前だつて喉乾いてんだろ。一番に飲んで良いから、ほら、ダツシユだダツシユ」

他の三人にも見つめられ、ジユリは観念する。両手を上げて、気だるそうに歩き始めた。

「何をやっている、走れ赤毛！」

「しょうがねえなあお前らは。…………で、どうだ。何とかなってるか？」

ガランは言いながらも、決して手は止めない。彼の両腕が振られる度に、数匹のコウグンガニが息絶えていく。

「大丈夫だと、思います」

「頼りねえなあ。まあ、しゃあねえか。それよりどうだ、食堂の奴らとは仲良くしてるか？」

「あつ、はい、とても良くしてもらってますよ」

「戦場とは思えん会話だな」

レオに突っ込まれて、ガランは違いないと、笑った。

「しかしガラン、貴様の剣力は素晴らしいな。どうだ、俺の下に仕えると言つのは。貴様なら、バーンハイトの家でも充分に働けると思ふぞ」

「そりゃあ嬉しいね。俺とお前がギルドをクビになったら、雇つてくれ」

「うむ、心得た」

話をしているが、モンスターの相手をする事も忘れていない。

楽なのか、そうでないのか分からない任務だな、と。トーマはぼんやりと思った。

周囲の敵を粗方片付けたガランは後方のザッパ班の様子を見遣る。どうやら、少し苦戦しているようだった。

「疲れも、ピーク超えてんだろぅなあ。ちょっとあっちを手伝ってくる。ここは任せたぞ」

トーマたちが返事する間もなく、ガランはコウグングニの死骸をすり抜けていく。

「……ガランさんって、すごい人だったんだなあ」

「一番すごいのはこの俺、レオ・バーンハイトだな」

レオは大剣を振り回して血振りをした。彼は、だらだらとしながら戻ってくるジユリを認めて喚き出す。

「貴様あ何をのんびりとお！」

その声が聞こえたのか、ジユリはわざと歩幅を狭くし、ゆっくりと歩き始めた。これ見よがしに水筒の蓋を開け、美味そうに飲んでみせる。トーマは溜め息を吐き、レオの肩を叩いた。

「駄目だつてば、そうやってジユリの気を引くような事を言っちゃあ」

「俺は赤毛の気を引くような事を言っておらぬ。奴が俺の神経を逆撫でしているのだ！」

ぶんぶんと剣を振るレオから離れ、トーマはもう一度息を吐く。

全員に水が行き渡り、トーマたちは生き返ったような気分を味わった。

「うむ！ これならまだまだ戦えそうだな！ 平伏せ雑魚どもっ」

「水飲んだだけじゃねえかよ。マジ、単純」

コウグングニの数が確実に減っているのを感じて、トーマの腕に力がこもる。

「……………いけそうだ」

「やっぱ大した事ねえな。ハッ、所詮力ニだぜ力ニ」

先が見えれば気力も持ち直す。トーマたちは歩くのに邪魔になる

モンスターを端へと退かしながら戦線を維持していた。相変わらず四人の息が合っているのかいないのかは分からないが、ゴブリン戦での経験は確実に活かしている。危なくなれば声を出し、そうでなくても他の者のフォローに回れるようになっていた。

このまま何事もなく終わる。四人は確信し、後方から上がった叫び声を耳にした。

コウグングガニの住みかは海底にある。その為に、どのギルドもモンスターを根絶やしに出来なかった。上がってきたモノだけを駆除するしかない。

「うおおおっ？」

「何だこいつ！？」

最後方にいたザッパ班、その数名が水底から現れたモノを見て驚愕する。現れたそれは確かにコウグングガニだ。ただ、大きさは桁が違っていた。

「足狙えっ、足だ！」

このモンスターの体長にはばらつきが生じる。しかし、人間よりも大きなコウグングガニは滅多に出現しない。ザッパ班は幸か不幸か、珍種と遭遇してしまったらしい。

コウグングガニは脅威ではない。だが、大きさが変われば話も違ってくる。あくまで一般的な体長を有しているならばの話だ。規格外のモンスターは常識に当てはまらない。行動パターンも凶暴性も並のそれとは違う。

ザッパ班は出現したコウグングガニへ勇敢に切り掛かり、立ち向かうが、全ての得物は堅固な外皮を貫けずに弾き返されてしまった。モンスターは缺状になった腕を振る。逃げ遅れたモノが吹き飛ばされ、砂浜を転がった。

「武器を拾え、囲んで叩くぞっ」

コウグングガニの腕自体が得物であり、ただ振り回されるだけでも

容易には近付けない。そうしている間にも、他のモンスターが脇をすり抜けていった。

全員がその姿を確認していた。突如現れた巨大なコウグンガニ、その脅威をもはつきりと見てしまう。

「こっ、こっちに來たらどっ、どうしよう……？」

トーマは慌てふためいていた。彼はモンスターを叩くのも忘れて頭を抱える。

「……………死者は出ていない。向こうで仕留めてくれれば助かるが」
「悠長な事を！ 出るぞ者ども、奴らには任せておけん。バーンハイトの威光を示す時が来た！」

突っ込もうとするレオを押さえ、トーマは喚いた。

「あんなの無理だつて！」

「がたがたうるせえっつーの。イノシシよりマシじゃねえか」

「む？ イノシシとは何だ？ 俺は知らんぞ！」

ウェッジも頷く。彼は巨大なコウグンガニに狙いを定めるが、諦めて近くにいたモンスターを射た。

「貴様ら二人きりでこそそそとつ、何故俺も混ぜなかった！？」

「ただの依頼だつてば！ ジュリからも何か言つてよう」

ジュリは面倒臭そうな顔をしていたが、何か思いついたように口元を歪める。彼女は胸元を開け、トーマに向かってしなを作った。

「ああ、すげえ良かったぜ……」

「不埒な！ 斬る！」

「ややこしくしないでよ！」

ザッパは禿頭を指で叩き、トーマたちから視線を外した。

「流石は期待のルーキーだな。ああまで余裕を見せ付けられるとは。コビャクとプリカが推した理由も分かるな」

ガランは溜め息を吐き、恨めしそうに大男を睨む。

「皮肉のつもりかよ」

「いや、俺はそこまで気が利いていない。……しかし、アレを相手するにはまだ早いだろう」

「全くだ。行くぞ、二人で仕留める」

両手に剣を構え直し、ガランは標的を見据えた。

「懐かしいな。昔はこうやって、お前と組んでいたか」

「はっは、老けたな」

「かもしれん」

ガランが駆け、後ろにザッパが続く。彼らがコウグンガニを相手するのが分かり、ザッパ班は道を開け始めた。

モンスターが鉄を振るう。ガランはそれを片手の剣で受け止めた。次いで、片側からも鉄が迫る。彼はもう片方の剣でそれを防いだ。

「腹が見えてんぞ！」

「見えている」ハンマーを振りかぶり、ザッパは、おおと声を上げる。放たれた一撃はコウグンガニの腹に激突した。

力が抜け、モンスターが後ろに倒れていく。ガランはその場から離れ、ザッパが得物を大きく振り上げた。

班長二人が見せた鮮やかな連係に士気は上がる。それを見越してザッパは周囲に呼び掛けた。

「残りは雑魚だ。一時間以内に片付けるぞ！」

野太い声がそこかしこから上がり、ガランは舌打ちする。彼は統制のとれたザッパ班が羨ましかった。

「……老けたな」

「俺が、か？」

「いや、俺がだ。一撃で仕留められると思ったんだがな。それに比べて、お前にはまだキレが残っている」

「あれだけやれりゃあ上出来だろ。ドラゴンとでもタイマン張るつ

もりかよ」

ザッパは難しそうに唸り、

「それも良いな」

と、呟いた。

この後、奮起したザッパ班によって一時間掛からずに、セイテン海岸からコウグンガニが一掃された。

モンスターの死骸を集めて焼き、あるいは打ち寄せる波が引き受け、海岸線には色が戻り始める。セイテン海岸が元の姿を取り戻した時、既に陽は暮れ、辺りには漆黒の帳が落ちていた。

「こん中で一泊かよ……」

毛布を被るジュリは心底から嫌そうに口を開く。

「バーンハイトたる俺が馬車で夜を明かすとは……認めん、許せんぞ……！」

「仕方ねえだろ、全員疲れてんだし、暗くて道も見えねえんだ。良いから寝ろ。もしくは黙れ。明日は早いんだからな」

言つと、ガランは早々に寝息を立てる。トーマは彼を見て、横になった。馬車に乗るぐらいなら、歩いて帰る方がマシかもしれないと思いつながら。

四人が諦めて目を瞑ろうとした時、馬車の出入口に誰かが立った。大きな人影だったので、中にいた四人には確かめる必要がなかった。ザッパである。

「ガランは起きているか？」

「あ、ついさつき寝ちゃいました」

「……寝つきの良さは変わらんか。なら、お前たちが受け取ってくれ。依頼料を持ってきた」

差し出された袋に、出入口近くにいたトーマが手を伸ばす。が、その手は払い除けられる。起き上がったジュリが、引ったくるようにしてそれを取った。

「ヒヒツ、まいどー」

「ちゃんと分けてよ？」

「早いもん勝ちだろうが」

袋を開け、ジュリが金を数え始める。彼女はいつになく生き生きとしていた。

「ふん、金に目が眩むとはな。情けないぞ赤毛」

「アハハー、そうだな情けねえな」

「……………聞いていないな」

「俺を無視するなっ！」

「もう遅いんだから、大きな声は出さないでよ」

ザッパは彼らの様子を見遣り、楽しそうに笑った。巨軀に見合った、大きな声だった。

「今日は助かった。改めて礼を言う。……………明日は予定があるか？」

問われ、ジュリを除いた三人は顔を見合わず。

「食堂の使用許可も下りている。今日の成功にかこつけて宴会を開こうと思っとな。好きに飲み食い出来るぞ。お前たちもどうだ」

「良いだ——っ!？」

トーマがレオの口を塞いで、誤魔化すように笑う。

「……………申し訳ないが、遠慮させてもらう」

「む、そうか」

「つつ、疲れが溜まってるので！ 明日はゆっくり休もうと思います！」

「ははは、そうか。いや、年を食うと疲労を酒で誤魔化すようになる。そうだな、若いのだから自然に回復を待つのも良い」

ザッパは満足そうに頷いた。

「では、若者と語らうのは次の機会までの楽しみにしておこう。ゆっくり休むと良い」

時間が経ち、ザッパの足音も聞こえなくなった頃、ようやくになってレオは解放される。彼はトーマの襟元を掴んで揺さ振った。

「貴様あ！ 俺を殺す気か！ その上誘いを断りおって！」

「だっ、だつて、だつて、こないだの事を忘れたの？」

「……む。いや、忘れる筈はない。よもや食堂にあれほどの強者が潜んでいようとは思ひもなかったぞ」

「……………全く懲りていなかったな」

トーマは首肯する。人の上に立つ者とは、やはりあそこまで豪快でなければ勤まらないのだろうか。

「とにかく、ほとぼりが冷めるまでは食堂で騒いだら駄目だつて」

「仕方あるまい。農民の意見に従うのは癪だが……」

「ジュリも分かったよね？」

「うっせえなあ分かつてるって」

「……………明日は食堂を使うのは避けた方が良い」

「では街に行くぞ！ 俺はうまいものが食いたい！」

「あ、最近新しい屋台が出てるって聞いたよ」

「決まりだ！」

結局、ジュリは分かっていたいなかった。翌日、トーマたちが食堂へ行ったがらない理由を彼女が知るのには、ザッパ班に捕まってからの事である。

オーダーメイド

大陸の中央、唯一の街であるルートナインには人が集まる。夢、金、人。その全てを求め、得る為に。

「あの……」

午前中とはいえ、街の広場には多くの者が集まっていた。人間、亜人、老若男女を問わず、人々は行き交い、そこに留まる。屋台を出す者は声を張り上げて客を呼ぶ。ダンジョンに挑む者は協力者を募る。

「申し訳ありません……」

その中に、目に見えて浮いている女がいた。その女はプレートアイマーを着込んだ男の肩を指で突くも、無視されてしまう。彼女はうな垂れ、別の人間に声を掛けた。

「ウチの坊ちゃんを見掛けませんでしたか？」

女の見てくれは決して悪くない。長く、透き通る金髪。肌は白く、きめ細かい。顔立ちも整っており、切れ長の瞳もマイナス要素にはならない。悪いのは、格好だった。申し訳なさそうに頭を下げる彼女は、メイド服を着ていたのである。様々な格好をした者たちが行き交う街だ。彼女もさして珍しくはないかもしれない。ただ、初心者丸出しだったので、誰も関わり合いになりたくなかったのである。

「はあ、どうして誰もお話を聞いてくれないのでしょうか」

女は天を仰ぎ、疲れた風に息を吐いた。

トーマとレオは依頼を終えて部屋に戻ると、それぞれのベッドに突っ伏した。

「……………どうだった」

「うつん、疲れた」

トーマの答えに満足したのか、ウェッジは読書の続きを始める。

「ぐああ、あの店主……街中を駆けずり回せおつてえ……！」

レオたちが受けた依頼は、一言で言えばお使いだった。依頼主は宿屋の店主であり、足りなくなつた雑貨や食材を買いに、二人は街を奔走したのである。その依頼を紹介したのがウェッジだった。

「もう二度と受けんぞ。モンスターを討伐するならともかく、この俺が、レオ・バーンハイトが使い走りなどと」

「また来てねって言われてたじゃないか」

枕に顔を埋め、トーマは呟く。彼の体のそこかしこから悲鳴が上がつていた。

「行かん！」

「そう言えば、ジュリもどこかに行つてゐるのかな」

「……………買い物だらう。それよりも」

ウェッジは本を置き、トランプに手を伸ばす。彼はそれを器用にシャッフルすると、扇状に広げてみせた。

「……………借りを返しておかないか？」

「ええ、またポーカー？　僕、アレから勝つたためしがないんだよなあ」

アレ、とは、食堂での手伝いの時を言っているのだらう。当然だ、トーマはジュリに勝たせてもらつたのだから。彼女の協力がなければ、彼はツーペアを作るのに精一杯なのである。

「ふん、俺は受けて立つぞ。勝負事となればバーンハイトの腕の見せ所だ。農民、二人ではつまらん。貴様もやるのだ」

ちなみに、レオは賭け事が弱かった。

「お金を賭けるのはやめとかない、かな？」

「ならば何を賭けると言つのだ。勝者は富を得て敗者は財を失うのが世の常であらう」

「……………罰を与えれば良い」

「罰？」

ウェッジは小さく頷く。

「なるほど。では、最下位は一位の命令を一つ聞く、で、どうだ。有無は言わせんがな」

「うっん、それぐらいなら。でも、お金を渡せとか、無理なお願いは嫌だよ」

「良いだろう。射手、カードを配れ」

カードが舞い、レオがベッドの上に立ち上がる。トーマは不機嫌そうにカードを置いた。

「……………まさか」

「これが俺の実力だ！　では農民、俺からの命令だ。単身でドラゴンを討伐してみせよ！」

「無理だよ」

トーマはカードを片付けると、ベッドの上であぐらをかく。

「王の命令は絶対だろう！？」

「無理なのは駄目だって最初に言ったじゃないか。もっと、僕にも出来そうな事にしてよ」

「畑を耕せ、か？」

「僕を馬鹿にしてるでしょ！」

トランプをシャッフルしながらで、ウェッジは二人の様子を見物していた。

そこにジュリが帰ってくる。彼女は両手で袋を抱き、言い争うトーマたちに冷めた視線を送った。

「うるせえっつーの」

ぼそりと呟く。レオは聞き逃さなかった。彼はトーマを指差し、それから、ジュリを指差す。

「農民っ、奴を！　赤毛を始末するのだ！」

「また無理な事を……………」

「無理ではない！　せめて、奴の捻じ曲がった性根をまっすぐに矯

正しろ！ それ以外の命令はせんぞ！」

トーマの視線を受け、ジユリは挑発的な笑みを見せた。やれるものならやってみると、彼女の目はそう言っている。

「無理だよ」

ジユリを相手にするならドラゴンを相手にした方がマシだと、トーマは俯いた。

「しかし、罰を与えねばつまらん。射手、何か思いつかないか？」

「……………一時間、正座」

「ハッ、地味じゃねえか。罰つてのはさあ、もつと見てるこつちが愉しくなれるもんじゃねえと」

水を得た魚のような、ジユリは心底から愉しそうに笑い、会話に割り込む。

「全裸で食堂。んで飯食つて来いよ。オレらはそれを見とくからさ」

「そつ、そんなのやだよ！」

「バア力、嫌じゃない罰なんかあるかよ。良いから黙って脱げや田舎もんが」

それでも、トーマにとっては無理だった。彼はズボンを脱がそうとするレオを蹴飛ばして、ドアの前まで逃げる。

「ぐつ、ご、おおお……………レオ・バーンハイトの顔に傷が……………」

「あ、ご、ごめん。でも、急に脱がそうとするからだよ？」

「往生際がわりいんだよ！ あーあ、マジで冷めるっつーの。もう良いよ、一日中穴あ掘ったり埋めたりしてれば」

部屋の中の空気が白け出した時、外が騒がしくなったのをトーマは感じた。耳をそばだてると、どうやら、階下で何かが起きているらしい。

「……………何かあったのか？」

ウェッジもドアに目を向ける。

「ん、何か、皆が下に向かつてる。……………か、火事かも」

「おお、丁度良い。では農民、貴様が様子を見に行け。それを罰にしてやるつ。ふふん、俺が寛大で助かったな。心の底から感謝を捧

げろ」

「えー？ つまんねえよー。もつとさー、お、そうだ。お前、プリカッて女にちよっかい掛けて来いよ」

「よっ、様子を見に行つてきます！」

これ以上何か言われる前に、トーマは部屋を飛び出した。

トーマは寮を出て、突風同盟の玄関口へと向かう。人波がそちらに流れているからだ。誰かに話を聞こうかとも思ったが、目的地は近い。亜人の背を追い掛けながら、彼は見えてきたものに目を向ける。そこには、人だかりが出来ていた。中心にいる誰かを取り囲むようにして、ギルドの者たちが野次を飛ばしている。

「喧嘩かなあ……」

呟くトーマの顔には不安の色が浮かんでいた。しかし、ただの喧嘩でここまでの人数が動くものだろうか。ざっと見渡しても、十や二十ではきかない。もっと多くの人間が集まってきた。人垣を掻き分ける気概は、彼には備わっていない。ぴよんぴよんと跳ねながら、何が行われているのか確かめようとする。何度かジャンプを試みた後、トーマはあつと驚いた。中心にいたのは、ザッパだったのである。彼の装備はセイテン海岸にいた時とは違い、簡素なものだった。手には、以前持っていたよりも小振りなハンマーが握られている。彼の視線は、トーマからは反対側の相手に注がれていた。

「みつ、見えない」

ザッパが相手をするほどの者がここにいるのだろうか、トーマは内心で訝しがる。巨大なコウグングニすら仕留めた男に、ただの人間が勝てる道理はない。

様子が覗えないので、トーマは近くにいた男に声を掛ける。知らぬ顔同士だったが、同じギルドのメンバーである。それに、男は熱に浮かされて機嫌が良さそうだった。

「あの、何が起こってるんですか？」

「入団試験だよ、試験」

「試験？」

「ああ、時期は過ぎちまつてるけどさ、どうしてもって事でやっこそさんが頼み込んだらしい」

何が起こっているのかに対しては理解出来たが、トーマは首を傾げる。

「試験って、戦うんですよね。ええと、ザッパさん？」

「だから面白いんだよ。その、試験を受けたいって奴がさ、ザッパさんを指名したらしい。一番強そうだから、そういう理由だよ」

好戦的で挑戦的で、とにかく、自分には真似の出来ない事だと、トーマは震えた。

「どういう人なんだろうか……」

「さあ、良くは知らないけど、ちょっと変わった女って聞いたぜ。少なくとも、俺はこの街で見掛けた事のない奴だな」

「女の人か！？」

トーマには信じられない。その女も女だが、挑戦を受けるザッパもザッパである。トーマはますます気になって、高く、高く跳ぼうとした。

ザッパはハンマーをゆっくりと下ろす。目の前の女を見て、溜め息を吐きたくなるのを堪えた。

突風同盟の実力者、ザッパの前に立つのはメイド服を着た若い女である。彼女は空手であり、気負う様子もなく、微笑さえ浮かべていた。

女はここに来るなり、自分をギルドに入れろと要求してきたのである。彼女に応じたのがザッパ班の人間だった為に、ザッパが出張る羽目になったのだ。

「……ウチに入るには試験を受けてもらう必要がある。どうしてもと言う事で曲げた訳だが」

メイド服の女は頭を下げる。慣れた仕草であった。格好だけのメイドではないらしい。

「感謝しております」

「うつむ、俺は不器用でな。叩いて壊す事しか出来ない。試験の内容も、そうなってしまうのだが、それでも構わないと？」

「感謝しております」

スカートの裾を摘み、女は大袈裟に頭を下げる。舐められているのだと、ザッパは感じた。

「ウチでなければならぬのか？」

「でなければ、意味がありません」

につこりと微笑まれる。ザッパは苦い顔をしながらハンマーを肩に担いだ。おお、と、周りから歓声上がる。どちらも逃げられないなど、彼はここで覚悟を決めた。

「では、始めるとしよう」

輪が遠く広がる。試験とは銘打たれているが、実際はただの戦闘行為、一対一の私闘に近い。ザッパの気は乗らなかった。彼が得物を構えた時、女の姿が視界から消えていた。観衆がざわめく。女は低く身を沈ませていた。翻るスカート。たなびく髪。彼女の拳はザッパの腹部に、突き刺さるようにめり込んでいる。

「……………な、に？」

ザッパは得物を取り落とさなかったものの、膝をついていた。女は追撃を加えようとして、振り上げた手を下ろす。

「その手は、もうやめてくれとの意思表示でしょうか」

小さく頷くと、ザッパは呼吸を整えてから立ち上がった。

「……………え、何？ 嘘だろ」

「ザッパさんが負けたってのかよ……………」

短時間で終わった戦闘が信じられないと、誰もが口々に呟く。突風同盟の幹部が手も足も出せなかったのだ。ギルドの者たちは、未だ呆けてしまっている。

「……………身体強化の魔法を使えたとは。いや、老いた。済まないな、

油断をしていた」

「こちらこそ。意識を刈り取るつもりだったのですが、良く鍛えられていますね」

褒められても嬉しくはない。ザッパは苦笑し、女をまっすぐに見つめた。

「試験は合格ですか？」

「やはりやめたと言われても、無理に引つ張るぞ。まさか、君のよくな逸材が街に埋もれていたとはな」

「実は、ここには先程到着したばかりなのです」

ザッパは目を見開く。

「人を探しています。ここは最大のギルドと聞いていましたから、力になってもらえると思いました」

「なるほど、人、か。では、早速力になろう。答えられるかはその者の名前次第だが」

女は静かに微笑み、告げた。

「レオ・バーンハイト。私が仕える主人です」

どうやら、女の捜し物はすぐに終わるらしい。ザッパは大笑して、周囲の者は皆首を傾げた。

騒ぎが静まり、入り口前からは人がいなくなり始めた。トーマは所在なげに立ち尽くす。結局、彼の位置からでは何も見えなかった。気付けば、ザッパが負けて、女が勝っていた。その結果を耳にしただけである。

「……世界って広いんだなあ」

「お前の頭は悪いんだなあ」

後頭部を叩かれて、トーマは飛び上がるほどに驚いた。振り向けば、にやにやと笑うジュリがいる。

「様子を見に行けって言ったくせに音沙汰なし。ガキの使いも出来ねえんじゃあ殴られたって文句言えねえだろうが」

「あ。ご、ごめん」

すっかり忘れていたので、トーマは素直に頭を下げる。

「で、何か面白い事でもあったのかよ」

「さっき、入団試験を受けたいって人が来てて。女の人なんだけど、ザッパさんをやつつけちゃってさ」

「はあ？ あのでけえのを？ ハッ、面白くねえの。んな奴がいんのかよ」

レオが聞いたらうるさいだろうな。トーマがそう思ったのと同時、寮から走ってくる彼を見つけてしまう。

「おーそーいーぞー！ 貴様、一人だけで何を楽しんでた！」
「うっせえのがきやがった」

トーマは駆け寄ってきたレオに揺さ振られる。

「さあ吐け農民、子細漏らさず余さずにな！」

「や、やめてよ……話すから……」

先程の出来事を詳らかに話していると、レオの表情が浮かないものになっているのに、トーマは気付いた。むしろ、彼ならば強者の存在に喜ぶ筈である。

「……えーと、具合でも悪いの？」

「いや、その女、確かにメイドの格好をしていたのだな？」

「僕はちらつとした見てないけど、そうだったって、皆が言ってたよ」

レオは諦めたかのように俯き、周囲を見回す。

「メイドはどこに行ったか、見てはいないか？」

「多分、ザッパさんがそこらを案内していると思うけど、どこに行っただかまでは……」

「……そうか。では、俺は街に行く」

トーマとジュリは訝しげにレオを見遣る。彼は背を向けて、ゆっくりと歩き始めた。

「帰りは遅くなる。くれぐれも気にしてくれな」

「あっ、う、うん。い、いってらっしゃい」

「だーれが気にすつかよ。……しっかし見たか？ あ顔、飯抜きでもあはならねえぜ」

「うーん？ 何かあったのかなあ」

ジュリは体を伸ばして、寮の方へ足を向けた。トーマはその後を追いつける。

「ジュリは気にならないの？」

「別にー。ほつとけよ、うつせえのが消えて清々するぜ」

「ん、うん。レオにだって、一人になりたい時があるよね」

もしかして、あのメイドと関係があるのだろうか。トーマは色々考えをめぐらせるが、答えは出そうになかった。

オーダーメイド・2

「結局、帰ってこなかったなあ」

ベッドの上で寝そべりながら、トーマはぼんやりと天井を眺める。彼の呟きを聞いて、ジュリは嫌そうに顔をしかめた。

「……黙れよ。今何時だと思ってんだてめえ」

明かりの消えた部屋の中、ジュリはトーマをねめつける。暗がりでも、その視線はしかと定まっていた。だから、彼は申し訳なさそうに頭を下げる。

「うるさいのがいねえんだから良いじゃねえかよ。は、何だよ、奴隷根性染みついてんなあ、お前」

「そんなじゃないよ」

レオが帰ってこない。何故、彼が出て行ったのか、トーマにその理由を推し量る事は出来ない。ただ、帰りを待つだけだ。それを奴隷根性と呼ぶのなら好きにしろと、彼は半ば投げ遣りに思う。

「レオの事、心配じゃあないの？」

「全然」言い切って、ジュリは頭から布団を被った。これ以上話し掛けるなど言われているようで、トーマは釈然としないながらも口を閉ざす。目を瞑っても、眠りは中々訪れなかった。

隣を歩くザッパを瞥見して、ガランは笑みを噛み殺した。消灯時間の過ぎた寮内の廊下を、二人は足音を立てて歩く。

まだ、信じられなかった。

試験と称した私闘じみた行為にザッパが一对一で負けるのも、彼を負かしたのがメイド服を着た女だというのも、だ。

「色々と本気だよな？」

「何の事だ」

「本気で相手して負けたのかって聞いてんだよ」

ガランがそう言っていると、ザッパは自嘲気味に口角をつり上げる。

「何を言っても言い訳にしか聞こえなくなる。俺の負けだ。それで良い」

「あーあー、馬鹿にされちまうぜ」

「構わん。それより、彼女を任せたぞ」

立ち止まり、ザッパはとある扉を指し示した。

「ご指名だもんなあ。尤も、俺じゃなくてレオの、だけど」

「……あの者、レオ・バーンハイトの侍女ではないのか？」

女の発言や行動から考えても、恐らくはそれが最も近い。しかし、ガランは納得のいっていないような顔を作る。

「どうした？」

「いや、何でもねえよ。とりあえずウチについて説明して、明日の朝に他の奴らと顔合わせだな」

「よろしく頼む。一応は俺の推薦になるからな」

頷き、ガランはノブに手を置いた。どうして自分の班には一癖ある連中が集まるのか。彼は溜め息を吐き、ゆっくりとそれを回した。

目が覚めると、鼾をかくレオを認めた。トーマは胸を撫で下ろして、ベッドから落ちたシーツを彼に被せ直してやる。が、すぐに蹴られて床へと落ちた。どこで時間を潰していたのだろう。誰かに迷惑を掛けていなければ良いのだが。そんな事を考えている内、ウェッジが体を起こした。彼は平生と変わらない所作で室内を見回す。

「……………帰っていたのか」

「いつの間にかね。全然気付かなかった」

「……………戻ったのなら気にする必要はない。二人を起こして食堂に行こう」

頷き掛けるトーマだが、寝相の悪いレオと、常に機嫌の悪いジユ

りを起こすのは躊躇われる。

「じゃあ、僕はレオを……」

「俺は朝の空気を吸ってくる」被せるようにウェッジは言った。彼は手早く身仕度を済ませると、そそくさと部屋を出ていってしまう。
「ずるい！」

ウェッジは振り向かなかった。今の声でもレオたちは起きない。眠りを妨げられた彼らの怒り、その矛先が自分に向くのを想像して、トーマは息を吐く。しかし、目覚めない限りは一日が始まらない。彼は気合いを入れて、レオの頬を叩いた。

「……ん。んん」

「朝だよー、ごはんだよー」

レオが寝返りを打つ。起き上がる事はなく、彼は深い眠りについたままだ。トーマは諦めてジュリに目を遣る。難易度でいえば、彼女の方が遥かに困難だった。レオにしたように叩く訳にはいかない。ので何度も呼び掛ける。

「ジュリーー、朝だよー」

ジュリは規則正しい寝息を立てている。流石に、眠っている間は大人しいな、と、トーマはぼんやりと思った。何だか起こすのが申し訳なく思えてくる。

「第一、起こす理由がないじゃないか……」呟いてみたが、起こさなかったら起こさなかったで文句を言われたのを思い出した。どっちにしても面倒な二人だった。

「てい」レオには枕をぶつけておく。顔面に乗っているので、息苦しい筈だ。暫く放っておけば勝手に起き上がってくるだろう。トーマはジュリの枕元に近づき、彼女の顔にも枕を乗せるべきか悩んだ。悩んで悩んで悩みぬいて、どうして自分がこんな事をしなければいけないのかと腹が立ってくる。

「ジュリのバカ」

ウェッジが戻っても起きなかったら、その時にどうするか考えよう。トーマは自身を納得させてレオの様子を見る。くいくいと、服

の裾を引つ張られた。振り向くと、形容しがたい表情をしたジュリと目が合う。「おはよう」と言えば、彼女は目を見開いて体を起こした。

「てめえ、オレが寝てる間に何気持ち良くなるうとしてんだよ、ああ？」

「……何の事？」

「誰がバカだつて聞いてんだよ田舎もんが。耳が使えねえなら引きちぎっても構わないよな」

地獄耳。トーマは思わず呟いた。

「手え出さなかったのは褒めてやんよ。そんな時はお前、オレのおもちやになつてたからな」

今だつておもちゃみたく扱われているではないか。トーマは喉元まで出掛かった言葉をぐつと飲み込む。

「ジュリが起きないから悪いんだ」

「ハアア？ オレの勝手だろうが頭イカれてんのかお前。つかさ、起こせなんて頼んでねえぞ。気味が悪いんだよ」

「起こさなかったら文句言うたろ」

「言うかよ」

「前は言つたじゃないか！」

わざとらしく耳を塞ぐと、ジュリは大義そうにベッドから下りた。「あーあーあー、朝からムカついてしょうがねえ。その辺の野郎で憂さ晴らすか」

「レオー、ジュリも起きたよー」トーマはジュリを無視してレオに声を掛ける。

彼女はそれが気に食わないのか、自分の枕をトーマの後頭部に投げ付けた。飽き足らず、よろめいた彼をベッドに押し倒す。

「いきなり何すんのさ!？」

「お前生意気なんだよ！ 立場つてのを教えてやるって言ってんだ！」

「言つてない！」

「逆らうんじゃねえよ。黙ってりやイイ思いさせてやつからさあ」
全身に鳥肌が立つ。トーマはもがくが、ジュリは彼を逃さない。
「貴様らあ！ 朝から何を喚いている！」

騒ぎで目が覚めたのか、レオはベッドの上に立ち上がっていた。
彼はトーマたちを見下ろす。

「……不埒だぞ貴様ら」
「良いから助けてよっ」

四人揃ったので、トーマたちは食堂の隅にあるテーブルを確保した。利用者はまだ少ないが、時間が経つにつれて増えてくる。彼らは新人だったので、年長者に強引に席を取られる事も多々あった。早めに行動するのを心掛けていたのである。

「最近さあ、朝飯食うの早くなってるねえ？」

「そう言えば、俺もそんな気がするぞ。おい農民、どうなっている？」

「気のせいだよ」

先輩が怖いのではなく、レオとジュリが問題を起こすのが怖いというトーマとウェッジの判断だった。

「まあ良い。俺の朝餉を持ってこい」

「自分で取ってきなよ」言っ、トーマは席を立つ。レオはその後ろを追い掛けた。

「……………行かないのか？」

ジュリはあくびをしてから、気だるそうに口を開く。

「空いてねえんだよ。めんどいし、あいつらのを適当に食う」

「……………そうか。む？」

食堂の入り口に知った顔がいるのに気付き、ウェッジは目を見開いた。

ガランと、知らない女が連れ立っている。彼は食堂内を見回していた。誰かを探しているようで、ウェッジは何となく嫌な予感がし

た。そして、目が合う。手を振られて、ウェッジは目を瞑った。

「よう、全員揃ってるかー？」

「勝手に座るんじゃないよ」

「素っ気ねえぞジュリ。おう、トーマたちもそろそろ戻ってくるな」

「そうですか」

ガランは椅子を引いて座ったが、メイド服を着た女はその場に立ち続ける。

「……何だよ、こいつ」

ジュリはメイド服の女を指差した。指を差された彼女は恭しく頭を下げる。

そこに、トーマとレオが戻ってくる。

「あれ？」

トーマは、メイド服の女を見つけて、不思議そうに首を傾げた。

「もしかして、昨日の？」

「ああ、ご覧になっておられたのですね」

「え？ えっと、ご、ごめんなさい」

「何謝ってんだよバーカ」

くすくすと、メイド服の女は小さく笑う。

「申し遅れました。私、本日付けでガラン班の一員となります。レ

イ――」

「――レイネ？ 何故、お前がここにいるのだ？」

レオは呆然としていた。だが、驚愕の色はない。見なくなかったものを無理矢理に見せられたかのような、そんな表情をしている。

彼と、レイネと名乗ろうとした女性を除いた者は、口を開くのを躊躇っていた。

「答えるレイネ。何故、ここにいるのだ」

トレーをテーブルに置き、レオはレイネをねめつける。

「私は坊ちやまの御側付きなれば」

「……今すぐに帰れ」言って、レオは食事を始めた。

「そ、そういう風に言っのはどうかと思うよ。あの、レイネ、さん

？」

「レイネ、で、結構です。ええと……」

ガランは両手を合わせて、静まり返った空気を叩く。

「よし、自己紹介だ。レイネ、お前も座れ。いつまでもそうされると、落ち着いて飯を食えねえだろ」

「では、失礼します」

自己紹介が終わった後も、ガラン班の空気はどこかおかしかった。重くはない。だが、話し辛いのだ。トーマはレオとレイネの顔を見比べて何か言おうとするが、諦めて、スープに目を落とす。

「……………二人はどういう関係なんだ？」

「射手、勘違いするな。こいつと俺は無関係だ」

あまりにも下手な嘘だが、しかし、ウェッジは笑わなかった。

「吹いてんじゃねえよ。大方、お前んとこのメイドなんだろうが」

「黙れ赤毛。貴様には関係ないだろう」

「はっ、そりやそうだ。確かに関係ねえよ。……メシはマズくなるけどな」

「ふん、それこそ関係ない。味は変わらんからな」

無駄に陰悪である。

「坊ちやま」レイネが立ち上がった。

「口元にパン屑が付いております」

「触るなっ、いつまで子供扱いするつもりだ!？」

「ですが」

「ですが!？ ふざけるなっ、どうせレナードの指示だろう。俺に構うなっ、その為に、俺は……!」

立ち上がったレオは注目されているのに気付き、つまらなさそうに鼻を鳴らす。

「くだらん。ガラン、自己紹介とやらは終わりだろう?」

返事を待たず、レオは食堂を出て行った。彼が残した食器を見て、

トーマは溜め息を吐く。

「私が持つていきますから」

「え、そんな、レイネさんがやらなくても……」

「いえ、私は坊ちゃんまの御側付きですから」

トーマの手からトレーを取り上げると、レイネはカウンターまで持つていき、ガラン班の面々に頭を下げる。彼女はもう振り返らず、食堂を辞した。

「どこ行くんだろ」

「デカいのを追いかけるんじゃないの？ 見上げたチューセーション
だなあ、あははっ」

「……言い方、トゲがあるよ」

「あ？ 何お前？ あ、そっか。ご主人様を取られて面白くないんだろ？」

ジュリはけらけらと笑う。付き合いきれなくなつて、トーマも席を立つた。

レイネがガラン班に入ってから、何事もなく、数日が過ぎた。ただ、波風なく、無事平穏な日が続いたという訳ではない。示し合わせたかのように、誰もが、何もしなかっただけの事である。波風を立てないで、問題から目を逸らしたに過ぎない。

トーマは漠然とした不安を抱え込んでいた。最近、レオの機嫌が悪いのである。自分に対する八つ当たりも、他の人間に対する態度も、いつもより刺々しく、痛々しかった。

その理由は分かっていて、レイネ、である。彼女が何かをした訳ではない。だが、レオはレイネを疎ましく思っていた。

疎ましく、思っていた。

「……そうなのかなあ」

自室のベッドから天井を見上げる。トーマは目を瞑り、思索に耽った。

少しずつではあるが、ガラン班は纏まりつつあったのだ。手を伸ばせば、望んでいたものが手に入ったのである。決して、レイネのせいではない。だから、トーマは起き上がった。じっとしていても何も変わらない。話を聞こうと思い立った。

「あの、トーマ様はいらっしゃいますか？」

扉がノックされる。トーマは跳ね起き、

「レイネさん？」

扉を開けた。

平生と変わらず、メイド服を着たレイネは頭を下げ、それから微笑む。最近になってトーマは気付いた。彼女の笑みが、作り物めいたものに見えている事に。

「どうかしたんですか？」

「ええ、実はトーマ様にお話が……あ、申し訳ございません。あの、お時間、よろしいですか？」

トーマは首を縦に振る。内心、都合が良いとも思っていた。

「ジュリ様とウェッジ様は、いらっしゃらないのですか？」

「うん。二人は出かけてる。えっと、何なら呼んできた方が、良いの、かな」

「いいえ、問題ありません」

「そう？　じゃ、ええと……」トーマは部屋の隅に置かれている木製の椅子をレイネに勧める。彼女はそれを断ろうとしたが、トーマは強引に座らせた。そうしないと、落ち着かなかったのである。

「トーマ様」

うつんと唸り、トーマは難しそうな顔を作った。

「あの、その、様つてのはやめてもらいたいですけど」

「ですが、トーマ様は坊ちゃまのご友人です」

「いつ？　良いよ、僕、偉くないし。呼び捨てでも何でも、でも、様つてのは、むずむずするから」

「むずむず、ですか」

「う、うん」

「では、トーマさん。これで、いかがでしょう?」

さん付けでも呼ばれ慣れていない。トーマの背中が少しだけ痒くなる。

「大丈夫だと、思います。それで、話っているのは」

「坊ちやまの事です。この数日、坊ちやまとトーマさんの様子を陰から拝見させていただきました」

冗談ではなさそうな口振りだったので、トーマは口を挟めなかった。

「突風同盟で、いいえ、この街で、坊ちやまとの仲が一番良いのはトーマさんです」

「……そうかなあ」

「間違いありません。そこで、あの、トーマさんにはお伝えしておくべきだと思いました」

レイネは視線を手元に落とし、それから、ゆっくりと口を開いた。

オーダーメイド・3

前を歩いていたジュリが部屋の前で立ち止まった。ウェッジは彼女を無視してドアを開けようとするが、手首を捕まれてしまう。体格こそウェッジの方がジュリに勝っているが、こと、腕力に関しては彼女が上だった。

「……………折れてしまう」

ジュリは口の端をつり上げて、嫌らしい笑みを浮かべている。何かよからぬ企みでも思いついたのだろう。ウェッジは諦めて吐息を漏らした。

「あの田舎モン、女連れ込んでやがる。良い度胸じゃねえか、ナニすんのかさ、ここで聞いてようぜ」

「悪趣味だぞ」

「黙ってる素人が」

ドアに耳を近づけると、ジュリは舌なめずりして喉の奥で笑みを殺す。彼女の行為を悪趣味だと言ったが、ウェッジもその場を動かなかった。

「トーマさんは、坊ちゃんをどのように思っていますか？」

「え？」

レイネに問われて、トーマはうつんと唸った。……………レイオは自分にとって何なのだろう。

レイオ・バーンハイトは、トーマが街で最初に会った人物で、わがままで、うるさくて、偉そうにしている、モンスターの群れに嬉々として突っ込む考えなしで、八つ当たりをして、寝相が悪くて、寝起きも悪くて……。そこまです、トーマは溜め息を吐いた。

「……我が強くて、子供っぽい、ですか？」

「え、ええと」トーマはレイネに遠慮して、考える振りを見せる。全くもって、彼女の人物評は的を射ていた。

「お氣になさらず。事実です。」

「でも、僕はレオは良いやつだと思います。確かに強引だし、野菜は食べないし、すぐに怒るけど、だけど、僕は、友達だと思ってます。この街で出来た、最初の」

尤も、向こうがこちらをどう思っているかは知らない。レオはトーマをどう見て、何を思っているのか、トーマには分からないのだ。

「レオは、僕の事を子分みたいに言ってるけど」

「それは坊ちやまの照れ隠しです。ええ、きっと」

「そうですかあ？」

頷き、レイネは笑みを浮かべた。見る者の心を穏やかにするようなそれである。

「でもやつぱりすごいです。メイドさんなんて僕の住んでるところにはいませんでしたから。ええと、バーンハイトって、お金持ちなんです」

「やはり坊ちやまは、何もお話しておられませんでしたか」

トーマは小首を傾げた。レイネは胸に手を当て、彼の瞳を見つめる。

「坊ちやまがここへ来たのは、バーンハイトの家を助ける為なんです」

「お家を助ける？」

「バーンハイトは、確かに栄華を極めたでしょう。名高いプレイヤーであり、多くのモンスターを討伐し、財を成したでしょう。ですが、時間とは移ろい、力とは衰えるものなのです。お恥ずかしい話ですが、今、バーンハイト家は力を失いつつあります」

それでも、トーマには今ひとつレオの家の事情を分かっている。彼の家が落ちぶれたとして、シアンの村での生活よりは安定しているのだから。だが、自分と同じなのかもしれない。そう、トーマ

マは思う。レオも、自分の家を、生活を守る為にここへ来たのだ。

「そして、坊ちやまはバーンハイトを見返すつもりなのかもしれない
せん」

「……どういう意味、なんですか」

「バーンハイト家の現当主、レオナルド・バーンハイトは病床に就
いております。跡継ぎが必要なのです。かつての栄華を取り戻す、
そんな力を持った者が」

「それって、レオじゃないんですか？」

レイネは首を振り、床に視線を落とす。

「坊ちやまは確かに長子です。しかし、嗣子……跡継ぎではないの
です。次の当主は坊ちやまの弟に当たる、レナード・バーンハイト
様と目されておりますから」

「えっ、でも、レオがお兄さんでしょう」

「我が強く、子供っぽい」

先程よりもはっきりと言い切ると、レイネは視線をトーマに定め
た。

「仮にもバーンハイトの長子である坊ちやまがここへ一人で来ら
れたのも、そういった事情のせいなのです。率直に申し上げてしま
うと、坊ちやまは期待されていません。好きにやらせておけとい
うのがバーンハイトの総意なのです」

「でも、それって……」

「坊ちやまの性質もそうなのですが、もっと大きな問題があります。
坊ちやまは、魔法を使えないのです」

あつと、トーマの口から呻きのような声が漏れる。以前、レオが
魔法についての話を聞いた時、良い顔をしなかったのを思い出した
のだ。

「代々、バーンハイトの当主は魔法を使い、剣を用いてきました。
そうして、プレイヤーとして名声を、富を得たのです。……魔法が
使えずとも、モンスターを倒す事は可能です。ですがバーンハイト
の当主にはなれません。そう、決められているのです」

「そういう、ものなんですね」

「古く、長い家というのは伝統を重んじます。過去に囚われ、形式に縛られるのも無理はありませんが」

言いよどむと、レイネは息を吐き出す。

「レイネさんは、どうしてここに？ レオを連れ戻しに来たんですか？」

「あ、いいえ、私は、坊ちやまの御側付きですので」

つまり、心配だったのか。トーマはそう納得し、少しだけ、嬉しくなる。レオにだって味方がいるじゃないかと思ったのだ。

「……そういうことだったんだ」

レオがバーンハイトの名前を出し、自らを長子と触れて回り、貪欲なまでに成果を求めるのは、まだ、諦めていないからなのだろう。この街で一番のギルド、その一番になれば、認めてもらえると思っているのだろう。魔法が使えなくても、剣一つで当主になれると、そう、信じているのだ。

「あの、どうして今の話を僕に？」

「あら、トーマ様だけにではありませんよ。……今の坊ちやまは、何だか、昔の坊ちやまみたいです。とても楽しそうで、とても自然に感情を表にしておられます」

「……？ いつもあんな感じじゃあないんですか」

「バーンハイトの者がいる時は、常に気を張られておりますから。弱みを見せないよう、付け込まれないように必死なのでしょう」

想像出来なくて、トーマは首を捻った。

「トーマさん、一つだけ、お願いがあります」

レイネは椅子から立ち上がり、深く、頭を下げる。

「あ、あの」

「これからも、レオをよろしくお願いします」

その時、トーマにはレイネの姿が母親の姿と重なって見えた。

トーマは、レオが複雑な事情を抱えているのだと思い知る。だからと言って、可哀想だとは思わなかった。ましてや、彼が好き勝手

に、わがままに生きてても良いのだとは到底思えない。誰にだって不幸があり、背負うものがあるのだ。

「僕がやる事は変わらないと思います」

「ええ」

「僕は、レオの友達だから」

「……ええ」

レイネが部屋からいなくなつてすぐ、ジュリとウェッジが戻ってくる。トーマはベッドの上で彼らを出迎えた。

「おかえり、遅かったね」

「うるせえ話し掛けてんなよバーカ」

悪態をついたジュリは自分のベッドの端に腰を下ろし、トーマを睨む。彼は困つたように笑つた。

「……腹は減つていないか？」

「あ、そう言えばお昼、まだだつて。二人はもう食べたの？」

ウェッジは首を振り、腹を摩る。

「じゃあ食堂に行こうよ。レオも誘いたいけど、どこかで見なかった？」

「知らねえよあんなヤツ。どつかでぴーぴー泣いてんじゃねえの？ お家に帰りたいよー、とか。ほつといて行こうぜ」

「そう言えば、ジュリって街に住んでるんだよね。寂しくないの？」
無言で立ち上がると、ジュリはトーマをねめつけた。

「ナニが？ ん？ 言ってみ」

「お母さんやお父さんと離れて暮らしてるじゃないか。だからさ」

「オレの事情に突っ掛かつてくんじゃねえよ。オマエ、何様？ 人様を詮索するほどエライのかよ。あ？」

「ぐ、ごめん。怒らせるつもりはなかったんだけど……」

鼻を鳴らし、ジュリはトーマの横に座り込む。彼女はトーマの額を殴り、彼を押し倒した。

「……………乱暴だぞ」

「根暗、オマエだって誰かがガタガタうるさけりやイラつくよなあ？ おい田舎モン、オレとオマエは違うんだよ。オレには優しいママもいなけりや守ってくれる強いパパもいないんだ。寂しいかだつて？ 舐めた事抜かしてんじやねえぞ、甘ちゃんが。『かわいそう』なんて思つてんじやねえだろうな。泣かすよ、オマエ」

「寂しくないの？」

「だからっ、そう言つてんだろぅが！」

「でも、泣きそうな顔してる」

「な……………！ て、てめえはっ」

ジュリが拳を振り上げ、トーマは短く叫ぶ。

「ご、ごめんっ、だから痛いのはやめてよっ」

「どこまでオレをム力つかせりや気が済むんだ、畜生！」

ベッドから飛び降りると、ジュリは自分の毛布に包まって奇声を上げた。

「今日のジュリはいつも増しておかしい」

「……………トーマ、お前とは相性が悪いんだ。いや、良いと言つベきか？」

「ええ？ それより、早く食堂に行こうよ。ジュリー、ほら、君もお腹空いてるでしょ」

「今はそつとしておいた方が良い」

ウェッジは分厚い本の表紙を撫で、窓に目を遣った。

声が囁れ始めたジュリを無理矢理に引っ張る形で、トーマたちは食堂に向かつていた。その途中で、レイネが中庭に出るのが見えて、彼らは足を止める。

「おい、あの女も誘うつもりじやねえだろうな」

「え、嫌なの？」

「そんなんじやねえけど、オレとは合わないんだよ、あいつ」

「あはは、なんか変な声」

ジユリはトーマの顔と、彼の下半身を交互に見比べた。

「み、見ないでよ!」

「アハハ、情けねえ声」

「……………声を掛けなくて良いのか?」

ウェッジに促され、トーマは口を開いた。が、声が出なかった。

中庭には、彼女を待ち受けるように仁王立ちするレオがいたのだ。

「ど、どうしよう、また喧嘩するんじゃない?」

「高みの見物と行こうぜ」

「俺に話しかける勇氣はない」

傍観者と化した二人を見遣り、トーマはおろおろするだけだった。

「あら坊ちゃま、何か?」

「ふん、化けの皮が剥がれつつあるな。言葉遣いや立ち振る舞いにはもっと気を付けると良い。貴様とてバーンハイトを背負う者だと言う事を忘れるな」

「私はその名前を捨てた者ですから」

レイネは悪戯っぽく笑う。

「ふざけるな。バーンハイトとして生まれた以上、死ぬまでバーンハイトであり続けるのが当然だろう」

「坊ちゃまは逃げ出したではありませんか。そのお名前から」

「……………違う。俺は……………」

「私からも逃げ出しますか?」

レオは口を開きかけるが、俯き、つまらなさそうに息を吐く。

「俺に恨み言を伝えに来たのか?」

「ご冗談を。私は坊ちゃまの御側付きです。それに、坊ちゃまはバーンハイトの為になると思って飛び出したのでしょうか?」

「ぐ、分かっていると言っのか。まあ、良い。特別に許す」

「感謝の極みです、坊ちやま」

レイネは恭しく頭を下げてみせた。

「それで、お屋敷にはお戻りにならないのですか」

「まだ、俺は何も成し遂げていない。もつと力を蓄える必要があるのだ。この街で強者と剣を交え、この島で怪物を剣の錆とする。そうして……」

「……レナード様は、坊ちやまに会いたがっておられますよ」

「ふん、次期当主としての自覚が足りんな。言わば、俺は敵なのだぞ」

「レナード様はお優しいお方ですから」

「情など捨てるものだ。他者の上に立ち、愚者を切り捨てなければバーンハイトの当主にはなれん。レイネ、今すぐ戻り、そう伝えておけ。そして二度と戻ってくるな」

お断りしますと告げ、レイネは腕を組む。仕える者と相對するに
してはそぐわない仕草だが、レオは咎めなかった。

「ご自分でお伝えになられてはどうでしょうか。尤も、今戻ればレナード様に捕まって逃げ出せなくなるでしょうけれど」

「尚更戻れん。……ふん、息災であるらしい。どうやら心配は要らんようだな」

「あら、心配していたのですか？」

「いや、していない。俺はあいつが嫌いだからな。魔法を使える者は、皆、嫌いだ。いつか、この世の魔法使い全てを俺の前にかしずかせてみせる」

強がりにはしか聞こえなかったので、レイネは苦笑する。第一、レオにそんな真似は出来ないだろう。力が足りないのではなく、彼の心根はどうしようもないほどには捻くれていないのだから。

「……坊ちやま、ここでの暮らしはいかがでしょう？ 豪華な家具に囲まれた生活を懐かしいとは思いませんか？」

「思う。俺には相応しくない街だ。家畜の小屋にも劣る部屋で寝泊りし、その餌にも似たものを食べ、薄汚いダンジョンにもぐり、

泥に塗れながらモンスターに食らいつく日もある」

「では、お屋敷に」

「戻らん」

断言し、レオは腕を組む。

「理由を聞いても？」

「先も言っただろう。俺はここでやる事がある。お前が何を言ったとしても、俺はここを動かんぞ」

「強情」

「口の利き方がなっていないぞ、メイドの分際で」

「何を話してるんだろ」

「なんだよ、オマエだって興味津々じゃねえか」

「だって、気になるじゃないか」

「………まるで家族のようだな」

ウェッジが呟いたので、トーマは彼に向き直った。

「御側付きって言ってたから、レオが小さい頃から一緒にいたんじゃないかな。家族みたいに見えるのも当たり前だと思うよ」

「かもしれない」

「レイネ、お前は戻らなくても良いのか？」

「ええ、レオナルド様からの許可は頂いておりますから」

「………そうか」

「坊ちやまと一緒になら戻っても良いのですが」

レオはレイネの言を鼻で笑い飛ばす。

「なら、お前も当分の間は屋敷に戻れんな」

「あら、いつかはお戻りになられるのですか」

「ここに骨を埋めるつもりはない。そうだな、ドラゴンの首でも拳

げれば、屋敷の者に見せて回る為に戻るとするか。まずは……」

「ところで坊ちやま」

「俺の話を遮るな」

「これは失礼を」

わざとらしい所作で頭を下げると、レイネはたおやかな笑みを作
つてみせた。

「ここでの暮らしは楽しいですか」

「新鮮であるのは確かだ。下々の生活に触れるのは、屋敷にこもり
きりでは味わえん」

「それだけですか？」

レオは訝しげにレイネを見つめる。

「まあ、坊ちやまは素直ではありませんから」

「何が言いたい？」

「もう言いました。さ、坊ちやま、食事に参りましょう。皆様もあ
ちらでお待ちになっております」

「……何？」

「あ、こつち向いた」

「………どうやら、レイネさんは最初から気付いていたようだな」

「食えねえ女だぜ。お、デカブツが走ってくるぞ」

「なんか怒ってるように見えるけど」

トーマたちはいつでも逃げられるように身構えた。

「貴様らあ！ 盗み聞きとは良い度胸だ、そこに直れ！ 矯正して
くれる！」

「うわ、やっぱり」

「農民つ、まずは貴様の卑しい性根からだ！」

ウェッジとジユリは既に逃走を始めており、トーマからは、彼ら
が食堂に逃げ込む背中が見える。

「おつ、置いてかないでよう！」

「逃げるな！」

トーマはレイネに助けを求めるが、彼女は心底から楽しそうに笑うばかりだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9258/>

風の終わり

2011年9月5日03時30分発行